名古屋大学大学院国際言語文化研究科 年報 2009

L & C bulletin

vol. 1

名古屋大学大学院国際言語文化研究科年報 Bulletin *L&C* 2009 vol.1

contents

02 「新（米）研究科長から」前野 みち子

03 特集インタビュー
平井勝利名誉教授（国際言語文化研究科・初代研究科長）インタビュー
「わたしたちは現在から未来をテーマにする」

イベント紹介：
06 ・平成 21 年度国際言語文化研究科公開講座「言葉と文化の国際交流」吉村 正和
07 ・国際シンポジウム「恐怖からの思考―現代世界を解明する」松本 伊瑳子
08 ・国際シンポジウム「異文化としての日本」胡 潔・杉村 泰
09 ・国際シンポジウム「観られる身体、読まれる欲望、多様化する家族―ジェンダーの事象と表象」越智 和弘
10 ・大学間連携企画「現代日本の音を求めて～作曲家下山一二三を迎えて～」藤井 たぎる

著作紹介
11 ・田野勲著『祝祭都市ニューヨーク―1910 年代アメリカ文化論』長畑 明利
12 ・楊義・張中良・中井政喜著『二十世紀中国文学図志』星野 幸代
13 ・福田眞人著『北里柴三郎：熱と誠があれば』福田 眞人
14 ・籾山洋介著『日本語表現で学ぶ　入門からの認知言語学』李 澤熊
15 ・籾山洋介・鷲見幸美・李澤熊、他著『ことばのダイナミズム』鷲見 幸美
16 ・恩田満著『占い師「売卜先生」の講話』恩田 満

研究報告・近況報告
17 ・「研究紹介」山口 庸子
18 ・「近況報告と今日的課題」磯野 正典
19 ・「近況報告」日下部 直美
20 ・「異なる世界をつなぐということ―国際言語文化研究科で得たもの―」杉本 一正
21 ・「新米大学教員の日々」武市 久美
22 ・「目からうろこが落ちる日々」田中 京子
23 ・「近況報告」坪松 かおり
24 ・「大学院で学んだ「何か」について」服部 達哉

新任教員紹介
25 ・「自己紹介に代えて」尾関 修治
26 ・「趣味の効用」玉岡 賀津雄

２００９年度オープンキャンパス・ポスター発表
27 ・「ヘルバルト教育学の一試み―樋口勘次郎の『修身童話』―」坂本 麻裕子
28 ・「授受文、受身文、移動文の習得―「視点」の観点から―」謝 文儀
29 ・「初対面場面における自己開示の日韓対照研究―自己開示の内容による分類を中心に―」全 鍾美
30 ・「現代日本語における複合動詞の意味形成―構文理論による分析―」野田大志
31 ・「不同意表明における理由の表し方―JSL・JFL という学習環境の違いを中心に―」ピナンソッティクン ポラニー
32 ・「中国・西双版納タイ族の男性産婆―出産と伝統医療との関わり―」磯部 美里
33 ・「英国映画産業の社会的機能に関する一考察―社会・エンパワーメント志向性の再考―」木村 めぐみ
34 ・「モダン・ビートとは誰か―Mr.Beat におけるビート・ジェネレーションの再評価」杜河内 友里
35 ・「『Dir』における H. フォーゲラーの庭に関する季節描写の考察」白川 茜
36 ・「現代中国語の方位詞に関する研究―“上”と“里”を中心に」寺澤 知美
37 ・「『わたしのアントニーア』の二つの女性像　―キャザーのイントロダクションにおける戦略―」藤井 爽
38 ・「再魔術化と陶酔：１９６０年代サイケデリックス文化を対象に」渡辺 拓哉

39 ２００８年度提出修士論文題目一覧

41 ２００８年度提出博士論文題目一覧及び要旨
42 ・『現代中国語の指示表現に関する研究―“这 / 那”の用法を中心に―』高 芃
43 ・『在日ブラジル人若年層による日本語借用―ブラジル人学校児童生徒の場合―』重松 由美
44 ・『コミュニケーション能力育成の視座からみた既存日本語教材と教師の意識に関する実証的研究―いわゆる禁止表現を例として―』清 ルミ
45 ・Contextualizing Nankivell （ナンキベルのコンテクスト化）Ronald Geoffrey STEWART
46 ・『14-16 世紀日本絵画のイコノロジー―雪舟筆「四季山水図巻」を中心に―』Agnese HAIJIMA
47 ・『日本語学習者の空間表現使用における簡略化と言語転移―格助詞「に」と「で」の使用を中心に－』蓮池 いずみ
48 ・『创られる「民族」：现代中国にける民族政策とマイノリティ集団の変容―四川・雲南両省濾沽湖地域納日人集団を例に―』哈斯額尔敦
49 ・When the Fourth Wall Broke Down: AIDS Plays and Their Messages against Homophobia 藤田 淳志
50 ・『「武士道」と「植民地」からみた新渡戸稲造の思想研究』船津 明生
51 ・『PT におけるプロファイリング手順の構築―第二言語としての日本語習得の場合―』Judith PRESTON
52 ・『ディケンズの歴史観―『バーナビー・ラッジ』、『二都物語』、『子供のための英国史』研究―』矢次 綾

新（米）研究科長から

前野 みち子
（日本言語文化専攻比較日本文化学講座教授）



「新」研究科長といっても、この四月に任に就いてから早くも半年近くが過ぎ去った。新米の研究科長は日々「何をした」とか「片づけた」とか「仕上げた」とか「達成した」とかいう自覚が全くないまま、時には冷や汗、時には背筋の寒い思いに耐えつつ、かつまた恐ろしいスピードでひたすら時間が過ぎ去っていくというほとんどスリラーかホラーに近い体験を重ねつつ、不思議なことにとにかく今日までしぶとく生き延びている。我ながら強靱な神経、とはとても言えず、悪夢にうなされ、眠れぬ夜を過ごし、明け方わずかな眠りを貪って、10分違いにかけた二つの目覚まし時計のけたたましい音（一つは電子音、一つは昔ながらのリリリリッという音）に、寝床からガバッと粘着テープを剥がすような不気味な音を立てて身を引きはがし、寝不足の疲れた顔でふらふらと大学にやってくる日のほうが実際多いのである。

とはいえ、笑っても泣いても時間は過ぎていく。わたしたちの国際言語文化研究科も平成10年4月に設立されてから既に11年が経ち、もはや「新しい研究科なので」という言い訳が成り立ちにくい時期にさしかかった。この辺りでそろそろ、研究科はこの十年間何をしてきたのか、何をなしえたのかをしっかり問い直し、その認識を共有した上で、将来に向かってこれから何をなしうるのか、という青写真を描く必要があるだろう。

それでは、国際言語文化研究科は何をしてきたのか、あるいは何をなしえたのか。昨今の大学に厳しく求められている「自己評価」はほとんど数値データのみを「客観的な」根拠資料と認めている。たしかに数値で測ることができるものは多いが、教育成果、研究成果が本当に数値で、あるいは少し譲って数値のみで測れるものかどうかはかなり怪しい。それにもかかわらず、19年度、20年度に研究科の評価担当者として引きも切らぬ評価の荒波に揉まれ曝されたわたしは、被害者であると共に加害者ともなった。つまり、同僚と学生の皆さんをもろともにこの荒波に引きずり込んで、一緒に溺れてくれとばかりに、数値の向上をひたすら強要したからである。曰く査読誌掲載論文の本数、曰く書評された著作数、曰く海外学会発表回数、曰く国際シンポジウム開催回数、曰く、曰く、曰く……。こうして、第一期中期目標期間が終わる今年度までに、研究科はまだまだ一人前とは言えないまでも、一応右肩上がりに数値を伸ばしてはきた。しかし、これは果たして研究科の「なしえた」成果と言えるのだろうか。

その一方でわたしは、自分の指導生に向かって事ある毎に、問題は中味、と言い続けてもきた。人文系の場合、以前ならば、論文・著書の数が少なくても充実した仕事をするタイプの研究者がかなりいたし、誰もみなその存在を認めていたのではなかったか。研究分野によって評価の物指しは違って当然なのに、一体いつ頃からこんな画一的な物指しが押しつけられ、大手を振ってまかり通るようになったのか。このように問う人文系の研究者は今なおかなりいそうに思える。にもかかわらず、全体としては結局、有無を言わせぬ評価の波に呑み込まれ、喘ぎ、最低限のノルマをこなそうと躍起になり、あるいはこのメカニズムに即した「業績」を挙げようと血道をあげる空しいサイクルに、なぜ少しの歯止めもかけられないのか。時間をかけてゆっくり熟成したといったタイプの、豊かな実りの重みをもつ業績が産み出される時代はもうとっくに過去のものになったのだろうか。

こんな問題にいつまでもかまけ、納得のいく答えが出るのを待っていたら、たしかに研究科は見る間にずぶずぶと沈んでしまうだろう。だから選択肢はただ一つ、「評価」の荒波に揉まれつつ水面から首を出して浮かび続けられるような泳法を身につけること、つまり、数値目標をそこそこクリアしながら、数値には表せない教育と研究の「中味」の充実を図ること。研究科は今、やむなく二重生活を強いられているのだから……。しかしそれはジギルとハイドの二重生活ではない。現代の大学で要求されるアトム化したジギル博士の仮面の背後に、「中味」のある教育と研究から自生する（はずの）知的紐帯に基盤をおいたもう一つの研究科を打ち立てることはできないものか。

うーん、またしてもオプティミスト夢想家のまぼろし、悪夢のハイド氏よりずっと現実から乖離した「青写真」ならぬ妄誕にすぎないではないか、と叱責する声が四方から聞こえてきそうな気もたしかにして、肩身の狭い思いにまたじっとり冷や汗をかくのが関の山なのかもしれない。

特集インタビュー

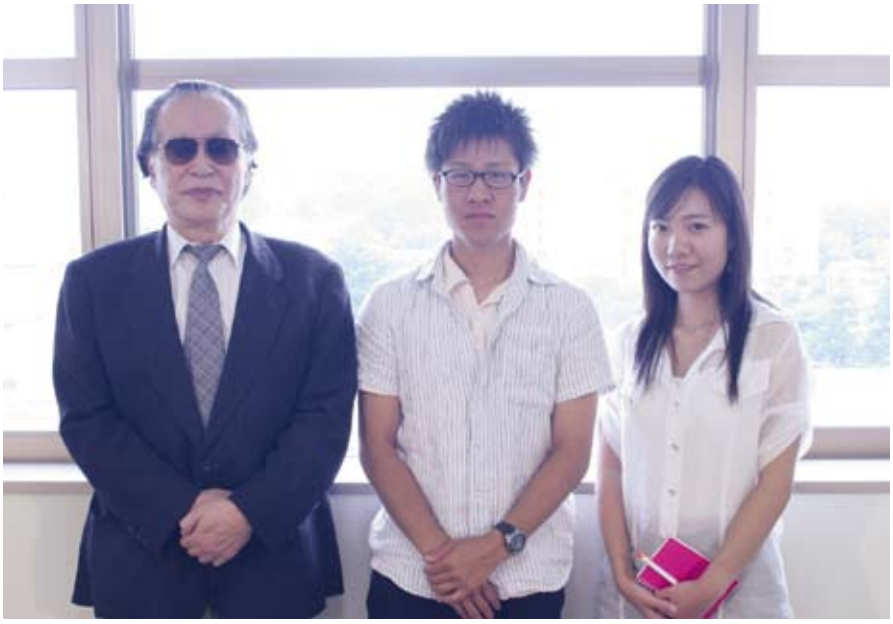
平井勝利名誉教授（国際言語文化研究科・初代研究科長）インタビュー

「わたしたちは現在から未来をテーマにする」

●学生インタビューアー（以下、学生）
今回は、国際言語文化研究科が発刊する年報「L&C Bulletin」の創刊にあたって、特集企画としてこの研究科の設立に大きく貢献なさった平井先生にインタビューさせていただきたいと思います。インタビューアーとして、メディアプロフェッショナル・コース１年の内山裕幾と趙世華が担当させていただきます。今日は主に、この研究科の設立の経緯とこれからの方向性についてお伺いしたいと思います。

さっそくですが、この研究科が設置される歴史を振り返っていただきたいのですが。

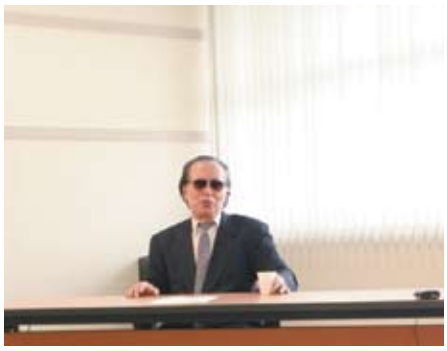
●平井先生
はい、これを語ると相当な時間が必要になります（笑）。実はこれにはたいへんドラマチックな経緯がございまして、できるだけ掻い摘んでお話しさせていただきます。
名古屋大学で外国語を担当する教員というのは、戦後、教養部というのがございまして、そこに「外国語系列」と呼ばれるものがありました。外国語系列の一部として、言語の基礎的な研究、および教育への応用というのを旗印に掲げ、昭和 48 年の 10 月に全学の学内共同利用施設といたしまして語学センターというのが設立されたのです。当時はまだ教養部長がセンター長を兼務しておりました。その後、昭和 54 年に学内の組織的な改革がありまして、外国語系列の教員と語学センターの教員が一緒になって「総合言語センター」という名称の組織になりました。このときはセンターという名称が大流行りでして、総合言語センターという名称になり、応用言語科学部門、地域言語科学部門、比較言語科学部門という三つの部門で出発しました。このセンターという名前を付けたことが、後の大学院研究科新設の大きな障害になったことはあとから触れます。語学センターの頃から、そして総合言語センターの時期を含めて、内部の組織として将来計画委員会というのがありましたが、まったく機能していませんでした。概算要求というのがありますが、部内で検討しましても、それはすべて本部止まりで、文科省、当時の文部省にはいっておりません。ですから組織としてありましても、学内的には教養部の付属センターという認識でありました。平成元年になりまして、実は私は将来計画委員長を仰せつかったわけですが、その当時からやはり教員というのは、大学の教育と研究の両方に携わる組織に所属するのが当然だと、ずっと考えていました。なぜならば、研究所等は別にしまして、大学で教育のみに責任を負うような組織が存在するのはおかしいと。研究というものは、研究の成果を教育にフィードバックすることによって深まるものでありますし、教育というものは、研究の成果を教育に反映することによって質的に高まるものなんです。車でいえばそれらは両輪だと。したがって大学の教員というのは、教育と研究の両方に携わる組織に所属するのが当たり前なんです。わたしはそのことをずっと信条として持っておりました。ですから将来計画委員長を仰せつかった時に、私はまず学部構想を考えました。しかし当時すでに七大学（旧帝国大学）では学部ではなく、大学院に教育研究の重点をシフトするという、いわゆる大学院重点化の方向性が出ておりました関係で、学部レベルでの学生増は文部省は OK しない。つまり、既存の学部の学生定員をどこかから引っこ抜かない限り、学部の新設はないわけです。そこで学部設置は断念しまして、研究科を構想しました。



左から平井勝利名誉教授、内山裕幾くん（春名ゼミ M1）、趙世華さん（池側ゼミ M1）

●学生
ありがとうございます。その国際言語文化研究科という構想では、文学部などの既存の学部から独立した形で立ち上げることが必要であったということだ思うのですが、その理由はどういったところにあったのでしょうか?

●平井先生
私は将来構想というのは個人的には好きでしてね。なにか夢を描いてそれを実現するという、まあ私の個人的な好みというのが多分にあります。それで 4 月に将来計画委員長になって早々に、当時の大学を巡る情勢であるとか、世の中でどういった人材が求められているかなどを自分なりに判断しまして、研究科の設置概要などを記した設立計画書を作りました。そして部内の教授会でオーサライズしまして、大学本部に出





して文部省交渉すべく学内調整に奔走しました。しかし本部の反応は、総合言語センターに大学院研究科ができるなんてあり得ない、の一点張りでした。

●学生
それは全国的に見ても、教養部の語学教育組織が大学院になることなんてあり得ない、という反応ですか?

●平井先生
そうです。しかし、あまりに私がしつこく文部省へ研究科設置の主旨説明に行かせて欲しいと言い続けたものですから、本部主計課もそこまで言うなら一度行ってみろということになり、合計4回文部省に出向きました。最終は平成2年の2月14日で、ついにGOサインを得ました。当時、昭和50年代後半から名古屋大学では総長を委員長とし、文系学部長を委員とする文系の研究所を構想する委員会があり、平成3年度の概算要求では、最終的には環太平洋研究センターを設置するという方向で話がまとまっていました。ところが、2月16日に文部省からODAつまり、政府開発援助を背景とする研究科構想をしないか、という話が総長に持ちかけられたわけです。その当時、国際開発協力関係の研究科は、広島大学にしかありませんでした。そこで、環太平洋研究センターではなく、名古屋大学でも広島大学に続く研究科を設置しないか、という話になったわけです。急遽当時の経済学部長を委員長とする大学院研究科設立委員会が発足しました。そこで誕生したのが、国際開発研究科です。一つの大学から同じ年度に二つの研究科を新設するというのは概算要求には馴染まないということになり、ちっぽけな部局であった我々が下りざるを得なかったというわけです。あの動きがなかったら、国際言語文化研究科は平成3年度には誕生していたことになります。
この一連の動きののち、ほどなく私は将来計画委員長の座を降り、以降、将来計画委員会は開店休業状態になりました。ただ、この時点での変化としましては、平成2年4月の言語文化部設置があります。これは、文部省との折衝で、文部省はセンターに研究科を設置することは如何なものかと判断していることが明らかとなったため、総合言語センターを言語文化部に名称を変更いたしました。
そのあと出てきましたのが、いわゆる七大学の学部レベルの大講座化と大学院の重点化でした。文部省も、学部単独ではなく、関連する部局との連携を推奨しておりましたので、文学部から、学部レベルの統合、その翌年には研究科レベルの統合の誘いかけがありました。しかし、結局は文学部内で意見一致が見られず、その話はご破算になりました。そこでいよいよ独自で研究科を設置しようという機運が言語文化部内でも高まってきたのです。平成8年に私が言語文化部長になり、本格的に再度大学院構想に着手しました。ちょうどその年、文部省より、福島忠彦氏が事務局長に着任され、部局まわりをされた際、私は言語文化部の現状と将来について私の思いを語らせて頂きましたが、その年、早速、文部省折衝をセッティングして頂き、事務局長、経理部長、主計課長が第1回の折衝よりご同行頂き、「この案件は平成10年度の名古屋大学概算要求の重点項目だ」ともおっしゃって頂きました。これによって、平成10年に名古屋大学大学院国際言語文化研究科が誕生することとなったのです。

●学生
当時の事務局長らに力説された研究科設置の意義とはどのようなものだったのでしょうか?

●平井先生
先ほど言いました通り、大学の教員は教育と研究にかかわる組織に所属することによって、研究は深まり、教育の質も高められるものだという私の信条を申し上げ、構想している大学院研究科は、既存のアカデミズムを横断し、言語文化の新しいパラダイムを構築していく研究を推進し、国際化社会や国際協調の前線に立って、活躍し得る人材を育成しようとしていることを力説いたしました。

●学生
アカデミズムの横断というのがまさにこの国際言語文化研究科のコンセプトだと思うのですが、それについてもう少し説明していただけますか?

●平井先生
私たちの分野で一番近いのは文学部ですから、それと比較します。研究科の設置概要にも記しましたが、文学部というのは過去から現代までのことを主として研究する。一方、我々は現代から未来に向けた課題を研究するということです。また文学部では文献学的な研究が中心であるが、我々はフィールド・ワークに重きを置く。同時に既存の学問領域を横断した研究をする、というのが他の研究科と違うところなんです。

●学生
そういった方向性の中にいわゆる産学社会連携などのコンセプトも含まれてくるのでしょうか?

●平井先生
平成15年に、言語文化部の廃止と並行して研究科は完全に一本になり、新たにメディアプロフェッショナル論講座を設置したわけですが、そのあたりの経緯とからめてお話しいたしましょう。

平成 10 年の研究科発足から 5 年目にあたる平成 15 年は完成年度になるため、研究科発足当初からロードマップを決め、すべての教員が基幹講座への所属が可能であることを当初から示していました。これによって、通常は怪文書が飛び交うような教員配置も当時の教授会ですんなりと了承され、本当にありがたかったです。
一本化を迎える上で、なにか目玉が欲しいと考えていました。ご承知のとおり名古屋は文化的にも経済的にも関東と関西の谷間に位置しており、現代の名古屋には良きにつけ悪しきにつけ一番を目指さないという気質があるように思えます。しかし、名古屋のマスコミ、メディア関係の OB らが集う懇談会があり、そこではこの地域をメディアのメッカにしたいという議論が日々行われていることを知りました。私にこの情報をくださったのは宇佐見先生です。私は名古屋にきて 30 年になりますが、名古屋が日本一を目指そうという話は初めて聞きました。そして関係者との接触を繰り返し、なんとかこれを具体的な形にできないかと構想し始めたわけです。
当時の松尾総長が大学院一本化と講座設置を名古屋大学の重点項目として後押しして下さったこともあり、文科省折衝も無事クリアし、平成 15 年にメディアプロフェッショナル論講座が誕生しました。もし私がもう数年名古屋大学にいたならこれを専攻化し、その可能性を広げたことでしょう。理工系なら産業界との連携は容易ですが、文系ではなかなかそうはいきません。しかし、このメディア分野であればこの研究科が拠点となり得ます。世界に向けて情報を発信する名古屋・東海地区のベースキャンプになれるはずです。そしてメディアとアニメを含めた産業化・企業化ができますね。研究科のみなさんにはぜひそういう可能性についての模索を行ってもらいたいですね。
平成 15 年の一本化の際には、研究科の将来を標榜する上で、ジェンダー論講座にも力を入れました。これが可能となったのも研究科のみなさんが私に厚い信頼を寄せて頂いたからだと思います。本当に今でも感謝しています。
一通り計画が現実のものとなったある時、ある先生とこんな話をしていました。「本当に自分のことは全然考えなかったなぁ」と。自分のことを考えていたら、駄目だったでしょうね。みなさんからの信頼のおかげで、実現が難しいと言われたことを一つずつ現実のものにしていけたのだと思っております。メディアプロフェッショナル・コースなどの「売り」を大切にしながら、今後はさらに飛躍する研究科を目指していただきたいですね。



●学生
お話を伺ってまいりますと、研究科設立はひとつの事業だと感じました。

●平井先生
事業は個人ではなにも実現しません。個人の力量なんて知れています。多くのみなさんの知恵や力が結集したからこそなし得たことなのです。

●学生
ありがとうございます。退官されてから 5 年半になるとのことですが、外から研究科を眺めてみていかがですか?

●平井先生
退官してからは、研究科の運営に口出しをするようなことは一切していません（笑）。現実のところ逐一情報が入ってくるわけではありませんので、いい方向に向かっているのかどうなのかはわかりません。しかし退官する際もそうでしたが、現在においても外国語教育集団としての言語センターなる組織の必要性が再び学内に起こっているように聞いています。これは私たちが研究科構想を始めたころに逆戻りするものだと感じています。こんな時期だからこそ、研究科の構成員が一丸となって教育と研究に関わるという個人個人と研究科全体の指針を持ち、それに向かって邁進しなければ、いつでも歴史は逆戻りする危険性があると常に思っています。
既存のアカデミズムの横断と新しい言語文化のパラダイムを構築するというこの研究科の存在価値は十分にありますが、まだ学内学外ともに認知されていないように感じています。もっと認知されることで、より一層質の高い学生が集まり、国際的な研究教育拠点となっていくことを切に願っています。あとリクエストをするならば、ぜひともイスラムとアフリカ分野も研究対象とする講座も設置して頂きたいですね。いまひとつ、マイナーな言語文化に目を向けることも忘れないで頂きたいと思います。

●学生
それでは最後に、これからの研究科を考える上でのキーワードをひとつ教えてください。

●平井先生
「一級品」を目指すということでしょうか。世界を相手にする一流の教員のもとに学生が集い、世界に通じる一級品となって社会で活躍する…そんなサイクルを構築していくことができたら素晴らしいと思います。

●学生
わかりました。今回は興味深いお話をたくさんお聞かせいただき、たいへん刺激になりました。M1 の学生として、国際言語文化研究科という大きな歴史軸の上に立って、自分の研究ができることをあらためて幸せに感じました。本日は本当にありがとうございました。

●平井先生
こちらこそありがとうございました。ぜひ今後もがんばってください。

平井勝利（ひらいかつとし）
名古屋大学名誉教授（国際言語文化研究科・初代研究科長）

内山裕幾（うちやまひろき）
国際言語文化研究科国際多元文化専攻メディアプロフェッショナル・コース M1

趙世華（ちょうせいか）
国際言語文化研究科国際多元文化専攻メディアプロフェッショナル・コース M1

イベント紹介

平成 21 年度国際言語文化研究科公開講座「言葉と文化の国際交流」

吉村 正和
（国際多元文化専攻ヨーロッパ言語文化講座教授）



平成 21 年度国際言語文化研究科公開講座「言葉と文化の国際交流」は、10 名の国際言語文化研究科教員を担当者として、6 月 10 日（水）から 7 月 10 日（金）まで名古屋大学東山キャンパス（文系総合館 7 階カンファレンスホール）において実施されました。

（1）公開講座の趣旨

「国際交流とは歴史的に見て、文明の接触あるいは文明の移転・移植が行われる経路であり、この交流を契機として既存の文化は飛躍的な発展を遂げてきたといえます。本公開講座では、中国語・朝鮮韓国語・ロシア語・英語（米語）・独語・仏語・スペイン語・ポルトガル語の専門家が、それぞれの言語文化と日本との関係にからめて「国際文化交流」に関する話題を提供します。具体的には、翻訳・言語教育・映像などがテーマとなります。国際交流の過去の歴史を振り返りつつ、現代における新しい国際交流のあり方も紹介することで、急速な「国際化」の流れの中にある日本の現状と役割を問い直します。」

（2）講演者とその題目

第 1 回　長畑明利（国際言語文化研究科教授）
エズラ・パウンドの能と漢詩の翻訳とモダニズム
第 2 回　水戸博之（国際言語文化研究科教授）
ラファエル・ブリュトー編ポルトガル語・ラテン語辞典に見出される 18 世紀前半のヨーロッパにおける日本
第 3 回　鶴巻泉子（国際言語文化研究科准教授）
地域文化からグローバルな文化へ？―ブレイス語の変容をめぐって―
第 4 回　星野幸代（国際言語文化研究科准教授）
台湾映画のなかの日本―08’『海角七号』を中心に
第 5 回　楊暁文（国際言語文化研究科准教授）
中国と日本―『源氏物語』の漢訳を中心に、日中間の言葉と文化の国際交流を考える
第 6 回　吉村正和（国際言語文化研究科教授）
言葉の翻訳と文化の翻訳を超えて
第 7 回　柳沢民雄（国際言語文化研究科教授）
未知なる言語との邂逅
第 8 回　鄭芝淑（国際言語文化研究科助教）
ことわざで見る日本と韓国
第 9 回　大庭正春（国際言語文化研究科教授）
ドイツ近代演劇の改革と歌舞伎
第 10 回　尾関修治（国際言語文化研究科教授）
外国語教育とインターネット

（3）情報公開

公開講座委員会では、本講座の内容をベースに、他の教員にも参加していただき、平成 21 年度末に『言語文化研究叢書』を刊行するとともに、その電子版を PDF ファイルの形式で公開する予定です。電子版の URL は、 http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/sosho/sosho.html です。

国際シンポジウム「恐怖からの思考―現代世界を解明する」

松本 伊瑳子
（国際多元文化専攻多元文化論講座教授）



恐怖は心身の特別な状態として生理学や心理学の研究対象になりますが、同時に、人間の多様な社会的、文化的活動と深く因果関係を結んでいます。一見個人的・偶発的に見える一つの恐怖の表明も、それが特定の世界観や自然観を前提にし、特定の歴史認識や宗教信条に依拠し、また様々な芸術的表象に浸透され、さらにまた政治的主張や社会的不満の原因となっています。このようなものとしての恐怖に着目して、本研究科の４名の教員は、２００６年度より日本学術振興会の科学研究費補助金を得て、「恐怖」に関する共同研究を進めてきました。西欧以外の地域をも対象に含めて地域的多様性を重視しつつ、時代的には２０世紀を中心において、恐怖の表明にかかる顕在的・潜在的な多様な文脈を解明して、現代の錯綜した文明状況の総体を考察することを目指してきました。その最終年度の総括として、国内外の優れた研究者の皆様をお招きし、研究科からの補助金も得て、２００８年９月３０日、国際シンポジウムを開催しました。以下はその内容の報告です。

ソルボンヌ・ヌヴェル大学のミレイユ・カル＝グルーバー教授は、「奥底の恐怖」と題する講演を行われました。この題は、ナチスのユダヤ人絶滅収容所のあったダッハウから生還したガストーネ・ノヴェリの絵の題でもあり、ノーベル賞受賞作家のクロード・シモンが小説『植物園』の中で、その絵から物語をつくっています。ノヴェリは強制収容所という「文明」から逃れたアマゾンの森の中で、原始部族との不穏な生活を送ることになります。文明と原始という２つの恐怖において共に見られる他者と「私」が相互に持つ恐怖心を分析することで、恐怖が再・生（ル・ネサンス）や、官能性、エロティシズムといった抑えられない魅力をも生じることを、格調高く述べられました。

アレクサンドル・グラ岩手大学准教授は「日本的な思想（こころ）に見られる恐怖に関する一考察　恐怖の中にある政治的文化的な影」と題して、古代の日本の信仰と迷信の中に見える恐怖の分析を行われました。この恐怖は想像の世界から出たものであるとはいえ、恐怖には政治的・文化的な影が見え隠れし、現実社会の英雄や支配者を正当化したり、逆に秩序を乱す存在の象徴ともなることを解明されました。

田所光男本研究科教授と柴田哲雄愛知学院大学准教授は、現代政治の世界における恐怖について語られました。田所教授は、地中海南の諸国に張り巡らされたアラブ＝ユダヤ共生神話の背後に覆い隠されたマグレブ系ユダヤ人の恐怖の体験について、「覆い隠された恐怖―アラブ系ユダヤ人に課された共生神話」と題する講演を、柴田准教授は「恐怖（テロ）との戦いに直面する現代のウイグル独立運動の歴史的位相―東トルキスタン共和国亡命政府と東トルキスタン・イスラム運動を中心に―」と題して、東トルキスタンというあまりなじみのない地方の複雑な政治情勢について解説してくださいました。

エベラルト・グルーバー（ソルボンヌ・ヌヴェル大学）研究員は、「『恐怖』の前提である『不気味なもの』（Umheimliche）の論理について」という題で、川崎惣一北海道教育大学釧路校准教授は「精神分析における恐怖と不安」と題して、共にフロイト精神分析における「恐怖」について語られました。そして川崎准教授は最後にフロイト・ラカンの理論を適用して、現代日本における若者たちの「生きづらさ」が、「大切なもの」が自分から失われているという「不安」から由来するものであること、しかしこの喪失感は原理上満たされるものではないことを説明されました。

布施哲本研究科准教授は、「不審者たちの共同体」と題して、フロイトのNebenmensch（身近な人間）という概念を出発点として、精神分析と社会分析を織り混ぜながら、また秋葉原での通り魔を取り上げられたりしながら、今現在の日本の社会を分析されました。松本は「機能不全家族と犯罪」と題して、私たちの記憶に残る若い年齢者による犯罪―神戸のサカキバラ、光市の母子殺人、秋葉原の通り魔事件―を取り上げ、これら犯人たちが犯罪の加害者である前に家庭内暴力の被害者であった事実を取り上げ、家庭内暴力という恐怖からの脱出方法を提言しました。

最後に藤井たぎる本研究科教授は、「不協和音の恐怖」と題してシェーンベルグの不協和音の頻出する「恐怖」の音楽の分析をされ、彼の「不協和音」は、主体なき世界がもたらす恐怖と不安を表象しているかのようであると結論付けられました。

講演の後には、活発な質疑応答もあり、日本、フランス、ドイツ、韓国、中国、台湾の６カ国から、７０名近い方々の参加を得て、意義深い国際シンポジウムとなることができました。



国際シンポジウム「異文化としての日本」

胡　潔　（日本言語文化専攻比較日本文化学講座准教授）
杉村 泰　（日本言語文化専攻日本語教育学講座准教授）



国際シンポジウム「異文化としての日本」は、2008年11月1日（土）と2（日）の二日間にわたって、名古屋大学文系総合館7Fのカンファレンスホールにて開催されました。国際言語文化研究科が主催したこのシンポジウムの目的は、日本語・日本文化を異文化の視点から再考し、「日本学」の新たな意義を探求することにありました。

シンポジウムの初日は吉村正和研究科長、山本進一副総長による開会の挨拶に続き、張龍妹教授（北京日本学研究センター）による基調講演が行われ、「中国における日本文学文化研究の現状と動向」という演題で、中国における日本研究の現状について紹介されたました。続いて文化の部と言語の部の二つの分科会が開かれ、文化の部では「異文化としての〈恋愛〉」というテーマで、日本の古代から近現代の文学作品に見られる婚姻、恋愛の諸相と外国文学・文化との交渉あるいはその影響について研究発表とディスカッションが行われ、言語の部では、類義語、諺、母語の移転に関する研究発表が行われました。休憩を挟んでワークショップ「言語教授法における発想の転換―ＴＰＲの実践―」があり、この三月に定年退職された本研究科の小坂光一教授とＴ．Ａ．のアックシュ・ダリアさんによるトルコ語のＴＰＲ（言語教授法のひとつ）の実演が多くの参加者の関心を集めました。

午後五時より初日の二つ目の基調講演が行われました。張威教授（清華大学）が「日本語教育における複合動詞の位置づけへの見直し―その基礎研究の意義を中心に―」という演題で、日本語教育の立場から外国人学習者の日本語複合動詞の習得に関する問題点が紹介され、日本語教材に複合動詞の学習項目を組み入れることの重要性が指摘さました。

２日目は午前中からペーター・アッカーマン教授（ドイツ、エアランゲン＝ニュルンベルク大学）による基調講演がありました。「グローバル化時代の日本語教育―文化のマイクロ・レベルに焦点を合わせてー」という演題で話されたアッカーマン教授は、共通語として英語使用が普及している中で、英語以外の言語教育が困難に直面している現状を指摘された上で、日本語教育はあらゆる地域言語や方言教育の必要性と可能性を一層深く認識した上で方向づけるべきだと主張されました。そのあと、初日と同様に言語と文化の二つの分科会が開かれ、文化の部では「歌舞伎と異文化との出会い」、「異文化接触・摩擦としての近代」の二つのテーマで研究発表とディスカッションが行われ、言語の部では、日中対訳、文末に用いられるオノマトペ、会話で使われる形容詞、手紙文における字体や絵文字といった幅広いテーマの研究発表が行われました。それと並行して、名古屋大学国際言語文化研究科大学院生によるポスター発表があり、シンポジウム発表者・参加者との研究交流が行われました。

昼食をはさんで、午後からパトリシア・ウェッツル教授（ポートランド州立大学）による「広告表現に見る日本語の世界」という演題の基調講演が行なわれました。

以上のように、今回のシンポジウムは基調講演者４名、ワークショップ主催者１名とアシスタント１名、口頭発表者19名、ポスター発表者19名による研究成果の発表があり、言語部分と文化部門の二つに分かれて、それぞれ活発な議論が行われました。どちらの分科会も盛況で、大きな成果をおさめたといえます。言語部門では日本語が国内外で如何にとらえられ、如何にして教育・習得され、如何にして研究されているかなどについて論じられ、新しい日本語研究、日本語教育のあり方が議論されました。一方、文化部門では異文化接触、異文化受容、異文化交流などについて複眼的な視座からアプローチすることにより、従来の研究では見えにくかった日本文化の多様な側面に注目するよい機会を提供できたと思います。

両日ともに、本研究科の教員と大学院生のほか、日本国内において第一線で活躍する片岡邦好教授（愛知大学）、小林ミナ教授（早稲田大学）、ロナルド・スチュワート講師（県立広島大学）、張麟声教授（大阪府立大学）、森田勝昭教授（甲南女子大学）による最先端の研究発表が行なわれ、会場には発表者のほかに150名を越える参加者が集い、熱のこもった議論が展開されたのは喜ばしいかぎりでした。











国際シンポジウム

「観られる身体、読まれる欲望、多様化する家族－ジェンダーの事象と表象」

越智 和弘
（国際多元文化専攻先端文化論講座教授）



本シンポジウムは、名古屋大学学術振興基金の支援を受け、平成20年12月19日から21日にかけて、名古屋大学野依記念学術交流会館を借り切って行われた。三日間を通しての参加者数は延べ530名を優に超え、国際言語文化研究科が総力を結集し主催したシンポジウムとしては、過去最大規模のものとなった。

主たるテーマは、タイトルとして掲げた三つの主題から読みとれる。観られる身体、読まれる欲望、多様化する家族は、それぞれ三つの学問領域、すなわちメディア・アート、文学・文化学そして社会・経済学に対応している。これら従来の規範からすれば互いに大きく隔たった学問領域に、身体およびジェンダーという共通のプラットホームを提供するなかから、未知の反応や成果を生みだしたいという理想主義的な構想から本シンポジウムはスタートした。

こうしたテーマを敢えて掲げるにいたった背景には、以上に挙げた三つの学問領域は、たしかに今日それぞれが独自の方法論に基づき身体の諸相やジェンダー・スタディーズの領域を精力的に開拓しつつあるにもかかわらず、それぞれの領域に属する研究者が互いに出会う機会が希であり、ましてそれぞれが発見した成果について自由に意見を交換する場となると、皆無に近いという認識があった。

同時に、以上の三つの題目は、我が大学院がもつ学際的な特質をもきわめて忠実に反映したものでもある。言語こそがあらゆる文化の核をなすという信念のもと、我が研究科は、以上に挙げた三つの学問領域からきわめて有能な人材を集め、エネルギッシュな研究を推し進めている。そうした研究科の実態を内外に広くアピールし理解を得る場としても、以上のテーマのもとに国際シンポジウムを主催することは、きわめて有意義であると考えられた。

コンセプトが固まると、そこからシンポジウムの基本的な枠組みは自ずと明らかになった。それは、以上に掲げた三つの学問領域それぞれにおいて国際的に高い評価を得ている研究者を招聘し、三つの柱を囲んで研究科の同僚教員および大学院生による研究発表とディスカッションを企画するというものであった。本シンポジウムの目的は、身体とジェンダーに関し性急な結論を導き出すことにあるのではなく、普段ならまず出会うことのない幅広い層の研究者に開かれた場を提供することで、複次元的な視点や分析から予期せぬ反応が生じること、そうしたなかから参加者それぞれが恩恵を被ることができれば、というのがわれわれの願いであった。

三つの柱を担う基調講演者としては、当初からカリフォルニア大学バークリー校のリンダ・ウィリアムス教授、イェール大学のローズマリー・モーガン教授、メルボルン大学のヴェラ・マッキー教授という著名な研究者の名が挙がっていた。彼女らが、われわれの招聘に即座に応じてくれたことは、ほとんど奇跡に思えた。そして彼女たちは、この前代未聞な国際シンポジウムの構想に、意外なまでに深い理解を示してくださり、終始一貫して友好的で協力的であった。来日されてから共に過ごした数日間は、学問的な刺激に満ちたまさに至福のひとときであった。

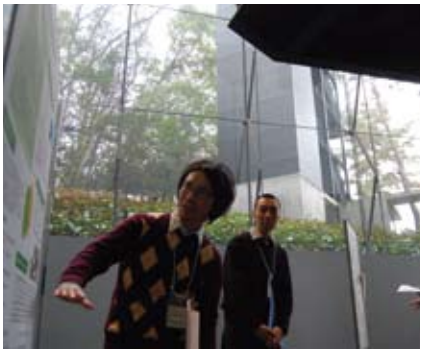
さらに本シンポジウムは、国際言語文化研究科の特色を存分に生かすものであると同時に、それを研究者向けだけに限られたものにしてはならないという気持が企画者の意識に強くあった。そのため、三つの学問的領域に加え、広い意味で身体ならびにジェンダーをテーマに刺激的な創作活動をつづける芸術家の参加も募ることで、三日間の出会いの場をより多角的で多彩なものにし、なおかつ広く一般市民にも自由な参加を呼びかけることにした。

こうした呼びかけにまず応えてくれたのは、映画監督のジョン・ウィリアム氏であった。シンポジウムでは、最新作の『スターフィッシュ・ホテル』が上映され、引き続き監督自身のトークと観客との盛んな質疑応答が交わされた。さらにヴィジュアル・アートの世界で評価の高い高木正勝氏が参加を表明してくれたことも、シンポジウムの質を高めるうえで大きく貢献した。作品を順次上映するなかで同時に進行したトークとディスカッションは、会場に詰めかけた幅広い層の興味を引きつけた。加えて美術パフォーマンスの世界からは、国内外で積極的な活動を展開する乾久子氏が、イダキ奏者の良知友見氏の演奏に合わせ、観衆の見守るなかで実際に作品を描くという前代未聞のパフォーマンスを披露してくれた。

会場内ではシンポジウム開催期間を通し、研究科内での選考を経た優秀な大学院生がポスター発表を行い、それに多くの来場者が関心の目を向け、とりわけ海外から招待した基調講演者たちから沢山の質問を受けられたことは、彼らにとり大きな収穫となった。

最後になるが、本シンポジウムの成功への大きな後押しとなったのが、当初から企画者の構想に温かい理解を示してくれ快く後援を表明してくれた財団法人東海ジェンダー研究所であった。







大学間連携企画
「現代日本の音を求めて〜作曲家下山一二三を迎えて〜」

藤井 たぎる
（国際多元文化専攻先端文化論講座教授）

左から久留智之、下山一二三、菊地秀夫、藤井たぎる



愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コースと名古屋大学大学院国際言語文化研究科先端文化論講座との二日間にわたる連携講座（2008 年 11 月 28 日・29 日開催）がはたしてどういう成果をあげるのか、じつのところまったく予想もつかなかった。理論と実践の融合とか、社会連携とか、たしかにお題目にはこと欠かないが、それがいったいどんな効果をもたらしうるのか、実際に蓋を開けてみるまではわからないというのが本音だった。だから会場に足を運んでくれた多くの同僚や知人が、直接口頭で、あるいはメールで異口同音に「楽しかった」、「面白かった」と言ってくれたのはたしかにうれしかった。ただそれと同時にすこし意外な感じも覚えたのである。

というのも、現代音楽のコンサートにしてもアカデミックなシンポジウムにしても、「楽しい」とか「面白い」という形容詞が感想の言葉として使われることはふつうあり得ないからである。「勉強になった」、「退屈だった」、「難解だった」、「感動した」、「くだらなかった」というのならわかる。もちろん面と向かってネガティヴなことを言ったり書いたりはしないだろうし、だれもが楽しめる企画だったと短絡するつもりもさらさらないけれども、それにしても「楽しい」、「面白い」というのはまったく想定外だったのである。

たしかにレクチャー・コンサートはさほど珍しくもないだろう。しかし今回の企画はそういうものともかなり性格の異なるものだったと思う。現代音楽を音楽史という枠組みで扱うかぎり、だれもが敬して遠ざかるばかりだろう。むしろクラシックやジャズやロックのコンサートとは違う、ある程度知的でアカデミックでありながらも気取らない雰囲気の中で、現代音楽が私たちにとって（少なくとも西欧のクラシック音楽よりは）身近な存在であることを感じてもらうことが重要だった。音楽はなにもコンサートホールや音楽大学だけの専有物ではないというごく当たり前のことを示すのに、総合大学という場（名古屋大学文系総合館カンファレンスホール）はそれなりに意味があったと言ってもいいかもしれない。シンポジウムでの作曲家下山一二三の軽妙洒脱な語り口や作曲家・愛知県立芸術大学教授久留智之の自由闊達な人柄も、現代音楽につきまとう難解で堅苦しいイメージを払拭するのに十分だった。そして作曲工房の舞台裏はじつに面白かった。

愛知県立芸術大学奏楽堂での絵画と演奏とのコラボレーションも、現代音楽作品をもっぱら音楽史上の問題として狭苦しい専門領域のなかに閉じ込めるのではなく、それを絵にしてみることで、（時間から空間へと）音楽を開かれたものとして提示してみせることができたはずである。たとえばバッハやショパンの音楽を描くのと較べれば、下山一二三の音楽（オルガン独奏のための『情景』）を平面上に“再現前化”するのは至難の業だったであろう。バッハやショパンなら、ある一定のシステムを直感的に捉えて、それを“時間”から“空間”へと構造化しなおすための手がかりは比較的簡単に見つかるかもしれない。しかし既存のいかなるシステムにも属さない、つまりさまざまの質量と強度をもった個々の音や重音が作り出す、調性的でも対位法的でも拍節的でもない、あえて言えば無定形な構造にいきなり出くわし、即座にそれを 100 号のカンバス上に描かなければならないとすれば、きっと呆然自失となるにちがいない。これまでに習得した知識も技法もスタイルも、そこではおそらくなんの役にも立たないだろうからである。

もっとも、すぐれた即興的な創作がここで要求されていたわけではまったくなかった。舞台上の演奏家と客席の聴衆のはざまで、いやでもなにか描かなければならない例外状況にさらされた油画専攻の 6 人の学生が、それにもかかわらず形象化してみせてくれた作品は、いずれもまぎれもなくあのときあそこで私たちが聴いた音楽なのである。聴衆もまた彼 / 彼女らとともに、想像上のカンバスにこの音楽の“情景”をたぶん描いてみたはずである。グラフィックを音楽に、あるいは音楽をグラフィックに変換すること自体にことさら意味があるわけではないだろう。いや、それはそれでたしかに面白い。しかし、聴きながら音楽を描くことによって、そしてまたそれを見ながら聴くことによって、耳だけで聴いているときとは違った音楽のかたちが聴き取られたとしたら、それこそがこのコラボレーションの最大の成果だったのである。

もちろんこの連携講座の意義を高めてくれたのが、下山一二三の音楽に潜む底知れぬ“力”であり、またその“力”を最大限に引き出して聴かせてくれた菊地秀夫（バスクラリネット）、徳岡めぐみ（オルガン）、池永健二（打楽器）のイマジネーション豊かな演奏だったことは言うまでもない。そしてこの二日間をおそらくだれよりも面白く、楽しく過ごしたのは、これを書いている私自身だったようだ。

著 作 紹 介



長畑 明利
（国際多元文化専攻南北アメリカ言語文化講座教授）

田野 勲 著
『祝祭都市ニューヨーク —1910年代アメリカ文化論』

本書は、1910 年代のアメリカに芽生えた新しい芸術の動向を、ニューヨークの前衛芸術家たちを中心に論じる本である。文学史、文化史において、1910 年代に焦点があてられることは少ない。この時代はしばしばアメリカの工業化が大きく進展した時代として、また、セオドア・ローズヴェルトおよびウッドロウ・ウィルソン政権下での「革新の時代」として紹介されるが、文化の面では、社会の腐敗を暴くマックレイカーズの活躍、カール・サンドバーグをはじめとする中西部出身の詩人・小説家たちの活躍（シカゴ・ルネッサンス）、1912 年の『ポエトリー』誌の創刊といったいくつかの事例を挙げて、あっさりと通り過ぎてしまうことが多い。文化史家のアン・ダグラスは、1995 年出版の『おそるべき誠実さ』（Terrible Honesty）で、世紀転換期から 1920 年代にかけて、アメリカ社会には地殻変動を思わせる変化が生じたと論じるが、その変化の現れが顕著になるのは 1920 年代であり、1910 年代は、1900 年代同様、過渡期の時代と見なされる。

しかし、過渡期の時代であるとはいえ、1910 年代は新しい芸術の兆しが明確に見られた、いわば文化・芸術面におけるモダニズムの胎動期だったのであり、そうした胎動期に特有の若々しい魅力に満ちている。その担い手であった芸術家や知識人たちは、アメリカよりも一歩先を行くヨーロッパの芸術から刺激を受け、自分たち独自の芸術表現を模索するとともに、労働運動とも関わりを持ち、また、第 1 次大戦参戦のための戦時体制に対する抵抗にも荷担したのであった。本書はこうした芸術家や知識人の動向に光をあて、これまであまり着目されて来なかった 1910 年代の文化の魅力を描き出す貴重な本である。

本書は全 10 章からなる。第 1 章では 1910 年代のマンハッタンの高層建築、とりわけ、ウールワース・ビルが芸術家たちの想像力を刺激した様を描き出し、第２章では、グリニッジ・ヴィレッジの住人たちを紹介するとともに、この時期にニューヨークで活躍した３人の日本人—サダキチ・ハートマン、国吉康雄、前田河広一郎— の動向を活写する。これらを背景にして、第３章以下の各章で、個別の芸術家たちの活躍ぶりが、より詳細に論じられる。例えば、第３章から第６章までの４章では、写真家のアルフレッド・スティーグリッツに強い光があてられる。スティーグリッツはアメリカ写真の生みの親と呼んで間違いないが、日本ではこれまで十分に紹介されてきたとは言い難い。本書では、彼の代表的な作品を論じながら、また、プラチナ印画法における修正やゴム印画法をめぐる議論を紹介しつつ、ピクトリアル・フォトグラフィーからストレート・フォトグラフィーへというスティーグリッツの—またアメリカ写真の—変遷が明らかにされる。さらに、彼が主催した＜ 291 ＞画廊におけるロダンやマティスやピカソらの展覧会の様子が詳らかにされ、それにあわせて、1913 年に開かれたアメリカ最初の前衛美術展覧会「アーモリー・ショー」開催の経緯、同じ年に近郊のニュージャージー州パターソンで起こった労働者のストライキ（パターソン・ストライキ）の様子、ストライキを展開した労働者と芸術家たちが協力して、マディソン・スクエア・ガーデンで開かれたパジェントの様子なども明らかにされる。

一方、第７章では、フランスからニューヨークへやってきたマルセル・デュシャンに光が当てられ、後に現代美術の収集家として有名になるウォルター・アーレンズバーグとの出会い、マン・レイとの共同作業、1917 年の「独立美術家展」の開催と便器を用いた有名な作品「泉」にまつわる騒動の顛末、『ニューヨーク・ダダ』の出版といった出来事がいきいきとした筆致で描かれる。デュシャンのみならず、この章では、ニューヨーク時代のマン・レイの活躍も論じられるが、とりわけ、彼が作った「リッジフィールド・ガズーク」という１号限りの雑誌をめぐる論考は大変興味深い。

第８章と第９章では、第１次大戦への参戦を決めたウィルソンの戦時体制の強化と、それを批判したランドルフ・ボーンのエッセイが論じられ、また、本書の最終章である第 10 章は、ヘミングウェイの戦争体験についての論考に割かれている。ボーンはその文化多元主義の主張でも知られる人だが、身体障害者としての苦労、反戦主義者としての側面を含め、もっと知られてよい人物である。第９章は、ボーン理解のためのよい道標となるに違いない。

本書はこれまであまり論じられることのなかった 1910 年代のアメリカに光をあて、そこで活躍した芸術家や作家たちの動向を、詳細に、またいきいきした文章で描き出している。興味深い、数多くの図版が効果的に用いられており、それらの視覚資料についての解説もわかりやすい。啓発的な、また刺激的な文化史の本として一読をすすめたい。

（彩流社、2009 年）



星野 幸代
（国際多元文化専攻ジェンダー論講座准教授）

楊義・張中良・中井政喜 著『二十世紀中国文学図志』

本著は文学史の新しい形式である。大学や大学院で文学を学ぶとして、伝統的な文学史に連なる「経典」作品を読む際、原文が何語であっても、通常は『〇〇全集』に整然と収められた活字にもとづいて、読解していくのが常であろう。しかし、その文学が発表された当時には、書きおろし小説であれば装丁された挿絵入りの本として読まれたし、雑誌に掲載されたのであれば読者はまず雑誌を手に取り、表紙を眺め、目次のカットに目を配り、その小説なり詩なりに添えられた挿絵を見ながら読んだのである。またそれらの挿絵画家と作家との結び付きは、たいてい文壇における派閥に関連しており、読者も往々にしてそういった派閥を意識して鑑賞していた。

中国文学に限ってみれば、一九〇〇－一九四〇年代は近代文学の成立の時代である。それと並行して、世紀末芸術から印象派後期、ロシア・アヴァンギャルド、プロレタリア芸術に至るまで、十年ほどの間に中国へ一気に流れこんだ時代であった。魯迅が挿絵にこだわり、ヨーロッパおよびソ連の木版に魅かれ、中国における木版画家の育成に尽力したことが広く知られているように、美術の育成に貢献した文学者は多い。本著のねらいは、雑誌の表紙、単行本の挿絵、劇のポスター、スチール写真、新聞の広告、カットなどを連ねて解説することによって、読者が「当時の作家、文学流派、審美的気風と精神的交流を興味深く、その史を読んで情趣を深めることができ、その図を見て想像を呼び起こすこと」（楊義「跋」）にある。

中井政喜名古屋大学名誉教授は一九九八（平成10）年国際言語文化研究科発足当初から東アジア講座で教鞭をとり、平成19年度をもって退官した。楊義氏は中国社会科学院文学研究所所長で、一九九九年、本研究科で学術講演会に招聘したことがある。張中良氏は同研究所主任であり、名大への訪問はかなっていないが、確か一九九二年ごろ東京大学の訪問研究員であり、筆者は当時同じゼミに出ていた。

本著は一九九三年に中国で在外研究していた中井政喜氏が、楊義氏とともに行った研究に端を発する。その成果はまず、九五年に『二十世紀中国文学図志』として台湾業強出版社から刊行された。続いて大陸の人民文学出版社から『中国新文学図志』として出版され、増訂をもって九七年に再版された。大陸での出版に当たっては、「開拓性・独創性のある高品位の学術著作であり、まちがいなく高く評価できる」（人民文学出版社編集審査員·何啓治）「しかし挿絵が多く、印刷の難度が大きいため、出版の補助を出すことを提案する」（伝記作家・卓如）といった強い推薦があり、中国社会科学院出版基金を得ている。

その後、中国では装丁や挿絵に注目した文学史が相次いだことから、本著の先見性がうかがわれる。さらにその当時は、伝統的な文学史と比べれば、大衆文学とされてきた鴛鴦胡蝶派を含めたり、長らく反体制派として批判されてきた新月派、創造社を肯定的にとらえ、紙幅を費やして論じたりする傾向はまだ非常に新鮮であった。

邦訳作業としては、中井政喜氏に大分大学の森川（麦生）登美江教授および筆者が加わり、名古屋大学国際言語文化研究科『言語文化論集』に七年に渡って断続的に二十五回、選訳を発表してきた。二〇〇六年中井氏の二度目の中国研修によって日本語版で採用する図版の決定版が確定した。その後、邦訳最終チェックが中井氏によって行われ、最初の執筆年代から足掛け十六年を経て日の目をみたのが本著である。

（学術出版会、2009年）



福田 眞人
（日本言語文化専攻日本言語文化学講座教授）

福田眞人 著
『北里柴三郎：熱と誠があれば』

本伝記は面白く楽しいが、難しくもある。それは、伝記の対象である人物の何をどこまで描くか、その人物を客観的に対象化し、冷静にその業績なり罪業なりを描くことができるのか、またその時代の雰囲気、さらには倫理観、価値観をどこまで旨く反映させられるか、などという問題があるからである。

正直申せば、書く前からこいつは明治の凄い人物だぞという直感があった。熊本から東京に出て、東京帝国大学で医学を学び、内務省衛生局に就職し、ドイツに留学して当代随一の細菌学者ローベルト・コッホに就いて科学的医学を学んだのである。語学も、生活も、研究も、今日からは到底想像できないような環境で北里は猛進したのだと思われた。確かにそうだった。しかし、物語はすでに熊本で生まれ、ドイツで胚胎され、それは彼の帰国によってついに壮大な展開をすることになる。

何よりも北里が、医学と科学の最前線で戦う準備が整っていたことは特筆すべきであろう。かの地で「プロフェッソー」の称号を与えられ、世界に日本人ここにありと知らしめた魁（さきがけ）をなしたことは特筆すべきことである。しかし、すでに熊本の地で熊本医学校において、オランダ語に習熟し、またドイツ語にも親しんでいたことと共に、西洋の科学知識の基礎を熟知していたことを知っておかなければならない。ドイツでは、研究所と下宿を往復するだけの、仕事人間であった。

そんな帰国後の北里を待っていたのは、古巣の内務省衛生局でも、母校東京帝国大学医学部でもなかった。苦い出迎えと、その無為の生活を見るに見かねた福澤諭吉・森村市左衛門らの奔走がなければ、明治25年（1892）日本最初の伝染病研究所は完成しなかったろう。これからやがて23年後の大正4年に、ついに内務省伝染病研究所が、文部省東京帝国大学附置伝染病研究所となり、自ら北里研究所を設立するに至る経緯はさておき、北里は官ではなく民で世界に対等に伍した。しかも人のため、世のためという志があった。

本書では、北里の出生からその終焉までを丹念に追っている。しかし、伝記にありがちな成功物語、立身出世譚だけではなく、いかに北里が医学的に凄かったかを書かねばならない。その研究における真摯な努力、弟子を次々と育てる弟子育成術の素晴らしさ。弟子には、野口英世（黄熱病研究）、秦佐八郎（サルバルサン創成）、北島多一（日本医師会会長）、志賀潔（赤痢菌研究）などが綺羅星のごとく輩出している。北里は、弟子を徹底して信じ、任せ、誘導したのである。

またしかし、自分の実験においては、すべて自分で実験器具を準備した。その意味では誰も信用していなかった。その用意周到さは、雑菌が紛れ込み実験の実証性の低かった当時の科学事情に鑑みれば当然と思われるのである。

本書の特色のひとつは、事実を丹念に辿り直したことである。たとえばこれまでの伝記では、まことしやかに北里は「総庄屋」の出自とされているが、実際には分家筋の「庄屋」であろう。これまでの伝記では、熊本から東京までの旅程・日程も不明であった。（私とて確定はできなかったが）家族の経歴さえ私の興味の中にあった。

また業績に関しては、破傷風菌の純粋培養や赤痢菌発見（志賀潔）指導など輝かしいが、果たして香港でのペスト菌発見（1894）は、フランスのイェルサンとの同時発見かどうか、科学的な検討が詳細に加えられる必要があった。その意味で、単なる伝記の意味を超越し、科学史・医学史的研究でもあった。

伝染病研究所創立、北里研究所創立、日本医師会創立、日本結核学会創立など、初期からの主要な仕事の一つが、重要な組織の立ち上げであった。その意味で、北里は政治家であり、絶大な牽引力があったと言える。また、北里の成功は、そうした様々な栄誉の最後に男爵・貴族院議員になったことであったが、まさに明治人の立身出世を具現化したと言える。

それは、たとえば下らないことと聞こえるかもしれないが、北里は一人の妾を争って時の宰相伊藤博文と互角に戦い、ついに勝利するなど、なかなか侮れないのである。つまり、富を蓄え、位階を極め、いささか謗りを免れないが、男の本懐を遂げたのである。

時代が違うが、現代においてもこれほどの業績、成功を成し遂げた人物は少ないであろうし、また世界に雄飛した人物も少ないであろう。北里の伝記が、少年少女のための偉人伝から脱して、学問的研究の対象にならなければならない理由はそこにあった。また、伝記という歴史／文学ジャンルへの挑戦でもあった。

北里探しの旅はまだ始まったばかりなのである。

今回の伝記執筆の途中で、北里研究所から「業績だけを書いて、私生活は書かないでほしい」という要望が寄せられた。私だけが知りえた北里の様々な秘密は一切書かなかったが、明治時代を生きた一人の男の豪快な生き様をありありと書きたいという希望を述べたところ、一切の協力を拒まれ、写真提供も受けることができなかった。北里研究所が、偉人的神話を作りたいという希望は理解できたが、もっとそれ以上に魅力的な人物としての北里がそこにいて、その姿を人々が知ることなく通り過ぎていくのは残念と思われたのである。そのことは、単に北里伝記に留まらない問題であり、ある時代を画するような業績を残した人物の人生をどのように描くかは、今後の重要な問題であろう。創作としての文学ジャンルで語るのと、資料／文献批判的態度で語る歴史学的研究との差もまたそこにはあるのである。本伝記が今後の北里研究のみならず、伝記ジャンルの意味と意義の検証にも一石を投ずることができたとすれば幸いである。

（ミネルヴァ書房、2008年）



李 澤熊

**（日本言語文化専攻現代日本語学講座 留学生センター
日本語・日本文化教育部門准教授）**

籾山洋介 著 『日本語表現で学ぶ 入門からの認知言語学』

本書は、認知言語学の基本的な考え方・概念について、普段我々が当たり前のように接している日本語の表現（主に類義表現）をふんだんに用いて、分かりやすく解説した入門書である。なお、そういった日常よく見られる日本語の様々な現象を、認知言語学の観点からきちんと説明できるのは、人間が持っている一般的な認知能力と（身体を通しての）経験が言語の習得・使用の重要な基盤を成していると考えられているからである。

本書の構成は以下の通りである。

第Ⅰ部　認知言語学の基本
　第１章　認知能力とは何だろう？
　第２章　経験が果たす役割
　第３章　類義表現と比喩
第Ⅱ部　枠組と推論
　第４章　「裸眼」と「肉眼」はどう違う？
　第５章　予測の働き
　第６章　原因を推論する
第Ⅲ部　視点と焦点
　第７章　視点の違いを考える
　第８章　異なる部分に注目する
　第９章　構成要素か全体か
第Ⅳ部　評価と比喩表現
　第 10 章　異なる評価をする
　第 11 章　言いにくいことの言い方
まとめ

以上のように、本書は４部 11 章の構成となっている。認知言語学の基本概念を表すのに用いられる語句は「太字」で記され、理解を深めたい読者の便宜を図っている。また、各章の末には「章のまとめ」を置き、もう一度ポイントとなる内容を振り返ることによって、さらに理解を深められるよう工夫されている。「あとがき」には本書で参考にした文献に加えて、認知言語学、認知意味論一般に関する基本文献、重要文献が紹介されており、大変便利である。

以下、Ⅰ～Ⅳ部のそれぞれの内容について概観する。

まず、第Ⅰ部では、認知言語学の基本的な考え方・概念について、生成文法などの他の言語理論と比較しながら非常に分かりやすく論じている。また、「百科事典的意味」「フレーム」「比喩（メタファー、シネクドキー、メトニミー）」など、考察の前提となる概念や理論についても丁寧かつ明快に記述している。なお、本書では類義表現の意味を考える際に、「ある言語において、言葉・表現が異なれば意味も異なる」という前提に立っている。つまり、一つの言語においてまったく同じ意味の複数の表現は存在しないということである。また、類義表現に典型的なものと周辺的なものを認めており、（特に）典型的な類義表現の意味の違いをどこに求めるかについては、同一の対象に対して何らかの異なる見方・捉え方をすることができるという私たちが有する認知能力に還元できるとしている。

第Ⅱ部では、同じ事物を異なる背景・枠組みに基づいて捉えるタイプ（例：地球／世界、残っている／いる・ある等）、同じ事柄を異なる予測に基づいて捉えるタイプ（例：８時間も勉強した／８時間しか勉強しなかった等）、現状から原因を推論するという認知能力に基づくタイプ（例：財布がある／財布が落ちている等）の類義表現を取りあげ、詳細に分析している。

第Ⅲ部では、同じ一つの物事に対して異なる視点から捉え、異なる意味づけをするという認知能力に基づくタイプ（行く／来る、のぼり坂／くだり坂等）、一つの事物や状況に関して、異なる部分に焦点を当てることができるという認知能力に基づくタイプ（A ながら B ／ B ながら A 等）、ある対象が複数の要素から構成されている場合に、個々の構成要素に注目した詳細な捉え方も全体を一括りにした捉え方もできるという認知能力に基づくタイプ（例：製品を一つ一つチェックした／すべての製品をチェックした等）の類義表現を取りあげ、詳しく考察している。

最後の第Ⅳ部では、何らかの対象の良し悪しなどを評価するという認知能力に基づくタイプの類義表現（例：雨が降ってくれた／雨が降りやがった、A さんは自分の子どもを死なせた／ A さんは自分の子どもに死なれた等）と婉曲表現（例：排泄、性（的行為）、死等）を取りあげ、非常に納得のいく分析がなされている。なお、婉曲表現については「比喩」を用いて、婉曲的に表現する仕組みについて詳しく考察している。

冒頭にも述べたが、本書は認知言語学の基本的な考え方・概念の理解を図る上では優れた入門書であると思う。また、認知言語学に興味・関心を持ち、研究テーマとして考えている学生向けのテキストとしても最適であると言える。認知言語学のみならず、言語学およびその関連領域を専攻とする学生、研究者には必読の良書である。

（研究社、2009 年）



鷲見 幸美
（日本言語文化専攻日本語教育学講座准教授）

籾山洋介・鷲見幸美・李澤熊（他著）森雄一（他編）『ことばのダイナミズム』

本書は、2005 ～ 2007 年度成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「言語のダイナミズム研究」（研究代表者：森雄一）がもとになっており、成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書として、同センターの助成を受けて刊行されたものである。

この共同プロジェクトにおいては、通算５回の研究会が開催され、プロジェクト参加者による報告と討議が行われた。また、プロジェクトメンバーの一人、David Lee 教授（The University of Queensland ）による２回にわたる講演会も開催された。本書は、このプロジェクトの成果である２１本の論文が収められた論文集である。

本書のタイトルである「ことばのダイナミズム」というテーマは、多くの研究者を魅了する。そして、本書には、多様なバックグラウンドを持つ言語研究者が、分野の枠を超え、多角的に「言語の動的側面」を探求する姿があり、それがまさに「言語研究のダイナミズム」を呈し、本書の魅力となっている。

本書は、スタイルやテーマによって６部構成がとられ、談話における言語の動的側面を異なるアプローチで捉えた４本の論文（第１部）、レトリックの観点から言語の持つダイナミズムを扱った３論文（第２部）、多義語を中心に語の分析を行った４論文（第３部）、さまざまな文法現象に見られるダイナミズムを扱った４論文（第４部）、「自己表現」を扱った３論文（第５部）、国語学をバックグラウンドにする伝統的研究、史的変化を扱った３論文（第６部）が収められている。

第３部に、国際言語文化研究科の３教員の３論文が収められているので、以下ではこれらの論文について紹介したい。

籾山論文「カテゴリーのダイナミズム―「人間」を中心に―」は、「人間」及び「人（ヒト・ニン）」を考察対象とし、その示す意味の伸縮や拡張について分析している。「人間」あるいは「人（ヒト･ニン）」という語・形態素は、ホモサピエンス（以下 HS）全体というカテゴリー、HS の一部というカテゴリー、HS に加えて HS 以外のある種の存在を含むカテゴリーのいずれに対しても用いられ、また、HS の有するある種の性質・特徴を焦点化して用いられる場合もあることを明らかにしている。また、「人間」あるいは「人」が HS 全体を指す際にも、HS 全体を（ある程度）均質なカテゴリーと捉える場合と、HS 全体をプロトタイプカテゴリーと捉える場合があることが明らかにされている。さらに、HS というカテゴリーが伸縮しても、それぞれの場合に、「人間」「人」が用いられ、その意味するところが理解されるのには、我々が有している「必要に応じて、あるいは何らかの意図を持って、柔軟にカテゴリーを伸縮させ、その場にふさわしいカテゴリーを形成する」という認知能力が基盤にあると論じている。

鷲見論文「ミトオスの意味構造―使用依拠モデルに基づくネットワークの記述―」は、多義語「ミトオス」を考察対象とし、使用依拠モデルに基づきその語の意味構造を記述している。ミトオスの意味構造は、プロトタイプ的意味を中心に、３つの拡張義、そして、抽象度、単位としての定着度の異なる５つのスキーマがネットワークを形成していることが示されている。ある程度単位としては定着しているが、１つの多義的別義として確立していると認めるほどには定着度の高くないスキーマの存在を示し、スキーマの単位としての定着度には段階性があることを明らかにするとともに、意味の拡張に複数の経路が想定できることを示すことにより、言語使用者がボトムアップ的に作り上げていく、ミトオスの意味構造のダイナミックな様が描かれている。

李論文「形容詞「正しい」の意味分析―」は、形容詞「正しい」を考察対象とし、その意味を明確に記述し、多義語か単義語かを明らかにすることを目的にしている。分析の結果、「正しい」に２つの別義を認め、多義語であると認定すると同時に、その単義語的な性質についても論じている。「正しい」は、「類義語の違い」「反義語の違い」「意味分野の違い」及び「複数の語が外国語の１語に対応（または、その逆）」という４つの基準から、多義語として認められる。ただし、２つの意味に見出される共通点（スキーマ的意味）の方が定着の程度、顕著性の度合いが高いと見られるケースもあることから、多義語の典型例と言えず、単義語と多義語の境界上に位置している語であることが指摘されている。

これら３論文は、実例を丁寧に観察し、認知言語学的アプローチにより「語の意味のダイナミズム」を浮き彫りにしているという点で共通している。

紙幅の都合で他の論文を紹介できないことが残念だが、本書を通して「ことば」の大きな魅力である、その「ダイナミズム」を、さまざまな角度から享受していただきたい。

（くろしお出版、2008 年）



恩田 満

（日本言語文化専攻高度専門職業人コース　博士前期課程 2006 年修了）

恩田 満 著
『占い師「売卜先生」の講話』

社会が進歩するとはどのような状態になることなのだろう。人々の生活水準が上がり物質的に豊かになることであろうか、科学が発達し文明が進歩することであろうか。もちろん、そのいずれもが社会進歩の現れではあろう。人間は太古の昔から、不便で貧しい生活からの脱却を求め続けてきた。先人たちのたゆまざる努力の結果、現代に生きるわれわれは、たしかに快適で豊かな生活を手にすることができるようになった。しかし、こうして獲得してきた物質的な豊かさと、人智を傾けて手に入れた文明がほんとうにわれわれを幸せにしてくれているのだろうか。

今の日本は金が世の中を動かしている。社会の隅々に至るまで、金で職を得ようとする者、金で出世を謀ろうとする者、金で権力を手中にしようとする者たちであふれている。現代社会には物質主義・拝金主義が蔓延している。物質主義は人間の暮らしぶりを華やかにし快適にもしたが、同時に、先を争って利欲に走る人間の浅ましさも露呈した。利欲心は人を平然と傷つけ欺く結果につながっている。欲望の泥沼に引きずり込まれて、精神を荒廃させた人々の例は、枚挙にいとまないほどである。

経済の発展とともに人々の間に格差が生まれ、報われない日々の労働に営営とする多くの庶民がいる一方、持てる資金で労せずして大金を手にする人物も存在する。それと呼応するかのように、文化もまた頽廃の度合いをいっそう深めてきている。親子関係の変容・礼儀作法の崩壊・言語能力の低下・性文化の乱れなど、どの一つを取ってみても深刻な状況は明らかである。

こうした現代社会の状況は、江戸期の汚職と腐敗にまみれた田沼意次の時代と酷似している。かつて、田沼意次は金融の自由化を図り、長崎貿易の振興に乗り出した。また、大商人の資金を積極的に活用して、次々に大規模な土木工事に取り組んでいった。その結果、農村にも商品経済・貨幣経済が浸透し、都市では華やかな消費文化が生まれた。一方では、幕府の役人による汚職事件、金銭や縁故による不明朗な人事などが横行し、贈収賄は半ば公然と行われていた。さらには、天明の大飢饉、浅間山の噴火、江戸の大洪水などの自然災害が相次いだ。その結果、庶民の不満が全国的に高まり、各地で一揆などが頻発するような状況であった。

『売卜先生糠俵』は、このような時代を背景に木版本として上梓された。著者の虚白斎（鎌田一窓）は、物質中心・経済中心であった社会を問題視して、人々が人間性と精神の豊かさを取り戻すことを促そうとした。そこで、古いと見なされがちな儒教・道教の教えに目を向けて、そこから人としてのあるべき姿を見いだそうとした。また、人としてどう生きるべきかを庶民にもわかりやすい形で、具体的な例を挙げながら説こうとした。儒教の孔孟思想からは、「孝行と信義のすすめ」を、道教の老荘思想からは、「無為自然と万物斉同」の教えなどを引き出しながら、古今東西の豊かな知識を縦横に駆使してこの書をまとめたのであった。親孝行をすることや真心を持って人と接することは、誰しもが当然と考えることであり、人々が斉しく平等であるべきことも、いまさら論を俟たないことだ。

だが、元禄以来続いてきた享楽的な「浮世」を謳歌し、勝手気ままに生きるという風潮の中で、当時の人々は、これらの当然とされる生き方を見失い始めていた。「知足（足るを知る）」ことなく、欲望を限りなく膨らませていたのだった。

「温故知新」という言葉が『論語』にあるが、その「古きをたずねて新しきを知る」ことの大切さは、虚白斎の当時も生きていたが、現代社会でも生きているはずだ。われわれも再びまた、古い時代で大切にされたものを新しい時代に生かしつつ、人間性を取り戻すための努力をしなければならない。そこで筆者は、今まであまり注目されずにいた『売卜先生糠俵』という作品のすぐれた内容を世に広めようと、これを翻刻しそれに注釈・解説を加えて出版することにした。

この作品は、これまでに注釈書に類するものが刊行されていないので、おそらく本書がその最初のものであろう。そのために、解釈上の間違いや独断的な見解も含まれているかも知れない。なお、本書は、二十三の講話から成っているが、そこに登場する人物はすべて一般の庶民であり、資産もなく身分もなく学問もなく、身の不運・不徳を嘆く者たちばかりであった。彼らはさまざまな疑問や悩みを抱え、著者の分身と思われる占い師の翁に相談に乗って欲しいとやって来た。翁がそれらの相談に乗るという形で、この講話は進められるのだが、ほとんどの場合、彼らの相談内容に対して、翁が一方的に語るという伝授形式で話が進められていく。そこで語られた内容は、例えば、若い娘の結婚相談・欲望の限りなさ・商売替えの是非・老人の寿命・息子の将来・飲酒の損益・嫁と姑の問題・化け物の存在などであった。内容的には、学術的な注釈書の反面を持つが、解説の部分では現代社会との関連などにも少なからず紙面を割いた。末尾には当時の社会の時代背景や石田梅岩によって創始された「石門心学」の流れなども詳述した。これらを含めて、虚白斎が世に訴えかけた願いがこの書を通じて、現代の人々の心に少しでも届くことを願っている。

（大学教育出版、2008 年）

研究報告
・
近況報告

研究紹介

山口 庸子

（国際多元文化専攻先端文化論講座准教授）

私はもともと外国語に対する漠然とした憧れがあり、詩を読んだり書いたりするのも好きだったので、大学に入る頃には、外国詩の研究者になりたいと思っていました。第２外国語でドイツ語を選択したのですが、学部の１年生の時、ホロコーストを生き延びたパウル・ツェランの詩を読み――さらに担当の先生が貸して下さったカセットテープで、ツェラン自身の鬼気迫る朗読を聞いて――ショックを受け、ドイツ文学を専攻することにしました。ツェランについて修士論文を書いた後、ベルリン自由大学に留学した時、モダニズムの文学作品に出てくる舞踊イメージに興味を持ち、その時代背景を調べているうちに、社会のなかで舞踊や身体文化が果たす役割について考え始め、現在に至っています。

大学院の授業では、これまで、ロイ・フラーやメアリー・ヴィグマンらの舞踊家や、表現舞踊、暗黒舞踏、舞踊と文学、舞踊と共同体、舞踊と聖なるものなどのテーマを取り上げてきました。2009 年度の前期には、ヴァルター・ベンヤミンの『ベルリンの幼年時代』を原典で読みながら、記憶、変身、模倣、類似などの問題を考察しました。後期は、フランスの美術史家ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンのアビ・ヴァールブルク論を軸にしながら、「イメージの残存」をめぐる理論的著作を検討する予定です。

2006 年に出版した『踊る身体の詩学――モデルネの舞踊表象』（名古屋大学出版会）は、ドイツ留学以降に取り組んできた、舞踊と文学の相互的関係についての研究をまとめたものです。哲学者のニーチェや、詩人のリルケ、舞踊家のヴィグマンらのテクストを分析し、ドイツ語圏モダニズムにおいて、舞踊が持ちえた歴史的・社会的・文化的意味を検証しました。おもな研究対象は、文学テクストに現れた舞踊表象でしたが、文学以外の各分野も含めた言説と身体的パフォーマンスの相互作用のうちに、モダニズムの舞踊表象を捉えることを目指しました。

このとき心がけたのは、おのおのの文学者や舞踊家の自己形成史や作品の内在的理解を大事にしながら、文化史的・身体史的・舞踊史的なコンテクストと、うまく交差するような地点を探すことでした。モダニズムの史的コンテクストとしては、全体性の喪失による「危機」の体感および宗教性や聖性の回帰という時代の精神状況、同時期の舞踊や身体文化の動向、青年運動やワンダーフォーゲル運動など各種の改革運動の様相、大小の共同体や芸術家コロニーの果たした役割などを取り上げました。

もう一つ忘れられなかったのは、当時の舞踊家の圧倒的多数が女性だということでした。そのため、多くが男性作家の手になる規範的な文学の言説に頼るだけでは十分ではない、という思いがありました。当時はドイツでも資料が整備されておらず、研究書や事典も少なく、何もかも手探りでしたが、つてをたどって、舞踊家の自伝や同時代の舞踊理論書、絵画、写真、映画などの資料を入手し、なるべく舞踊家たちの声を反映させようとしました。資料館で今にも壊れそうな本を読んだり、当時の芸術家コロニーに実際に足を運んでみたりするうちに、関連する資料の膨大さや、一つの文化圏を超えた国際的な広がりにすっかり驚いてしまいました。とても一人の研究者では手に負えない、総体的な文化現象としての身体文化の厚みに気がついた時のその驚きが、今も私の研究を支えるエネルギーになっていると思います。

現在では、研究対象を、舞踊から身体文化の様々な領域に広げつつあります。最近では、最初の近代的な女子体操であるメンゼンディーク体操の美学的・社会的意義、表現舞踊家シャルロッテ・バラの宗教性、近代の輪舞表象の日独比較、ドイツ語圏の精神医学と表現舞踊の関連、などをテーマに論文の執筆や発表を行っています。

私は、文学史や芸術史的な観点と、社会全体のなかで、舞踊や身体文化が果たす役割の双方に関心があります。ですから、言説や視覚・聴覚メディアと、身体的パフォーマンスが相互的に作用しながら、その社会に流通する身体観や身体イメージをどのように構築していくか、また社会的な記憶の保存や再生をどのように行っていくのか、という具体的で動的なプロセスを追っていきたいと思っています。現在では特に、日独を中心とした近代以降の社会における、オルギア的な舞踊の現象形態や、仮面や人形を用いた模倣や変身の在り方に関心を持っています。というのも、20 世紀初頭の熱狂的な舞踊ブームの様相を知れば知るほど、近代社会と近代以前の社会は、それほど違っているのだろうか、という疑念が大きくなってきたからです。人間とはいったい何か、という根本的な問題を考える上で、身体文化を考察することは、大きな手がかりになると考えています。

近況報告と今日的課題

磯野 正典

（メディアプロェッショナルコース　博士後期課程 2005 年修了）

博士後期課程修了から 4 年が過ぎました。激変するメディア界においては、業界変化・周辺環境変化がダイナミック、かつ、急速に進んでいます。これらの変化に連動するように、研究テーマも次々沸きあがっていますが､修了後は博士論文のテーマ「地上デジタル･データ放送と地域情報化社会」を基軸に､関連追研究として、「データ放送による緊急災害情報配信実験の検証と実用化への展望」を日本マスコミュニケーション学会 2008 年度春季研究発表会で、また､「データ放送による災害情報配信の展望」を情報文化学会 2009 年研究発表会で発表しました。現在、論文 1 本、研究発表 1 本の査読結果待ちです。

また、9 月 24（木）の 1 限～ 5 限には、情報文化学部で集中講義「メディアと職業」を担当しました。

内容は「テレビを見ても分からない、業界劇的変化」をメインテーマに、以下の内容です。現状報告的な内容になっていますが、多くのマスコミ出身講師が展開するような、単なる見聞体験談ではなく、実務を理論化し考察した上で、アカデミックな視点からの分析・評価を加味するよう心がけました。

■多様化するテレビビジネス

1. 広告費の減少
2. 新たなビジネス展開
3. メディア産業の未来

■デジタル化で変わるテレビの役割

1. デジタル化の理由
2. 設備投資とテレビ局経営
3. 多様な機能と放送理念

■地域社会におけるテレビメディアの役割

～地域情報・災害情報配信～

1. 情報化社会の到来
2. 高度な情報化社会とは
3. 情報化社会と暮らし

毎年の授業で感ずることは、激変するメディア業界は、一日たりとも目を離すと、前後の文脈すら理解できない現象が起こっているということです。教える側のインプットも大変です。

メディアを学ぶ後輩諸君には、このことを十分に肝に銘じて研究活動に取りかかって欲しいと思います。つまり、今日的テーマは、余程その現象の渦中、いや、真ん中に存在していなければ、研究できないということです。

そして、そこに至る学術的足固めも不足していることから、研究テーマとしてふさわしいかの判断が極めて難しいと言わざるを得ません。

「最先端の研究テーマだから、先行研究はありません」実は、それが落とし穴への一歩です。そのテーマに関連する研究は、なからず誰かがどこかで取り組んでいます。

私の研究も実はアメリカのラジオ・オーディエンスの古典的研究に多くの成果がありました。これを指摘してくれたのは、コロンビア大学の碩学です。その研究から派生した様々な論文を読み解くことが、研究のスタートとなりました。

さて、連綿と続き、そして、激変するメディアの研究に対して、どうアプローチしていくのか？こんな初歩的課題を持ったままの私ですが、これまでの研究成果を少しばかりまとめる作業をしています。

本年 10 月に、社会科学専門書籍出版の老舗、東京・文眞堂から、（仮題）「地上デジタル・データ放送公益論」を出版する予定です。出版の折は、ご高覧賜れば幸いです。

メディアコースの皆様の今後のご活躍を祈念いたしております。

近況報告

日下部 直美

（国際多元文化専攻東アジア言語文化講座　博士後期課程 2009 年修了）

私は 2009 年 4 月から星城大学経営学部に専任講師として勤務しています。こちらの大学では、一昨年から非常勤講師として中国語を教えており、昨年度からはそれに加えて留学生支援の業務もしていました。そのため、一部の先生方、事務の方々とは一緒に仕事をする間柄になっており、比較的スムーズに大学に溶け込めることができました。

その一方で、既に顔見知りという関係であり、学内の内情も理解していることから、4 月の着任以前から仕事を任されることになりました。3 月下旬には新 1 年生のためのコース説明会の打ち合わせ及びパワーポイント資料作成を依頼され、また、4 月 1 日はオリエンテーションでの留学生対応や試験監督・採点で朝から学内を走り回り、トイレに行く時間も無く、間を縫って辞令式に参加し、当日は帰宅が 9 時半過ぎという状況でした。

4 月 1 日以降も、最初の 2 週間はオリエンテーションや入学式、履修登録等で毎日仕事があり、土日も説明会やイベントで出勤しました。自分では意識していなかったのですが、精神的に少し参っていたようで、胃が痛むようになりました。授業が始まってからはリズムが整ってきたため、少し落ち着きました。

授業は、経営学部の 1、2 年対象に中国語を週に 6 コマ教えています。週 1 コマで 6 クラス担当しているのですが、今年は受講者が一気に増え、計 162 名の学生が受講しており、嬉しい悲鳴をあげています。全員の顔と名前を覚えるのに苦労しました。

授業以外には、留学生支援として、留学生アドバイザー（チューター）関連業務、イベントや交流会の準備、個々の相談、突発的に生じる問題への対応等を行っています。また、全教員にオフィスアワーとして週 2 コマ設けられているのですが、私は上記の留学生対応のため、オフィスアワーを週 4 時間設けています。

学内の委員会にも 4 つ所属しているため､教授会に加え、これらの委員会の会議もあります。9 月には現地入試のため海外出張に行くことになり、このような通常の会議以外に、海外入試関連の会議への出席、入試実施後の採点もしなくてはなりません。

この他にも、オープンキャンパス担当や AO 入試等の面接官、委員会関連の業務があります。更には、学校見学等で海外の提携校からの来客があれば、その対応をすることもあります。部活動の顧問も担当しているため、学内・学外の部活動にも参加することがあります。色々と細かい雑務も多く、7 月までは慌ただしい日々でした。

研究の方も細々と続けていますが、仕事の時間が増えたため、勉強時間が取りにくくなったこともあり、院生時代と比べて論文執筆速度が急速に落ちました。精神的に焦りもありますが、とにかく毎日少しずつでも続けることだと自分に言い聞かせて取り組んでいます。

1 年目なので業務上で分からないことが沢山ありますが、周りの先生方が熱心に協力かつサポートをしてくださっているため、何とか支障なくやっています。

国際言語文化研究科に院生として入学する以前から、院生時代は勿論のこと、現在においても、私は人との出会いに恵まれており、多くの方々が支えてくださったお陰でここまで来ることができました。今後も、様々な困難があると思いますが、一つ一つ乗り越え、精一杯頑張っていきたいと思います。

異なる世界をつなぐということ
－国際言語文化研究科で得たもの－

杉本 一正

（国際多元文化専攻多元文化論講座　博士前期課程2002年修了）

はじめに

ニュースレターへの寄稿というお話をかつて修士論文執筆の際にお世話になりました田所先生からいただき、在学中の当時のことを懐かしく振り返る時間が与えられたことを大変ありがたく思います。当方在学中は愛知県庁（心理職）に勤務する社会人学生でしたが、異なる世界に同時に身を置きつつそれらを架橋し、絶えず「越境」し続けた刺激的な時間を思い出すにつれ、当時の指導教官の松本先生、田所先生をはじめ、そのような貴重な体験の機会を与えてくださった国際言語文化研究科の皆様方にあらためて感謝の意を強くいたします。

当時をふりかえって

私は1998年、国際言語文化研究科の設立と同時に入学しました。第1期の入学ということになりますが、当時勤務していた児童相談所の仕事が虐待事件の急増により多忙を極めたこともあり、休学をはさんで2002年に前期課程を修了しました。修了生としては第3期の修了になると思います。仕事を終えて大学の図書館に直行し、毎日閉館まで修士論文を書いていた日々が懐かしく思い出されます。

修士論文は普遍的な人権と国民国家による福祉との相克をテーマとし､「越境」をキーワードに考察を試みました。地方行政を担う公務員の可能性と限界のなかで、そうした立場や枠を「越境」し、2000年の夏から外国籍児童の支援を行うNPOに参加し始めたのも大学院での研究が大きな契機でした。現在はその臨床心理士としてのNPO活動も10年目を迎え、微力ながら理事を任されるに至っています。

ロースクールへ

大学院終了後､私は『「国民国家」とは何か』というテーマを行政の内側から問い続けるとともに､仕事柄「学籍」のない「不就学」の外国籍の子どもたちや、場合によっては「国籍」すらない「無国籍」の子どもに接するなかで､「国民主権」の名の下に一方でこのような「透明な存在」を絶えず生み出し続ける「法」というものに無関心ではいられなくなりました。そこで2006年、もうひとつの母校である大阪大学のロースクールに17年ぶりに入学し、法律を1から勉強することを決意したのです。

この3月にロースクールは修了して県庁の職務に復帰しましたが、そもそも法律の世界というのは三段論法に代表される「論理」が支配する極めて特殊な世界であり、自分がこれまで生きてきた心理臨床の世界とはそれこそ「言語」､「文化」も全く異なる世界のように思えて正直なところ当初は大変とまどったものでした。

自戒をこめてあえていうならば、たとえば心理臨床の世界において最も役に立たない（むしろ害でさえある）「カウンセラー」は、目の前のありのままのクライアントを見ることをせずに診断名や典型事例にクライアントをあてはめようとする人だと私は思っています。「診断名」や「典型」からこぼれおちる特徴こそが時としてその人を理解するうえで極めて重要な手がかりになると考えるからです。

このような「文化」の中で生きてきた私ですから法律を学び始めたころ、事例を構成する事実を平板化させて条文や判例の規範にあてはめる作業に違和感を覚えずにはいられませんでした。心理臨床と法律とはかくも異なる世界かと嘆息したものでした。

異なる世界をつなぐということ

ところが実務家としての適性をはかる試験でもある新司法試験の問題を見た時、そうした印象は一変しました。そこでは明らかに個々の事実の重みが問われています。つまり判例をベースとしながらも事実のいくつかが意図的に変更され、判例の射程の限界、すなわち既存の判例からこぼれおちるものの重要性がまさに問われていたのです。

実務において目の当たりにする事例は一つとして同じ事例などありません。同じように見えても何かがちがいます。そしてその何かが、時には結論や対応を左右するほどの重要性をもつこともあるのです。結局のところ実務で問われるセンスは心理でも法律でも同じであるということを私は理解しました。そうだとすれば、判例の読み方にもクライアントの理解の仕方を応用できるはずだ、と思いました。

このように心理臨床と法律実務の世界がいかに異なるものに見えても、その中に身を置き、それらの世界をつなぐ「普遍性」を探りあてていくこと、そしてそうした方向とは全く逆に、同じように見える事例群の中にそれぞれの人をしっかりと特徴づける「差異」を見逃さないこと、この二つの重要なかまえを身につける端緒となったのは、いうまでもなく国際言語文化研究科で多くの刺激的な議論にふれたことにほかなりません。

おわりに

時を経て、私が在籍した頃とは研究科もあるいは大きく様変わりをした部分があるかもしれません。しかし国際言語文化研究科の持ち味、強みは、「多元文化」の名の通り多様な学問的、そして職業的バックグラウンドをもった学生や教官が集っていることにあるのだと思います。今後もこのような多様で刺激的な議論の場である国際言語文化研究科のさらなる発展を、修了生の一人として願ってやみません。

新米大学教員の日々

武市 久美

**（国際多元文化専攻メディアプロフェッショナルコース
博士前期課程　2006 年修了）**

「先生～！ご相談したいことが…。」
研究室のドアをノックし、学生が駆け込んで来る。
2009 年 4 月に東海学園大学人文学部人文学科アナウンス・情報メディアコースの教員として着任して半期が過ぎた。
担当するゼミの学生は、1 ヶ月後に控えた京都への撮影旅行に向け、夏休みを返上して大忙しだ。自分たちが作りたい映像作品のテーマを決め、構成を考え、取材先へのアポ取り・企画書の提出、絵コンテ作り…など、準備に余念がない。

名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻メディアプロフェッショナル論講座（当時）に入学したのは、2004 年の 4 月、上の娘が 2 歳になって間もない時期だった。大学卒業後、地元名古屋の放送局に報道記者として勤務していたが、結婚を機に退社。家庭に入り家事や育児に専念する日々を送る中で、結婚前に‘内’の人として仕事をしていた「メディア」の世界を‘外’から見る立場となり、「マスメディアやマスコミュニケーションについて学び直したい」という思いが湧き上がってきたことが、大学院進学のきっかけだった。
しかし、入学してすぐ第 2 子の妊娠が発覚。日に日に大きくなるお腹を抱えて大学院通いをすることになるのは想定外だった。「こんな状況で大学院を修了できるのか」「何のために大学院に来たのだろう」など不安だらけでスタートした大学院生生活だったが、同期の仲間達は、体調が悪く欠席してしまった日の講義ノートを貸してくれたり…さりげないサポートが身にしみた。もちろん、指導教員の後藤明史先生をはじめ講座の先生方も、研究指導はもちろん体調を気遣って声を掛けて下さったり、とても温かく受け止めていただき、感謝の気持ちは筆舌に尽くしがたい。
9 ヶ月の大きなお腹をゆらしながらの論文構想発表会では、さすがに先生方も目を丸くされていたけれど…。
11 月が出産予定だったので、後期は休学しようと考えていたが、講座の先輩が「休学して研究の足を止めてはいけない。突っ走って！」とのアドバイス。10 月いっぱいまで授業に出席し、11 月一月だけお休みさせてもらい 12 月にはまた大学に復帰する、という産休・育休スケジュールを強行した。
大学から車で 10 分足らずのところに住んでいたので、おばあちゃん（実家の母）に赤ちゃんの世話を頼み、講義の合間に自宅に帰り赤ちゃんに授乳し、その後再び大学に戻る。
朝、大学に行く前に保育園に子ども達を送り、夕方、おばあちゃんに保育園のお迎えをしてもらい、おばあちゃんの家で夕食･お風呂をお願い。夜10:00すぎにすっかり寝入った子どもを抱いて自宅に帰る…など、子育てに研究に息つく暇もなく、ひたすらがむしゃらに取り組んだ日々が懐かしく思い出される。

大学院修了後は、短大の非常勤講師を経て、縁あって、東海学園大学に着任することになった。
大学では、メディア理論の講義、メディアコンテンツ分析の演習と映像制作指導を担当している。特にゼミでは、卒業制作として映像作品の制作を目指す学生に対し、カメラや編集機の基本的な操作方法や知識、映像作品の制作理論を指導している。
映像制作では、学生が自分個人の興味・関心を一般化して表現できることを第一の目標にしている。
例えば、授業の冒頭で、学生に「グループごとに面白いことを撮影してみてごらん」と課題を出し上映会を行うと、自分たちの作品を見てグループのメンバーだけが大笑いしていて、他のグループはきょとんとしている、というケースが見受けられる。
「自分が面白いと思うことでも、他の人には面白く伝わらないことがある」ことを知ることで、価値観の‘内輪ウケ’から脱却し、自分の‘思い’を不特定多数にわかりやすく伝えるという表現者としての基本姿勢を学んでほしいと考えている。
そのため、大学という限られた範囲（テーマや取材対象を大学内で済ませてしまうこと）で作品を作るのではなく、学生にはどんどん大学外に撮影や取材に出かけ、社会の様々な価値観に触れた作品作りをするよう指導している。「武市ゼミは学外活動が多い。しんどいぞ。」という評判になろうとも。

大学教員と呼ばれ半年。
授業にゼミに会議に…あっという間に時間が過ぎた。放送現場、主婦、大学院と道を渡り歩き、新米大学教員としての日々は始まったばかりである。教員として研究者として 1 人前になれるよう、日々研鑽を重ねていきたい。

目からうろこが落ちる日々

田中 京子

**（日本言語文化専攻博士前期課程 1991 年修了、
名古屋大学留学生センター准教授・国際学生アドバイザー）**

世界にはもしかして「自分の名前」を持たない人々がいるのだろうか。自分の名前を好きなように作って、それを名刺に印刷して配っていたあの人々は普通なのだろうか、女性だからこそ「強い」という名前をつけるのか、学生証に入りきらない長い名前を持っているのに呼ぶときは「エ」さんと一音になってしまうのか・・・人の名前ひとつをとっても、次々に疑問が押し寄せてくる。

多くの女性に声をかけている学生が、「なぜ女性ばかりに？」と咎められ、「私は男性ですから」と真剣に答える。ガス代が過剰に請求されたと思って相談にきた学生が、なぜか私に向かって怒鳴る（ように感じる）。友人の名前に「さん」をつけて呼ぶなんて絶対にいやだ、と言う人がいる。立ち去るときに「こんにちは！」と元気に言う人がいる・・・語る言葉、語らない言葉にもまた、秘密がたくさん隠されているようだ。

中国から来たばかりの学生と筆談し、ロシア出身の学生と共に考え、インドから来た学生と一緒に悩み、ウズベキスタン出身の学生と人権について話す。エジプト出身の学生と授業の準備をし、ケニアの学生と企画を練る。カナダ出身の学生の活動を応援し、パナマの学生の夢を聞く。ブラジルの学生の遠い家族を思い浮かべる。日本の学生のがんばりを一押しする。こんなことが一日のうちに起こるのが、国際学生アドバイザーの仕事である。そして、「○○国の○○さん」が、それぞれが大切な個人「○○さん」になる。

このような多文化環境を、学生たちが互いに感じて学べるようにするのも教員として工夫できることである。学生たちと共に、生協食堂と話し合いを続けて、イスラム教の学生たちも安心して食べられるハラールメニューを導入してもらった。実現には３年かかった。来日したばかりのムスリム学生も材料の心配をせずに食事ができる。ハラール食という言葉を始めて聞く学生たちが「こういう信条を持って食生活をしている人たちがいるんだ」と知る。食堂スタッフも「学生たちがうれしそうな顔で注文するのでこちらもうれしくなる」と言ってくれる。こうして皆が学べる。

出身地や宗教に限らず、性別や身体的特徴など、大切にしたいことはたくさんある。機会あるごとに「女性用のトイレは男性用の５倍の数が必要」と伝えている。長蛇の列があたりまえとも言える女性用トイレでじっと待っていると、隣の男性用トイレはどうもほとんど空らしい。化粧していて遅くなるわけではなく、実際時間が必要なのだ。全盲の学生が入学した時に、歩道にあった電信柱が隅に寄せられ、ベビーカーを押していた私も実に楽になった。様々な必要性を大切にすれば、皆が助かる。互いが歩み寄って伝えていかないとわからないことがたくさんあると思う。

授業の中では異文化コミュニケーションの醍醐味と難しさを経験し、考える。「国際」は「個」が「クサイ」と言った人がいるが、それが異文化のコミュニケーションだと思う。互いを理解しようとすれば、時間や場、知識や感性、ユーモアや忍耐が必要だ。以心伝心だけでコミュニケーションは成り立たないし、輝かしいだけの国際交流で物事は進まない。まだまだ、言えないで我慢している人たちがいるに違いない。

学部卒業後 10 年間近く仕事をしたが、未知・無知なことがあまりにも多いので、1989 年、日本言語文化専攻に第二期生として入学した。日本語教育界の重鎮の先生方や言語文化を心から愛する先生方に指導していただいた。現在の仕事に就く機会を得て、未知・無知は無限にあることに気付いたが、毎日新しいことに出会いながら進んでいける。

今年は入学してから 20 年で、30 歳代だった自分は 50 歳代となり、あの頃の先生方の年齢を越したり、近づいたりしている。自らも学びつつ、この専攻、この仕事を通して得たことをぜひ、次の世代に還元していきたいと願っている。

近況報告

坪松 かおり

（国際多元文化専攻先端文化論講座　博士前期課程 2002 年修了）

私は４歳になる一人息子を育てながら、商社に勤務しています。商社といっても輸出入量に対して従業員は少なく、社長も含めて女性ばかりです。私は経理、財務、会計全般を担当しています。

私の一日はまず子どもの弁当作りから始まります。彼は生まれたときからアトピーがひどく、母乳で育てていた私も含めて食事制限(除去食)が必要でした。４歳になった今では随分よくなりましたが、それでもその日の体調に合わせて保育園のメニューに似た弁当を持たせています。

弁当作りが終わると、今度は夫と子どもを起こして朝食をとります。その後、準備をしてやっと登園。そして私の出勤となります。帰りのお迎えも私が行きます。帰宅して慌しく夕食の準備をして、子どもをお風呂に入れて寝かせる、そんな生活をもう３年以上も続けています。

自分の一日を振り返ってみるとその忙しさに驚きます。子どもを育てるのも楽しいので、いっそのこと専業主婦になってもいいとも思いますが、どうやら私は働くことも好きなようです。要はバランスの問題なのだと思います。

現在の会社には２年前に転職をしました。それまでは金融関係の会社に勤めていて、育児休業も前職で取得しました。ところが復帰後に休業前と同じぐらい、もしくはそれ以上のペースで仕事をやろうと自分で自分を追い込んだ結果、体調を崩し、その上子どもとの関係も悪くなってしまいました。そこで反省をし、半年ほど休養を取り、現在の職場に転職しました。

会社はハワイからコーヒーと、中国からは家電を輸入する本体と、そのほか現地法人（アメリカ・中国）などを含めて５社あります。その５社分の決算を、時期をずらして１年間で５回行います。もちろん現地法人の場合は税法が異なるため、その都度 CPA などに確認をします。

税法だけに限らず言葉や通貨、そして各法人によって会計システムも異なる状況は特異なのかもしれません。しかし前職のように仕事を自宅に持ち帰り、夜中まで仕事をしていたときとは比べ物にならないくらい、仕事の量や質、そして子どもとの接し方も改善したと思っています。今では仕事を自宅に持ち帰ることはなくなり、休日にはゆっくりと子どもと遊ぶことができます。

前職と現在とで何が変わったのか。それは自分でやる事を減らすよう徹底するようになったことだと思います。子どもが生まれる前は、時間もお金も全て自分のものだったので、いろいろな事柄に対して常に全力投球で向かうことができました。しかし子どもがいる今それは物理的に無理なので、子育てと仕事の両方ができる環境を整えることに力を注ぐすべきなのだと考えるようになりました。

そこで私は転職した当時、前任者はアナログな会計方法で、不正確で時間ばかりかかる方法を採用していましたが、引継ぎを終え担当が私に代わるとすぐに会計処理方法を見直しました。そして新たに会計ソフトを導入し、時間短縮を図るようにしました。また子どもの体調や保育園での行事でどうしても仕事ができない場合に備えて、自分の仕事はあらかじめ回りの人に伝えておくなど、ちょっとした工夫をすることで、仕事環境が随分よくなりました。

しかし育児と仕事のバランスがとれているように見えるこの生活も、まだまだ不安定で、少しでも仕事の方に傾いてしまうと（何といっても決算は年５回ある）何となく家庭の中がぎくしゃくしたり、子供の体調が悪くなったりします。そんな時は前職で失敗したときに夫から言われた言葉「会社は自分の人生を守ってはくれない」を強く思い出すようにしています。集中して仕事をしているとそれなりに達成感があり、また加えて評価されると更に意欲が湧きます。でもどれだけ自分の人生を仕事にささげても、子育て以上に「人としての幸せ」を感じることは果たしてあるのだろうかと思ったりもします。

私は前職でも今の職場でも、たった一人のワーキングマザーです。今の職場は女性中心だから子育てにもさぞかし理解があるだろうと思ったらそれは大きな勘違いで、どんなに仕事を素早く正確にこなしても、成果を挙げても他の社員と平等に評価されているとは残念ながら感じられません。それでも、世の中には多くのワーキングマザーが活躍しているので、その人の活動や書籍を通じて日々励まされています。

仕事をする女性にとって、出産が大きなハンディになることは、たぶん昔も今もあまり変わりがないのかもしれません。しかし子育てはその時にしかできないことがたくさんあります。また子育てをすることによって、忍耐力もつきます。子育ては自分の思い通りにならないことばかり。それでも楽しいと私は思います。

子育てがプラスとなり、仕事上で自分を生かせる日はいつか来る。だから子どもを持つチャンスがある人には是非生んで欲しいと思うのと同時に、そういった人が少しでも子育てが楽しいと思えるような職場環境を整えるのが今の私の務めだと思っています。

大学院で学んだ「何か」について

服部 達哉

（国際多元文化専攻先端文化論講座　博士後期課程 2009 年修了）

私は、2009 年に本大学院国際多元文化専攻先端文化論講座博士課程を修了しました。今回、ニューズレターという形で、大学院で過ごした時間と、その時間の中で得た「何か」を振り返る機会を頂きましたので、近況を織り交ぜた形でご報告させて頂きます。

大学院に進学した 10 年前と変わらないのは、頭の悪さです。知識や情報を詰め込もうとしても、次の日には、理解を待たずして忘れてしまいます。そして、10 年前と変わったことは、身に付かなかった、あるいは、忘れていたはずのそういった「何か」が蓄積され、自分の都合や感情から自律して「目的」や「興味関心」を、私に与えてくれるようになったことです。

これは、「大学院で学んだことが人生の役に立つのか」という問いに関係のあることなのかもしれません。いかなる基準と成果によって、役に立つか立たないのかを判別すればいいのか、またそのような問いを反証するための知性を備えていない私ではありますが、大学院を通して得た「何か」が、至る場所、至る瞬間に、様々な事象や経験に、意義を付与し、連続性を与えてくれるのを意識することがあります。

さて、私の近況についてですが、まず、本年度の 8 月末に行われましたメディアプロフェッショナル論講座の集中講義にて、非常勤講師を務めさせて頂きました。院生の視線や反応を見ながら、自分の伝えたいことを伝えようとして、仕掛けを工夫しポイントを変えるのは、「つり」に似た要素があり、非常に楽しい時間でした。そして、学生の皆様もまた自分と同様に何かを伝えようとしてくれていることを感じることができました。この集中講義は、市販されているデジタルビデオカメラを使って、映画的表現を再現してみようというものでした。その大半は、技術的操作に関することなので、「つり」の「間合い」や「条件反射」のようなスポーツ感覚があったほうが、機材の感触や映像の質感に対して自然な集中力と呼吸を導き出してくれるのではないかと思いました。

この場をお借りしまして、このような素晴らしい機会を与えてくださったメディアプロフェッショナル論講座の皆様に、心からお礼申し上げます。

次に、現在の私の「目的」や「興味関心」に関係する二つの取り組みについて説明させて頂きます。一つは、「商業活動」に関わることです。現在、コロニル社（ドイツ）のレザーケア商品を扱う「コロニル・ジャパン」のブランド戦略立案に関わらせて頂いております。

革製品の原材皮となるのは、様々な動物の皮です。例えば、私たちに馴染みのある靴や鞄、革財布などの革製品の大部分を占める牛皮の場合、生後 18 ヶ月から 3 年までの間にと蓄されたステアハイド（去勢牛）から、機械によって剥皮されたものです。ノッキング（銃殺）の後、腹部を裂いて骨肉内臓から剥離し、剥ぎ取った皮から脂肪などの不純物を除去し、なめしや仕上げなどの加工を加えて革製品へとなります。

仕上げの目的は、皮の質を均質化し、質感を与え装飾を施し、審美的価値を高めることです。一方で、審美的価値を追求しすぎた結果、革の物理的特性が弱くなり、品質や耐久性が落ちてしまうこともあります。個体差による製品の差異自体が、製品の味として理解されるまでには、至っていないのが実情です。

仕上げの多様性へのニーズは、ブランド・ブームに呼応する形で年々高まり、その加工法も多岐に渡っています。それに伴い、革製品を長持ちさせる機械処理技術や薬剤も年々進歩し続けています。こういった流れが、昨今のエコ・ブームとも重なり合うことで、「レザーケア商品」が注目されています。

「コロニル・ジャパン」のウェブサイトでは、革製品別の手入れの仕方やそのための商品について詳しい説明があり、ユーザーのニーズに適ったサービスと商品の提供を心がけております。「レザーケア」を通して、革への愛着を育てることで、皮革文化を発展させていこうという意義ある試みに参加することができたのは、大学院で得た「何か」のおかげだと思います。

二つ目は、「社会貢献」に関わることです。愛知県の事業である「うつ・自殺予防対策」の企画について、愛知県保健所から問い合わせを頂き、映像メディアを利用した PR 方法を提案させて頂きました。「うつ·自殺」のキーワードは、社会問題の域を超えて、社会的課題として行政と民間の共同による早急な対応が必要とされています。映像メディアをツールとして、現実的な問題に対処する方法を考えることは、映像の可能性について学んだことを実践する機会を与えてくれます。この二つの機会は、私にとって、「世界」とは、「社会」とは、「人間」とは何であるのかを、再認識するきっかけとなっています。今後も、知らず知らずのうちに蓄積されていた「何か」を何かしらに生かしながら、様々な取り組みに参加していきたいと思います。

新任教員紹介

自己紹介に代えて



尾関 修治
（国際多元文化専攻南北アメリカ言語文化講座教授）

自己紹介というのは恥ずかしいものですから，架空インタビューにしてみます。

出身は名古屋大学とのことですが，お生まれは？
尾関：名古屋生まれです。北区の城北小学校出身です。中学校のときに海部郡に引っ越しましたが，高校は名古屋市内の中村高校でした。名大に在籍したのは 20 年前あたりで，学部と大学院合わせて９年いました。

学生時代に重大な出会いとかありましたか？
尾：相手が人間でなくて申し訳ないですが，計算機，コンピュータと出会ったことですね。

パソコン？
尾：いえ，パソコンというのはまだなかったので…。当時はマイクロコンピュータが出始めたころで，高校のとき友人のいたクラブで組み立てたマイコンは見たのですが，本格的なコンピュータに触れたのは，文学部の言語学研究室の実験室にあった米国データゼネラル社の NOVA というミニコンが最初です。２年生の後期でした。冷蔵庫ぐらいの大きさですけど，ずらっとフリップスイッチが並んでいて，機械語の各ビットをスイッチで押してロードさせるという…。プログラムは紙テープにパンチされてて，毎回ざーっと読み込ませるわけです。結果の保存も紙テープで。すぐに８インチフロッピーが使えるようになりましたけどね。

何ができたのですか？
尾：もともと音声合成用のスピーチシンセサイザを制御するためのものだったのですが，FORTRAN とか，出たばかりの BASIC とかの言語も使えたので，プログラムをして…，遊んでましたね。

遊んでいた？
尾：遊んでいたとしかいいようがないですね。勉強といえば勉強ですが。夏休み中実験室にこもってましたし、講義中もプログラミングのことばかり考えてました。役立てたいうと、４年生のときに院生との共同研究で方言地図の作成をしたことぐらいでしょうか。これは大型計算機を使いましたけど。

パソコンはいつごろから？
尾：生協の店頭に８ビットのパソコンが並び始めて、毎日北部生協の店頭でじとーっとたたずんでました。パソコンを買いたいという人の相談に乗ったりもしてましたけど、自分が買ったのは、大学院のときにアップルのマッキントッシュが出るのを待ってからでした。車が買えるぐらいのローン組みましたね。15kg あるんですが、専用のバッグに入れて毎日担いで通学してました。自動車通学でしたけど。魚釣りの帰りかとよく聞かれました。

それはかなり…。
尾：自分では当たり前のつもりで全然疑問感じてませんでした。一日中使ってて、統計処理などの重い計算させるときは一晩中動作してるんでその机の下で寝たり。今でも似たような生活してますが。一応研究に使ってたんですよ。まだワープロ専用機を使う人が多い中で、欧文フォントとかいろいろ使えるので、学会発表のときにはこのハンドアウトどうやって作ったんだって質問ばかりされました。
あのころはマックに人生を狂わされるというか，のめり込む人によく出会いました。ショップ始めちゃったけど夜逃げした人とか。後に幕張のマックエキスポで偶然会いましたけど。

それから、就職されたわけですね。
尾：最初は東海学園の短大で３年勤めました。こじんまりして働きやすい職場でしたね。それで、もっと勉強したいことがあって、福井大学の教育学部に移りました。教育学部って各分野の専門家が１カ所に集まっていて、勉強会とか共同研究とか活発なんです。情報教育も担当したし、新しいマックで音声や動画教材の開発とかもできたし。パソコン通信で友人が増えたのもこのころかな。

それから中部大学に移られて。
尾：1993 年に中部大学の外国語教室に移ってからは、インターネットを英語教育に利用する研究と実践を始めました。新しい教室システムも入れて、計算機資源も多かったし、何より英語教育の改革をするという機運が高かったです。新しいことにチームで取り組んでいく毎日でしたし、インターネットを使うのがそういう研究開発のスタイルをしやすくした時期でもありました。

今後の抱負とか。
尾：ネット環境での学習が当たり前になって気がついたのは、教員対学生という関係以外に学生同士が影響しあっていくことの重要性ですね。もちろんもともとあったことですけど、ネットの中ではその相互関係が教員にも学生にもリアルタイムで見えるから、評価が可能になるんですね。そういう集団内での評価を学習を促進するために使えないかと考えてます。…いつも目先の開発とか面白いことしか考えてないんですよ。

（あと 200 字でおさめて！）
尾：巻きが入りましたね。最後に学生の皆さんにおせっかいな助言：
・20 代は、30 代や 40 代よりずっと長い。
・20 代に試行錯誤したことは何も無駄にならない。一生のうちに使うことばかり。
・30 代になって必要なことは、30 代になってから学べる。
・だから，焦らずに、自分がするべきだと思うことに集中すべし。
最後に僕のホームページはこちらです：
http://class.lang.nagoya-u.ac.jp/~ozeki/

趣味の効用



玉岡 賀津雄
（日本言語文化専攻日本語教育学講座教授）

研究が趣味である。３日間も論文を書かないでいると落ち着かなくなる。趣味・・・というのはたいてい享楽と結びつき，仕事と結びつくことは少ないようである。その点，これで給料がもらえるのは最高である。院生の指導という点では，大きく貢献できると思う。

これまでいろいろな趣味を享受して生きてきた。スキーは，留学先のカナダで楽しんだ。バンクーバーから車で２時間くらい北上したところに，ブラックコムというスキーリゾートがある。ここでは，氷河を滑り下りることができる。氷河の頂上に出て，はじめは興奮した。しかし，平らな斜面を滑り降りるのは結構単調である。下手にゆっくり滑ると，ダウンヒルのスキーを履いたまま歩かなくてはならなくなる。それだとクロスカントリーである。しかし，かなり前から，モーグルを滑り下りるには，体力の限界を感じている。そのため，ほとんどスキーはしなくなった。

スキューバーもずいぶんと楽しんだ。オーストラリアで１年間過ごした際には，年間120 本潜った。だいたい３日に１本の計算になる。おかげで，インストラクターの助手ができるダイブマスターになれた。やはりグレート・バリア・リーフは最高である。不幸にして，それ以外のところで潜ると，どうも物足りない。そのため，帰国後は，ほとんど潜らなくなった。

オーストラリアのインド洋側のエックスマスでは，ジンベイザメと泳ぐことができた。高額ではあるが，一生に一度と思い参加した。常に見つけられるわけではないが，幸運にも初めてですぐにジンベイザメに会えた。ジンベイザメは，ゆっくりとプランクトンを口腔内に吸い込み，濾過して残った生物を呑み込む。当然ながら，プランクトンは海面付近に多いため，海面近くで生活している。すぐに飛び込んで一緒に泳いだ。ジンベイザメにしてみれば，ゆっくり泳いでいるのであろうが，クロールでなくてはついていけない。はじめは十数名が一緒に泳いでいたのだが，５分も泳ぐと，ドイツから来たという青年を私だけしか残っていなかった。当時は，ダイブマスターを目指していたので，体力があったようである。

実は，歌うのも結構好きである。大学時代から合唱をしてきた。カナダ留学中は，田舎のサスカチューンという人口 17 万人くらいの大学都市で生活した。この規模の都市には珍しく，"ジャコモ･プッチーニ" プッチーニ作曲のオペラ『ラ・ボエーム』を公演することになり，一般からも出演者の募集があった。私もこの時参加した。なにぶん，この田舎町でオペラなど見る機会も少ないので，コンサートホールは満員で 2,000 人を超える聴衆で埋まった。私の名前もプログラムの最後に小さく入れてもらった。ところが，講演の後でビデオをみると，ほんの一部にソロのようなところがあり，完全に音が外れていた。これ以降，音楽は聴くだけと決めた。

名古屋大学では，英語を教えることになった。残念ながら英語を学ぶこと自体は趣味とはいえない。しかし，英語で何かをするのは楽しい。ダイブマスターのトレーニングもテストも英語で受けた。演劇は難しいが，それでもある程度は英語で楽しむことができる。英語が話せれば，世界の多くの人達と話ができる。前期のはじめての授業をどうすれば良いか分からず，とりえあず英語で授業をした。日本人相手に英度で話すことは，１回目はやや恥ずかしい気がした。が，すぐに慣れて，学生も私が英語を話すものと思い始めたようである。学生にも英語を使って人生を楽しむ方法を教えたいものである。

ヘルバルト教育学の一試み―樋口勘次郎の『修身童話』―

坂本 麻裕子
（日本言語文化専攻比較日本文化学講座　博士後期課程３年）

本発表では、樋口勘次郎の『修身童話』（明治31年～34年、全9巻）が扱うグリム童話と日本昔話に着目し、ヘルバルト教育学の視点からグリム童話の受容について考え直した。

明治20（1887）年、ドイツのヘルバルト教育学は、実践的な教育学として日本に紹介された。しかし、明治28（1895）年、『教育報知』に掲載された教師からの投稿が発端となり、ヘルバルト教育学の一つの軸である道徳観が日本には合わないという根幹的な問題が明らかとなる。これを受け、谷本富を始めとする日本のヘルバルト教育学関係者との間で論争が起き、谷本らはヘルバルト教育学の道徳理念を儒教や教育勅語の徳目に置き換え「日本化」することで対応しようとした。しかし、この試みはヘルバルト教育学の異質性を更に際立たせてしまい、うまくいかなかったのである。このような背景を考えると、『修身童話』は先の論争を境に強化された「日本化」の意図を汲む出版物として位置付けることができ、単なるグリム童話の翻案受容ではないと言える。

『修身童話』は修身科での利用を目的とした実践的な教材で、グリム童話と日本昔噺を並べて本文中に徳目をつけている。日本昔噺の徳目は一貫していて、巻を経る毎に修身教材として確立されていく。これに対し、グリム童話の徳目は、内容の方向性が定まらず統一性がない上、後半の巻になると徳目の数自体も減少していく。これはグリム童話を日本の徳目で捉えることができなかったということを表している。

つまり、谷本らがヘルバルト教育学を「日本化」しようとした際に露呈した道徳観の不一致という問題を樋口も解決することができなかったのである。『修身童話』の失敗が一因となり、その後、グリム童話は国が認める修身科の教科書から排除された。だが、教訓的要素を保ちつつ家庭内の私的な読み物へと姿を変え残ったと考えられるのである。

尚、この発表は2008年11月2日に本研究科で行われた国際シンポジウム「異文化としての日本」のポスター発表を元に、加筆修正されたものである。



資料1：日本昔話「瘤取爺」
（『修身童話』8巻 開發社 明治33年, p.1）



資料2：グリム童話「おてんば豆」（KHM18）
（『修身童話』第8巻 開發社 明治33年, p.38-39）

授受文、受身文、移動文の習得 ――「視点」の観点から――

謝 文儀

（日本言語文化専攻日本語教育学講座　博士後期課程２年）

日本語は「立場志向型」言語であると言われている。「太郎は花子にプレゼントを買ってあげた／買ってくれた」に見られるように、話し手の立場（「視点」）が文ないし談話の表現形式に密接に関わっている。

本研究は「視点（物事を表現する際の話し手の立場）」の観点から、日本語の「授受文」、「受身文」と「移動文」の習得について調査した。調査対象は日本語母語話者（30人）、中国語母語話者（30人）、上級中国人JSL（Japanese as a Second Language）学習者（30人）、と上級中国人JFL（Japanese as a Foreign Language）学習者（30人）である。

【調査課題】

1）談話構築において、話し手の「視点」と「授受文」、「受身文」、「移動文」の使用にはどのような関連があるか。



2）学習者の場合、母語および学習環境が「授受文」、「受身文」、「移動文」における「視点」の習得にどのように影響するか。

調査は漫画（「海上救援」）を被験者に見せ、その内容について作文させた。次は調査結果と考察の概要である。

【調査結果】

・授受文、受身文の産出は日本語母語話者より、中国語母語話者、中国人日本語学習者のほうがはるかに多く、移動文の産出は上級中国人JFL学習者のほうがほかの三つのグループより顕著に少なくなっている。

・構築された談話（作文）における話し手の視点について、日本語母語話者は漫画の主人公の女性に統一させる傾向を示しており、中国人母語話者、中国人日本語学習者には登場人物の中で移動する傾向が見られる。

【考察】

1）について

・主人公か脇役かに関わらず恩恵或いは受動の場面でさえ授受文または受身文を使用することが中国語を母語とする三つのグループに見られ、日本語母語話者グループに見られなかったことから、中国人日本語学習者による授受文、受身文の過剰使用は母語からの転移ではないかと思われる。一方、日本語母語話者はランダムに授受文、受身文を多用するのではなく、主人公に「視点」を統一させようと談話構築の一環として使用していると考えられる。

・移動文は日本語母語話者、中国語母語話者ともに産出が多いことから考えると、上級中国人JFL学習者より上級中国人JSL学習者が多く産出できたのは、学習環境、つまり日本にいるため、目標言語（日本語）に関するインプットの量がその習得を促進したのではないかと思われる。

2）について

・学習者による日本語談話に視点の移動が起きたのは学習者が第二言語における特定の構文の形式と機能のマッピング（form-function mapping）が十分にできていないためであると考えられる。つまり、本研究の結果から見ると視点の移動は、学習者が授受文、受身文における視点の用法を習得できておらず、さらに母語からの干渉も加わり、授受、受動の場面でさえ授受文、受身文を過剰使用することに起因するのではないかと思われる。

初対面場面における自己開示の日韓対照研究
―自己開示の内容による分類を中心に―

全 鍾美

（日本言語文化専攻日本語教育方法論講座　博士後期課程２年）

本研究では、対人関係の出発点である初対面場面で、初対面の相手に対して自分のことを話すという自己開示に着目した。

調査対象者は日本語母語話者（以下 JJ）16 名の 8 組、韓国語母語話者（以下 KK）16 名の 8 組である。全ての調査対象者は 20 代の女性の大学（院）生で、調査は同性同年齢で実施した。調査時間は 30 分の自由会話と約 15 分のフォローアップ・インタビューで、全て録音と文字化を行った。

会話に出現した自己開示を、内容によって、情報・事実などの客観的内容の自己開示である「記述的自己開示」と、感情・評価などの主観的内容の自己開示である「評価的自己開示」の 2 つのタイプに分類した（Morton,1978）。その結果、「記述的自己開示」は KK より JJ に、「評価的自己開示」JJ より KK に、より多く出現したことがわかった。（表 1）

表 1　内容による自己開示のタイプの出現頻度と出現率

グループ	記述的	評価的	合計
JJ	450（75.8）	144（24.2）	594（100）
KK	631（66.2）	381（33.8）	1012（100）

さらに、調査時間の 30 分を 10 分間隔にわけ、「評価的自己開示」の時間別出現傾向を検討した。JJ の「評価的自己開示」は、全時間帯にかけて出現頻度と出現率が類似していたが、KK の「評価的自己開示」は、会話の前半に多く出現する傾向がみられた（図 1）。

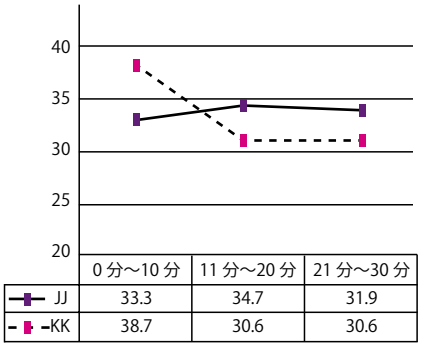


図 1 JJ と KK の「評価的自己開示」の時間別出現率

このような自己開示における日韓の相違は、双方の言語文化の慣習の相違によるものであることが、調査後のフォローアップ・インタビューによって確認できた。特に、自己開示を行う範囲、プライバシーにおける意識の差、親密な対人関係の形成におけるプロセスと意識の差が、日韓で異なっており、その結果、初対面の相手に対する自己開示の遂行にも影響を与えることが示唆された。

本研究は 20 代の同年齢の女性の大学（院）生に限定して行ったものである。研究対象者と自己開示の出現との関係を明確にするため、調査の対象を拡大して、データの分析結果を検証する必要がある。さらに、会話分析の手法を用いて、本研究で観察された自己開示の特徴により踏み入って検討することを今後の課題とする。

【参考文献】

Morton, T. L.（1978）Intimacy and Reciprocity of Exchange:A Comparison of Spouses and Strangers. *Journal of Personality and Social Psychology,* 36（1）, 72-81.

現代日本語における複合動詞の意味形成
－構文理論による分析－

野田 大志

（日本言語文化専攻現代日本語学講座　博士後期課程２年）

本研究は、現代日本語における分析性（analyzability）の高いほぼ全てのタイプの複合動詞を考察対象とし、その意味形成の全貌（体系性、連続性）について認知的な構文理論（construction grammar）に依拠した共時的な分析を行うものである。なお､本研究では構文(construction)を「意味と形式との結び付きが慣習化されたゲシュタルト的な複合体」と定義し、複合動詞を[V（動詞連用形）＋V（動詞基本形）]という形式に複数の意味が結び付いた、多義的な構文であると位置付ける。

まず、現代日本語において確立していると考えられる、複合動詞における14の構文的意味を提示する。構文的意味①＜移動主体が ある動きを伴い ある移動を実現する＞（飛び上がる・駆け登る・飛び降りる）／構文的意味②＜移動主体が 何らかの対象に対する働きかけとしてのある動作を 反復的もしくは長期継続的に伴い ある移動を実現する＞（売り歩く・買い回る・持ち帰る）／構文的意味③＜移動主体が ある動き・状態変化を伴い もしくはその結果として ある移動を実現する＞（焼け落ちる・流れ着く・飛び越える）／構文的意味④＜変化主体が ある動き・状態変化の結果として ある状態変化を実現する＞（歩き疲れる・焼け死ぬ・絡み付く）／構文的意味⑤＜変化主体が 他者や他の事物からの働きかけによって生じるある動きの 結果として ある位置・状態変化を実現する＞（突き刺さる・吹き飛ぶ・打ち上がる）／構文的意味⑥＜使役行為者が ある動作により対象に働きかけ その結果として 対象に ある使役移動を実現させる＞（打ち上げる・引き降ろす・叩き落とす）／構文的意味⑦＜使役行為者が ある動作により対象に働きかけ その結果として 対象に ある使役的状態変化を実現させる＞（積み重ねる・叩き潰す・殴り殺す）／構文的意味⑧＜主体が ほぼ同時に ある事態及び別の事態を実現する＞（光り輝く･耐え忍ぶ･泣き叫ぶ）／構文的意味⑨＜主体が ある事態を 継続的であり程度性・徹底性が高い事態として実現する＞（考え込む・震え上がる・晴れ渡る）／構文的意味⑩＜主体が（本来ならば実現するはずの、もしくは実現すべき）ある事態を 未遂･不成立に終える＞(｛拾い｝残す･｛見｝誤る･｛乗り｝遅れる）／構文的意味⑪＜主体が ある事態の実現を ある期間もしくは習慣的に継続する＞（｛走り｝続ける・｛読み｝進める・｛歌い｝まくる）／構文的意味⑫＜主体が ある事態の実現を 相互行為として ある期間継続する＞（｛話し｝合う・｛鳴き｝交わす）／構文的意味⑬＜主体が ある事態の実現を 開始・試行する＞（｛食べ｝始める・｛怒り｝出す・｛溺れ｝かかる）／構文的意味⑭＜主体が ある事態の実現を 完了・完遂する＞（｛読み｝終える・｛逃げ｝切る・｛飲み｝尽くす）

以上、14の構文的意味によって構成される構文的多義ネットワークの内部において、様々な拡張の動機づけ（motivation）が複雑に関与している。例えば、複数の意味（ネットワークにおける節点）同士を結び付けるリンクとして、メタファー（スキーマの抽出に基づく拡張関係）やメトニミー（関連性に基づくプロファイルシフト）が関与している。また、意味③から意味④、意味⑥から意味⑦への拡張を、CHANGE OF STATE IS CHANGE OF LOCATIONという空間化メタファー（概念メタファーの一種）が動機づけている。また、ネットワーク全体において、少なくとも2種類のsubjectification（主体化・主観化）が関与していると考えられる。すなわち、意味①を起点として、③→④→⑤･⑥･⑦という方向の拡張に伴い、V1（母語話者が直観的に前項要素が動機づけていると認められる意味特性）とV2（母語話者が直観的に後項要素が動機づけていると認められる意味特性）のそれぞれの事態の客体性（具体性）は保持されつつ、両者を結び付ける概念化者の主体的な解釈（因果関係の認識）が前景化(強化)される。これはもとの用法になかった読みへ展開･拡張しており、Traugottのsubjectificationが適合するケースである。一方、意味①を起点として、②→⑧・⑨→⑩・⑪→⑫・⑬・⑭という方向の拡張に伴い、V1の事態の客体性（具体性）は保持されつつ、V2は具体性の高い事態からより抽象的な事態（fictive change）へ、さらにはアスペクト的要素へと性質が変化する。これはもとの具体的な叙述内容（客体的意味内容）が徐々に希薄化すると同時に認知プロセスが前景化し、主体性が高まっており、Langackerのsubjectificationが適合するケースである。

※本稿は、2009年７月４日に行われた国際言語文化研究科オープンキャンパスでのポスター発表の内容、及びその発表の基盤となっている拙稿（野田大志（2009）「現代日本語における複合動詞の意味形成－構文理論による分析－」, 広島大学北京研究センター編『北研学刊』特集号・日本語の複合動詞, 白帝社）の概要をまとめたものである。研究の詳細は拙稿を参照されたい。

不同意表明における理由の表し方

—JSL・JFLという学習環境の違いを中心に—

日本言語文化専攻　応用言語学講座　D1 ピナンソッティクン ポラニー

研究対象

相手の述べた意見に対して賛成しないことを表明するもの

例）「ここを私達の結婚式会場にしてはどうかしら？」に対する「そうだねえ、ここも良いけど、ホールが狭いからもうちょっと考えたいなあ」など

事実情報を認めないことを表明するもの

例）「韓国へ行ったんじゃない？」に対する「行ってないよ。」など

本研究の不同意

⇩

理由の表し方を対象とする

この不同意の場合、相手に納得してもらうために**「理由」**が必要

理由をどのように表すかによって不同意表明全体の持つ意味効果が変わってくる

研究課題

(1)学習者の目標言語である日本語の使用を日本語母語話者の使用と比較する

(2)日本語を外国語として学習するか(Japanese as a foreign language、以下 JFL)、第 2言語として学習するか(Japanese as a second language、以下 JSL)によって理由の表し方にどのように異なる影響が現れるかを明確にする

(3)相手との上下関係、親疎関係、不同意の度合いが理由の表し方に影響を及ぼすのではないかと予想しているため、それらと理由の表し方との関係を明らかにする

調査方法

調査対象者

日本語母語話者（以下、JJ）	25名
タイ語を母語とするJSL学習者上位群	25名
タイ語を母語とするJSL学習者下位群	25名
タイ語を母語とするJFL学習者上位群	25名
タイ語を母語とするJFL学習者下位群	25名
タイ語母語話者（以下,TT）	25名
合計	150名

なお、ここで結果を発表するのはＪＪ、ＪＳＬ上位群、ＪＦＬ下位群に限定する

談話完成テスト（DCT）＋ 学習者の場合：レベル分けテスト

表1 ＤＣＴの概要

	相手との関係 上下	親疎	不同意の度合い	意見を述べる状況
1	同等	親	弱	旅行先についての話
2	同等	親	強	〃
3	同等	疎	弱	歓迎会の料理についての相談
4	同等	疎	強	〃
5	上下	親	弱	講座をアピールする活動 についての打ち合わせ
6	上下	親	強	〃
7	上下	疎	弱	発表会を行う場所についての打ち合わせ
8	上下	疎	強	〃

小川（1993）のクローズテストにより上位群＋下位群

ＤＣＴの具体例

3. 来週外国人の新入生が来ます。あまり親しくないAさんとあなたが寮の歓迎会の担当者です。今、何の料理を食べるかについて、そのあまり親しくないAさんに相談しているところです。

Aさん　：やっぱり外国人の新入生は日本の文化とかに慣れてないので、え～っと、せっかくだし、日本のおいしい手巻き寿司を作ったらいいんじゃないかと思うんですけど、どう思いますか。

あなたの意見は次の通りです。あなたはそのAさんにどのように言いますか。
手巻き寿司に賛成１　２　3　４　他の料理がいい

あなたの意見：　あまり手巻き寿司に賛成できない理由：もうすぐ12月だ。手巻き寿司のような冷たい料理よりも、例えばてんぷらやすき焼きなど温かい料理の方がよい。

あなた　：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

分析方法

1.不同意表明における意味公式の分類

2.理由表現形式の分類

3.理由表明パターンの分類

「理由表現形式」

1. **理由表現マーカーが使用される場合**
　～から型、～ので型、～し型、～て型 、 ～が、 ～けど型など
2. **理由表現マーカーが使用されない場合**
　2.1文末のモダリティ表現マーカーが現れない場合
　2.2文末のモダリティ表現マーカーが現れる場合
　　認識モダリティ＝ ～と思う、～だろう、～かもしれない、～らしいなど
　　当為評価のモダリティ ＝～なければならない、～べきだなど
　2.3終助詞で終わる場合
　　～よ、～ね、～な、～よね、～わなど。
3. **質問型**＝のか？、の？、か？、じゃない？、でしょうか？など

理由表明パターン

		例
パターン１	話者１の意見に対する**否定理由**	（発表会を行う場所の話） ・*この教室は外部の人にはみつけにくい場所にあるで、他の教室の方がいいと思います。*
パターン２	話者１の意見に対する**否定理由＋同意要求**	・*でも、その部屋はちょっと場所がみつけにくくないですか？*
パターン３	話者１の意見に対する、**第３者からの情報に基づく否定理由**	・でも、この部屋は他の部屋に比べて外部の参加者が見つけにくいということも聞きますけど。
パターン４	話者２の**代替案の根拠づけ**	・*201号室もいいですけど、もう少し分かりやすい場所の方が良いのではないでしょうか。*
パターン５	**理由無表明**	・（旅行の話） *神戸も良いけど、他に００とかどうかな。*

結果1　理由表現形式

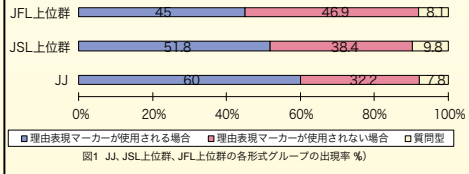
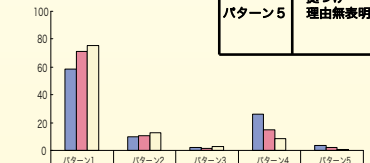


図1 JJ、JSL上位群、JFL上位群の各形式グループの出現率 %）

・学習者に比べ、日本語母語話者のほうが理由表現マーカーをよく使用
・学習者の場合、質問型の出現傾向以外の結果を見ると、JSL 上位群のほうがJFL上位群よりＪＪの使用傾向に近くなっている



	パターン1	パターン2	パターン3	パターン4	パターン5
JJ	58.2	9.9	1.9	26.2	3.8
JSL上位群	71.3	10.9	1.1	14.7	1.9
JFL上位群	75.5	12.6	3.1	8.4	0.4

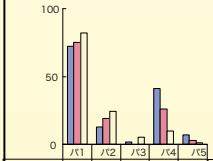
図2 JJ、JSL上位群、JFL上位群の各パターンの出現率%）

結果2　理由表明パターン

・JJ、JSL上位群JFL上位群の間に、理由表明パターンの出現総数には差がない
・各パターンの出現傾向については、JSL上位群のほうがJFL上位群よりJJ に近くなっている

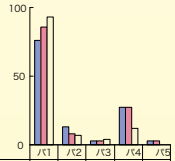
結果3　理由表明パターンに見られる上下関係・親疎関係・不同意の度合いによる違い

上下関係の違いによるパターンの出現傾向



	パ1	パ2	パ3	パ4	パ5
JJ	72	13	2	41	7
JSL上位群	75	19	0	26	3
JFL上位群	82	24	5	10	1

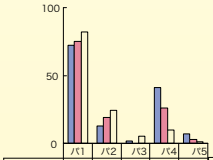
図3 JJ、JSL上位群、JFL上位群における同等な関係の場面のパターンの出現傾向



	パ1	パ2	パ3	パ4	パ5
JJ	76	13	3	27	3
JSL上位群	86	8	3	27	3
JFL上位群	93	7	4	12	0

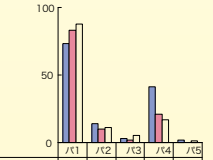
図4 JJ、JSL上位群、JFL上位群における上下関係の場面のパターンの出現傾向

親疎関係の違いによるパターンの出現傾向



	パ1	パ2	パ3	パ4	パ5
JJ	72	13	2	41	7
JSL上位群	75	19	0	26	3
JFL上位群	82	24	5	10	1

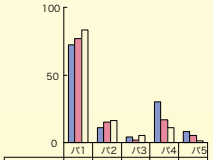
図5 JJ、JSL上位群、JFL上位群の親しい（親）関係におけるパターンの出現傾向



	パ1	パ2	パ3	パ4	パ5
JJ	73	14	3	41	2
JSL上位群	83	10	2	21	0
JFL上位群	88	11	5	17	1

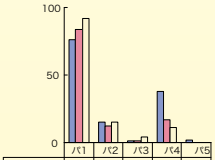
図6 JJ、JSL上位群、JFL上位群の親しくない（疎）関係におけるパターンの出現傾向

不同意の度合いの違いによるパターンの出現傾向



	パ1	パ2	パ3	パ4	パ5
JJ	72	11	4	30	8
JSL上位群	77	15	2	17	5
JFL上位群	83	16	5	11	1

図7 不同意の度合いが弱い場面におけるJJ、JSL上位群、JFL上位群のパターンの出現傾向



	パ1	パ2	パ3	パ4	パ5
JJ	76	15	1	38	2
JSL上位群	84	12	1	17	0
JFL上位群	92	15	4	11	0

図8 不同意の度合いが強い場面におけるJJ、JSL上位群、JFL上位群のパターンの出現傾向

結果のまとめ及び考察

不同意表明に伴う理由表現形式および理由表明パターンについて学習環境による使用傾向の違いを観察すると、いずれもJSLよりJFLの方がJJとの隔たりが大きかった 。このことから、学習者の語用論的知識は外国語環境より第2言語学習環境の方が発達しやすいことが示唆される

Kasper and Schmidt(1996)

： 外国語学習環境より第二言語学習環境の方が語用論的知識は促進されやすい

この研究では、この指摘を**支持**する結果となった

今後の課題

1. **調査対象者の拡大**
2. **実際の会話による結果**
3. **場面設定**



中国・西双版納タイ族の男性産婆
― 出産と伝統医療との関わり ―

Man-midwife of the Xishungbanna Dai in China:
On the relationship between birth and traditional medicine



名古屋大学 国際言語文化研究科 博士後期課程
Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya Univ. DC.
ISOBE Misato 磯部美里

Ⅰ はじめに

1. 問題の所在

出産は生物学的事象であるとともに、時代や社会、文化によって大きく変容し異なる意味を付与される事象でもある。56の民族から構成される多民族国家、中国の各民族にも様々な出産文化が存在してきた。しかしながら、中華人民共和国成立以後、近代医療の普及や計画出産政策(いわゆる一人っ子政策)などの実施によって、各民族の出産方法は伝統的方法から近代的方法へと移行し、政府の望む画一的な出産方法へと収斂される状況がみられる。そこで、本発表では雲南省、西双版納タイ族自治州に居住するタイ族の「男性産婆」を事例として、少数民族の伝統的出産の姿とその変容に注目する。

2. 先行研究と本発表の目的

従来の出産研究において、「男性産婆」の事例はいくつかの地域で報告されている。これらの研究では、「男性産婆」の事例が日本にもみられたこと[板橋 2004]、フィリピンのブキドノン族の男性産婆が社会的職能者として高い社会的地位を有した存在であること[河合 1988]などが指摘されている。しかし、中国における「男性産婆」についてはほとんど研究がなされていない状況である。こうした中で、報告者は西双版納タイ族において中華人民共和国成立後、男性産婆に加え新たな「女性の」産婆が創出されていること[磯部 2007]、産婆のタイプによって出産方法が異なること[磯部 2007]を指摘してきた。本発表ではこれまで明らかにされてこなかったタイ族の男性産婆の誕生背景に注目し、そこに見られる出産と伝統的医療の関わり、ならびにその変容について検討する。

Ⅱ 西双版納タイ族の出産風景

1. 概況

・西双版納タイ族自治州

雲南省の最南端、ミャンマーとラオスに隣接し、総人口85万2938人で約35％がタイ族。第一次産業が盛んで近年観光業も発展。



・タイ族

国内総人口約115万人、主に西双版納タイ族自治州、徳宏タイ族ジンポー族自治州などに居住。タイ・ルー、タイ・ヌー、タイ・ヤーなどの自称集団が存在する。本発表では西双版納のタイ・ルーを対象。上座部仏教を信仰。

・調査地域

調査地は、景洪市西部、旧嘎栋郷(現嘎哂鎮)のB村民委員会が管轄する6つのタイ族村。稲作とゴム栽培で生活。



いろりと入り口
(写真右側が出産場所)

2. 調査村の自宅出産と産婆のタイプ

・自宅出産の様子(2006年調査段階、約20%が自宅出産)

いろりの側、入り口脇で出産、家族や親戚(男性も立ち会う)に見守られて出産。

・自宅出産における出産介助者と産婆

① 出産介助者・・・家族や親戚の年輩女性が助産。
→先人の助産を見て覚えたり、自身の経験に基づいて助産。

② 産婆・・・親戚ではないにもかかわらず頼まれて助産。
→学習経験がある＝産婆“グン・ハップ・ルック”。

産婆のタイプ

①**欧米の影響を受けた二世代限りの産婆**・・・男性、欧米の宣教師が病院を開設し、タイ族男性が出産を始めとする助手を務めた。その息子も父から助産術を学んだ。

②**伝統的産婆＝男性産婆**・・・産婆になりたい男性が志願し、男性、村の(男性)産婆に弟子入りし、助産術を学ぶ。

③**創出された産婆＝「産婆」**・・・女性、共産党により派遣された医療隊が女性に助産術を学ばせ、産婆を育成する。

Ⅲ 伝統医療と男性産婆の条件

1. 伝統的施術方法「バオガン」

・**「男性産婆」**・・・バオガンと助産行為ができる男。
・**「産婆」**・・・助産行為のみでバオガンはできない女。
・**「バオガン」とは何か**
＊ 呪文を唱えた後に、その力を息吹と共に吹きつける行為「タイ医学」における呪術的施術方法の1つ。伝統的タイ医学における呪術的施術方法の1つ。
＊ ①病気やケガに利用する ②出産(難産)に利用する。
・・・部位や症状によって「バオガン」の内容は異なる。
・**「バオガン」の習得方法**
「秘訣」として門外不出であり、もし人に軽々しく伝授すれば、効果がなくなる」[林艶芳 2006]とされ、希望者は「バオガン」のできる師匠に弟子入りし希望する「バオガン」を学ぶ。

2.「バオガン」習得の条件

【事例1】バオガンを習得したF村男性

・1926年生まれ。
・10歳で出家、20歳で「大仏爺(成年僧)」になる前に還俗。その後自ら希望し、「バオガン」習得。
・「バオガン」習得の儀式－師匠が決めた日、師匠の家を訪問(夜8時から12時ぐらい)。
・儀式時－準備－ろうそく、学ぶ内容に応じた金、酒、ビンロウ、布。
・習得期間－3日程度(人によっては10日かかる人も)。
・習得方法－師匠の持っているノートから習得したいものを学ぶ。
・「バオガン」習得に必要なもの－文字(タイ・ルー文字)の読み書き。
・「バオガン」習得後のきまり－盗み、喧嘩など悪事を働いてはいけない。
→タイ・ルー文字が読めて、出家経験があることが習得条件。
→実質的に男性しか習得できない。

Ⅳ 男性産婆の事例から見る助産



A・H氏 C村

1937年生まれ。叔父が産婆だったため、30歳頃自ら望み叔父に弟子入り。臨時収入、人生経験になると思い希望。習得時、ろうそくなどを準備し叔父の家で「バオガン」習得の儀式。師匠は「バオガン」だけでなく、助産方法も伝授。助産に行く時、道具一式が入ったかばんを持ち、上下白い服を着用。

助産道具は、蛇の抜け殻、師匠が記した経文、薬草やすでに生まれた子供のへその緒、白布など。師匠から伝授されたものと師匠から教えられた道具。これらの助産道具の種類や使用方法も師匠から学んだ。

・助産方法

まず産婦の脈や体温を調べ、胎児が出た後、(消毒したはさみで)へその緒を切り、産婦の足に結び胎盤が出るのを待つ。

・難産(胎盤が出ないなど)の場合
「バオガン」した水(息を吹きかけた水)を産婦に飲ませ、産婦の腹部を上から下になでる。 →飲むという内からの効果、撫でるという外からの効果。

・男性産婆の役割

①助産 ②「バオガン」によるトラブル対処



A・H氏の道具の詳細
①蛇の抜け殻：蛇は脱皮することから、順調に出産できるよう、妊婦にのませる。
②写経：師匠からもらったもの。お守りとして使用。
③薬草：妊婦の気分が悪い時に嗅がせる。
④薬草：妊婦の心音が早い時に飲ませる。師匠からもらった。
⑤へその緒：新生児の体調がすぐれないときに飲ませる。
⑥白布：仏教儀礼の際に使用する布。お守りとして使用。
⑦薬草：出産が長引く時に使用。
⑧薬草：母乳が出ない時に飲ませる。
⑨薬草：出産が長引く時に使用。
⑩薬草：出産が長引く時に使用。
[出所] 2006年8月の調査での聞き取りに基づく

Ⅴ まとめ －タイ族の出産と伝統医療の関わりとその変容

上座仏教を信仰するタイ族においては、出家経験はタイ族社会において知識層であることの象徴であり、その中で「知」が継承されている。またこの「知」は社会的承認を得た「知」であるがゆえに有効とされる。伝統医療における施術方法である「バオガン」の習得もこの「知」に含まれ、これを習得したものが助産とトラブル対処法の技術を持った産婆となることができる。この「知」は男性しか習得できないため、ここに「男性産婆」が誕生する契機が生まれた。このように、タイ族の出産は、伝統医療に依拠して実践されてきた。

中華人民共和国成立以後、この地においても、国家主導あるいは偶発的な要因によって、近代医療的出産方法を学んだ産婆が誕生した。近代的出産方法の普及、浸透は、出産場所や助産技術といった直接的な出産方法に対し変更を迫るだけではなく、タイ族社会の伝統的な知識の継承体系という規範を大きく変えるものである。

参考文献
・磯部美里－2007a 「西双版納・タイ族における産婆の創出」『中国研究月報』Vo.61 No.7 11-21頁
－2007b 「自宅出産における出産介助者の相違－西双版納・M村のタイ族を事例として－」『現代中国』第81号 133-146頁
・板橋春夫－2002 「トリアゲジサの伝承－出産に立ち会う男たち－」『日本民俗学』第232号 35-50頁
・河合利光－1988 「ブキドノン族の出産・病気・紛争」小川正恭・渡邊欣雄・小松和彦『社会人類学の可能性Ⅱ』200-221頁
・松岡悦子(編)－1991 『出産の文化人類学－儀礼と産婆［増補改訂版］』海鳴社
・林艶芳－2006 『傣医薬文化』雲南教育出版社
・《民族問題五種叢書》雲南省編輯委員会－1983a 『西双版納傣族社会綜合調査(一)』雲南民族出版社

英国映画産業の社会的機能に関する一考察 -社会・エンパワーメント志向性の再考-

A study for the social roles of British Film Industry - Reconsideration of the society and empowerment orientation-

木村めぐみ Megumi KIMURA　メディアプロフェッショナルコース　博士後期1年　Department of Media Professional studies

米国，英国，フランス，日本の映画産業の志向性を分類した立岡浩は，その著書で日本映画産業の「産業・ビジネス志向が比較的強く，かつ産業・ビジネス志向と文化・芸術志向との2つの志向性間が全く切り離されている」こと，そして英国映画産業が「文化・芸術志向，産業・ビジネス志向，社会・エンパワーメント志向の3つのトライアングル間でバランス感覚ある調和のとれ」ていることを指摘した。既に米国の産業・ビジネス志向性とフランスの文化・芸術志向性はもはやその国の映画産業の目立った特徴として認められ，我が国においても多くの研究者によって研究されてきた。英国映画産業研究は内山隆らを中心に進められ，「政府が強い関与を行ってこなかったこと」，「バランスのとれた貿易収支」，「商業性と文化性のバランス感覚」の三点から英国映画産業が日本映画産業のモデルとなりうることが示唆されているが，立岡は特に，社会・エンパワーメント志向性に注目して議論を展開している。

立岡のいう社会・エンパワーメント志向性とは，「社会的課題とその解決・予防のための基盤整備ならびにこうした目的のための多様な公共非営利団体を利用すること」であり，その領域には「教育・訓練，雇用，技術・研究開発，健康，心理・癒し，都市・地域再生，観光・イベント，知的財産権等の権利管理，建築・遺産，多様性・社会的一体性(包摂)，　ソーシャルキャピタル，政治，外交，ブランドイメージ，ソフトパワー」が含まれる。

↑

問題点：英国の社会・エンパワーメント志向性登場の背景に対する考察と「社会・エンパワーメント志向性」そのものに対する議論の不足
⇒今日の英国映画産業に多大なる影響を与えたサッチャー・ブレア政権時の文化（映画）政策に焦点をあて、英国映画産業の「社会・エンパワーメント志向性」登場の背景を追究する。

結論：今日、英国映画産業は、政府との結びつきを強めながら、その**「社会的役割」**の追求を目指している。それは、サッチャー政権時からブレア政権時の映画関連政策によって形成された**放送局／政府機関／地域の支援・協働体制**に基づき、それによって英国映画産業はこれまで抱えてきた**課題を解決**しながら、その**波及効果**を期待されている。



◆サッチャー政権時の映画関連政策
自由放任主義による市場競争、
企業スポンサーシップ

英国第4番目のチャンネル、Channel 4の開設と事業方針の決定〈1980年、放送開始は1982年）
▼
Channel 4の「出資」「事前放映権買付」「共同制作」という「放送局による映画製作」モデルの構築
▼
人材育成、独立プロダクションの成長

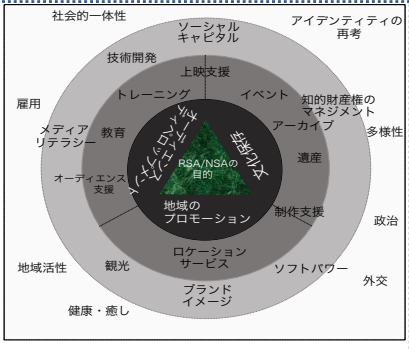
◆ブレア政権時の映画関連政策
教育政策、クリエイティブ（文化）
産業の「社会的役割」の追求



映画関連政府機関（Department for Culture, Media and Sports、UK Film Council, Regional / National Screen Agency（以下, RSA/NSA）を組織統合、整備。
▼
映画産業の放送局・政府機関・地域の支援・協働体制
▼
映画を用いた「オーディエンス・ディベロップメント」「地域のプロモーション」「文化保存」関連活動の活発化

今日、英国映画産業は政府機関からの介入を受け入れ，放送局・地域の映画組織（RSA/NSA：RSAはイングランド内9拠点、NSAはスコットランド、ウェールズ、北アイルランドにそれぞれ拠点を置く地域に根差したスクリーン・エージェンシーである）ともかかわりあいながら政策目標の達成を目指している。サッチャー政権時にすでに築かれ始めていた映画産業と放送局との支援・連携体制は，2000年に設立されたUK Film CouncilおよびRSA/NSAとも連動し，今日，英国映画産業と放送局／政府機関／地域の映画組織は支援協働体制を形成している。そうすることによって**「オーディエンス・ディベロップメント」、「地域のプロモーション」、「文化保存」**をめぐる様々な活動が行われているが，これは映画産業と地域・オーディエンスがRSA/NSAによってConnectされて実践されている。右図は、立岡の「社会・エンパワーメント志向性」の領域に則りかつ、RSA/NSAが実践する諸活動、それによって生まれる波及効果、そしてそれがさらに生み出す波及効果を段階的に整理したものである。

英国映画産業の「社会・エンパワーメント志向性」とは、
＊英国映画産業が抱えてきた課題を解決するための機能**＜課題解決機能＞**
＊波及効果を見据えた**＜波及効果促進機能＞**



英国映画産業の社会・エンパワーメント志向性モデル
（RSA/NSAの諸活動とその波及効果）

筆者作成

社会・エンパワーメント志向性とはなにか

そもそも「社会・エンパワーメント志向性」とはなにか。
⇒立岡は3つの志向性で4国の志向性を考察。文化・芸術志向性、産業・ビジネス志向性は、映画産業がかかえる側面の広義と狭義を示す語で構成されていることである。立岡が言わんとするのは社会という言葉の後ろにそれを補完するかのように付記された「エンパワーメント」では？

＊エンパワーメントとは、「権限を与えること、自由裁量権の増大」（福祉、教育、女性運動といった面で用いられてきた）
英国では､映画産業だけでなく､たとえば、2001年に英国で発行されたA new Commitment to Neighborhood renewalというコミュニティ参加推奨プランが導入されている。
◆その背景には，貧困（給付金依存）層の増加による学力低下，高犯罪率，高失業率，ドラッグ使用の増加，そしてそれによって懸念される公営住宅団地，借家，持ち家の価格高騰といった社会問題がある。
⇒英国政府は18の政策実行チームの政府内外400名Social Exclusion Unitによって持続可能で包括的なアプローチで
（1）すべての貧困層に対する低無職率，低犯罪率，よりよい健康，技術，住宅，環境を共通の目標とすること，
（2）貧困層とその他の人々の間の格差を縮めることで，そうするために新しい政策，ファンドの供給，よりよい地域の強調とコミュニティ・エンパワーメントなど，国と地域による支援を確約した。

….畢竟するに、英国においてはブレア政権以降、映画産業だけでなく、国家レベルで「エンパワーメント」が政策として掲げられている。

参考文献
John Hill"Cinema," The Media in Britain: current debates and developments, Ed. Jane Stokes, Anna Reading.p74, London, 1999、立岡浩:『映像コンテンツ産業の政策と経営』, 中央経済社(2006).
木村めぐみ：「イギリス映画産業におけるChannel 4設立の意義」情報文化学会誌，第15巻1号, pp.45-53, (2008).



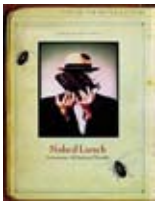
(*Mr. Beat*#1)

モダンビートとは誰か—*Mr.Beat* におけるビート・ジェネレーションの再評価

名古屋大学国際言語文化研究科博士後期課程　社河内友里

1. ビート・ジェネレーションの再評価

1950 年代アメリカで興隆したビート・ジェネレーションは、当時の若者文化に大きな影響を与えた。その影響は 1970 年代のヒッピー文化へと至り、その後の平和運動、人権回復運動、ウッドストック・ミュージック・フェスティバルやフェミニズム運動にも繋がった（Swartz　25）。その後、1980 年代後期に、音楽、麻薬、ライフスタイルという点において新しくアンダーグラウンド・カルチャーとして生まれた「クラブカルチャー」が、1990 年代半ばには主流になっていった（Redhead xvi）。そのような動きの中で、1990 年代にビート・ジェネレーションの再評価が顕著な動きとなった。例えばレッドヘッドによれば、文学においては、1990 年代には、ビート・ジェネレーションの反復と言えるような性格を持った作家たち（“repetitive beat generation”）によるフィクションが出現し、1940～50 年代のビート・ジェネレーションが様々な形で文学作品の中に言及されていることが明らかとなっている（Redhead xi）。本発表では、1997 年から現在まで続いている Chris Yambar 著のコミック、Mr. Beat に焦点をあて、そこにビート・ジェネレーションがどのように言及されているのかを考察する。Yambar は自身のウェブサイトにおいて、自身や Mr. Beat の主人公である Mr. Beat を含め、ビート・ジェネレーションに傾倒する現代の人々のことを、1950 年代のビート・ジェネレーションとは区別して、“modern beats” と呼んでいるのであるが、この “modern beats” は、ビート・ジェネレーション、あるいはそれが後世に与えている影響を、どのように捉えているのだろうか。







1990年代以降、ビート・ジェネレーションに関係する映画が多く製作されていることからも、ビート・ジェネレーションの再評価が顕著な動きであることが分かる。左から、(*Naked Lunch*『裸のランチ』)(1991)、*The Last Time I Committed Suicide*（『死にたいほどの夜』)(1997)、*The Source*　（『ビートニク』）(1999)

2. ビート・ジェネレーションにおける恍惚

ビート文化の主要な特徴として、「恍惚」のモチーフが挙げられる。Jack Kerouac、Allen Ginsberg、William Burroughs らビート作家の作品では「恍惚」のモチーフが重要な役割を果たしている。スワーツが「ビート文化は超越の文化である（Swartz 92）」と述べていることからも、ビート・ジェネレーションが、通常の状態を超え「恍惚」に至るという心理状態を重要視していたことが明らかである。



ビート作家たち(Watson　book cover)

・麻薬の摂取による恍惚

恍惚状態に到達するためにビート・ジェネレーションがしばしば用いたのが、麻薬であった。

・時間を超越することによる恍惚

音楽を聴いたり、猛烈なスピードで車を走らせたり、瞑想したりすることによって時計通りの時間観念を超越することにより到達することの出来る恍惚状態については、主に Jack Kerouac の作品において示されている。例えば、On the Road において示された、Neal Cassady の恍惚状態である “it” を得るという状態は、時計どおりの時間を超越するという感覚を得ることにより到達することの出来る恍惚状態である (Mortenson 71)。

3. Mr. Beat における恍惚

Mr. Beat の主人公 Mr. Beat は、コーヒーショップのオーナーであり、無類のコーヒー好きである。コーヒーショップの掃除道具入れの扉など様々な場所から繋がっている四次元の世界を行き来し、世界を守る役目を担っている。“King of the beatniks, protector of the multi-verse and positive zone, pervader of cool”(Mr. Beat#35) と紹介されているように、彼はビート・ジェネレーションに傾倒しており、芸術を愛し、クールであることを重要視している。



コーヒーを飲み、恍惚状態に到達する Mr. Beat。(*Mr. Beat*#1 7)

・カフェインの摂取による恍惚

Mr. Beat には、コーヒーを飲んで恍惚状態に到達する場面が多く描かれている。主人公の Mr. Beat に限らず、彼のコーヒーを飲んだ人々はたちまち恍惚状態に到達し、別の世界へと誘われる。カフェインによる恍惚状態は、Mr. Beat が常に求めているものとして描かれている。

さらに、Yambar が自身のウェブサイトでカフェインを “legal drug” と呼んでいることから (Yambar.com)、コーヒーが、麻薬の危険性や非合法性が十分認識されている現代における麻薬の役割を持つものとして描かれていることが分かる。

・時間を超越することによる恍惚

Mr. Beat は四次元の世界に入り、時間を超越して行動することができるが、ビート・ジェネレーションのように時間の超越の際に恍惚状態に達することはない。

4. Mr. Beat における反復と非順応

Mr. Beat には、主なテーマとしてカフェインによる恍惚の追求がある。媒介物を通して恍惚を得るという点において、カフェインによる恍惚の追求は、ビート・ジェネレーションが麻薬によって恍惚を求めた行為の反復であるといえる。しかし、それが「合法の麻薬」として認識されているという点においてカフェインの摂取には社会への非順応的な要素はなく、本来のビート・ジェネレーションの非順応的な性質の反復とは言えない。また、Mr. Beatにおいて、時間の超越という行為が恍惚の追求とは全く関連付けられずに言及されているという面においても、Mr. Beat におけるビート・ジェネレーションの言及は、ビート・ジェネレーションの完全な反復ではないことが分かる。

・盲目的な反復の拒否、生産的な反復

ビート・ジェネレーションにとどまらず、その影響を大きく受けた 1960～70 年代のアメリカ文化、歴史に言及する場面も多く描かれているが、そこには完全な反復というものを否定する姿勢が見受けられる。例えば、四次元を自由に行き来できる Mr. Beat が、Jimi Hendrix から麻薬を取り上げたり、ベトナム戦争を終わらせたり、Charles Manson に殺人をやめさせるなどして、歴史上の好ましくない出来事を止めようとする場面からは、盲目的な反復を積極的に拒否する姿勢が見られる。また、当時は新鮮に受け止められ、注目されていたが、現在では主流になった文化をいつまでもそのまま反復するのではなく、自ら変化させ、生産的な反復を行なう姿勢も見られる。

・「非順応」の反復

文化の生産的な反復を行なう際、Mr. Beat の基本的な姿勢となっているのはビート・ジェネレーションにおける非順応の態度を反復することである。Yambar の示している反復は、スーパーヒーローのコミックスなどのように主流な文化や、ヒッピー文化のように現代では主流となっている文化に対する従順な反復ではない。彼は、新しい文化としてのアンダーグラウンド・カルチャーを生産するという姿勢こそを反復するという点を強調している。



John Lennon,Yoko Onoの作品のパロディになっている。Bagismに皮肉を述べたり、John LennonのアルバムタイトルMind GamesをMint Condition Gamesに変えているところからは、既存の芸術に新しい解釈を盛り込んだ生産的な反復が見られる。また、“You are here”と書かれたインディーズ雑誌の書籍陳列棚や“Revolution”、“Imagine”の歌詞からは、「非順応」の態度の反復が見られる。(*Mr. Beat* #1 110,111)

5. “modern beats” とは



1960～70年代の歴史上の好ましくない出来事の直前の時間にタイムスリップし、出来事が起きるのを阻止しようとする Mr. Beat 。(*Mr. Beat*#2 43,44)

“modern beats” は、媒介物を用いて心理的な恍惚状態を追求するという姿勢と、主流社会に非順応的であるという点において、ビート・ジェネレーションの反復をしていることが読み取れた。しかし、盲目的な反復は拒否し、新しい創造を基本とした生産的な反復をしていることが明らかとなった。

“modern beats” は、恍惚状態を求めるという点とアンダーグラウンド・カルチャーを求めるという点において、ビート・ジェネレーションと一致している。恍惚状態とアンダーグラウンド・カルチャーの関係性について、今後さらに明らかにしていきたい。

参考文献

Kerouac, Jack. *On the Road*. 1957. New York: Penguin, 1976.
Mortenson, Erik R. “Beating Time: Configurations of Temporality in Jack Kerouac’s *On the Road*.” *The Beat Generation: Critical Essays*. Ed. Kostas Myrsiades. New York: Peter Lang, 2002. 57-75.
Redhead, Steve. *Repetitive Beat Generation*. Edinburgh: Rebel, 2000.
Swartz, Omar. *The View from* On the Road: *The Rhetorical Vision of Jack Kerouac*. Carbondale, IL: Southern Illinois University Press, 1999.
Watson, Steven. *The birth of the beat generation : visionaries, rebels, and hipsters, 1944-1960.* New York : Pantheon Books, 1995.
Yambar, Chris. *The Complete Mr. Beat*. Pittsburgh, PA: Comic Library International, 2002. Vol.1-3 of *The Complete Mr. Beat*. 3vols. to date. 1997-.
---. *Yambar.com.* Jan. 17, 2009 < http://www.yambar.com>

『Dir』におけるH.フォーゲラーの庭に関する季節描写の考察

国際言語文化研究科国際多元文化専攻ヨーロッパ言語文化講座D1　白川　茜

■はじめに

H.フォーゲラーは19世紀末期から20世紀初頭にかけて、ドイツユーゲントシュティール様式を自身の作品に取り入れ、若くして注目された画家である。その作品の多くは1895年に移住した北ドイツの寒村ヴォルプスヴェーデで制作されたもので、フォーゲラーはここを1920年代まで自身の芸術活動の拠点とし、このアトリエをBarkenhoffと名付けた。

フォーゲラーの思想および作品は、世紀末前後と第一次世界大戦前後では著しい変化がみられるものの、いずれの時期においても画家はBarkenhoffに自らの理想を詰め込み、そこでの生活から芸術の着想を得てきた。本研究ではとりわけユーゲントシュティール画家としてのフォーゲラーの姿が最も如実に表れている詩集『Dir』に焦点を絞り、Barkenhoffの生活を通じてフォーゲラーが庭に対してどのような価値観を持っていたかを考えたい。



現在のBarkenhoff



1904年頃のBarkenhoff

■詩集『Dir』（邦題：『君へ』）とは

『Dir』は雑誌『Insel』に掲載されたフォーゲラーの詩を集めたものである。詩集は既に画家がヴォルプスヴェーデの代表的な画家として世間に認知されていた1899年に初めて発刊された。

この詩集はヴォルプスヴェーデへの移住以来ずっと想いを寄せてきた村娘マルタ（後に画家の妻となる）への愛を綴ったもので、その内容はフォーゲラーという画家の作品という枠内だけに留まらず、『Insel』の傾向、ひいてはユーゲントシュティールの本質を考える上でも重要である。





（雑誌『Insel』表紙）

■『Dir』の物語構成①

Herz aller liebste denke mein,
Wenn im Garten blühen die Blümelein,
Wenn morgends der goldene Sonnenschein
Schaut in Deine Fensterlein!
Dann musst Du hinab in den Garten gehn,
Musst liebevoll nach den Blumen sehn.
Manch Mägdlein liess sie traurig stehn,
Sie mussten sterben und vergehn.



冒頭は花の咲く春の庭の描写から始まり、そこから旅立ち、「Du（君）」へ別れを告げる一人の男の心情を歌う内容である。主人公の男は挿絵から画家自身であり、「Du」はマルタと考えられる。前半部では、男は旅の道中で目にした木々や花々、鳥、小川などの自然に目を向けながら、恋人Duへの愛を紡いでいく。庭に訪れた春は色彩豊かに描かれ、愛の温かな情景と結びつく。冒頭部においては、後半に続いていく季節が移りゆくに従って訪れる死の予感を漂わせている。





（1898年頃の
マルタとフォーゲラー）

■『Dir』の物語構成②

Langsam strich ich durch den alten Garten,
Wo bemooste Apfelbäume starrten
Mit den krummen Knorrenarmen
In die hohe Abendluft,
Wo im erdgen Bodenduft
Kleine weisse Glockenblumen
Auf den Gruss der Sonne warten.
（中略）
Träumend staunen in den alten Garten, –
Wollen sie ein Wunder stumm erwarten? –
Fenster, heimlich blinkende, hinaus.
Müde flüchtend aus den lauten Wogen
Hat es sehnend heimwärts mich gezogen.
Und das Leben, das ich gerne liess,
Tausch ich nun mit trautem Paradies.



やがて春が過ぎ、秋が訪れ、男は恋人「Du」の元に帰還する。
後半部は生への恐れと死への憧憬を恋人に訴える内容と変化し、そして再び庭の情景へと戻っていく。色の消えた庭は、前半部と対照的である。





■庭に訪れる季節と画家の死生観

フォーゲラーと深い親交のあったR.M.リルケをはじめ多くの人物が、画家の芸術がBarkenhoff及びその庭と深く結びついていることを指摘している。リルケはフォーゲラーに関する論文で彼を「Gärtner」と表現し、その芸術について、Barkenhoffの庭に絶対的な重心が置かれ、そこを中心として円を描くように芸術の枠を引いたと解説した。

『Dir』においても、庭というフォーゲラーが限定した空間が物語の初めに登場し、そこから輪を広げるようにその周りの木々や花々、鳥といった庭の外の自然の情景描写へと移っていく。だが最後はまた庭へと戻り、彼の世界は幕を閉じる。その描写の鍵となるのは、季節の移り変わりである。春と冬を対立させ、色を次第に消していくことで、画家は自らの死生観を投影し、画面の中で表現したのである。

■おわりに

フォーゲラーは人生の半分をヴォルプスヴェーデのBarkenhoffに費やし残りの半分をヨーロッパ諸国やセイロン、ロシアなどへの旅に費やした。この『Dir』の顛末は、画家自身の人生や芸術の態度とも重なる。幾度も旅をしながらも、最終的にはBarkenhoffの庭に戻り、創作活動の幅をそこに限定した『Dir』の主人公のような画家の生き方そのものが、彼の世紀末前後の芸術を象徴しているともいえる。





現在のヴォルプスヴェーデの沼地（夕方）

■画像引用元

Elze, Peter, Baumann, Cornelia und Losse, Vera: Heinrich Vogeler und Jugend-Stil, Worpswede 1997.
Petzet, Heinrich Wiegand: Von Worpswede nach Moskau. Heinrich Vogeler. Ein Künstler zwischen den Zeiten, Köln 1972.
Vogeler, Heinrich: Dir. Gedichte von Heinrich Vogeler, Leibzig 1980.

現代中国語の方位詞に関する研究—“上”と“里”を中心に

寺澤 知美

（国際多元文化専攻東アジア言語文化講座　博士後期課程３年）

現代中国語の方位詞とは、方向や相対的な位置関係を表す語を指し、その語構成上の特徴に基づき“上、下、前、后、里、外、内、中、左、右、东、西、南、北”などの「単純方位詞」と、これらに“边、面、头”などの接尾辞を加えた「合成方位詞」の二種類に分けられる。

これらの方位詞の用法については、それぞれの役割分担が明確な場合もあれば、互いに重複する機能を有する場合もある。例えば、“上”と“里”の場合には、“上”が二次元的特徴の顕著な場合（例：“桌子上”[机の上]）に用いられるのに対し、“里”は三次元的特徴を有する場合（例：“房间里”[部屋の中]）に用いられるという明確な違いが存在しているが、実際には“上”、“里”のどちらも用いることのできる場合も 少なくない。

例えば、二次元的特徴の顕著な“广场”[広場] のような名詞についても、それが一つの「範囲」として認識される場合には“里”との共起も可能となる。但し、全ての場合において平等に置き換えが可能となるわけではなく、例えば、「線・帯状」の形状的特徴を持つ「道」を表す名詞のうち、二次元的特徴の顕著なもの（“马路”[大通り] や“公路”[自動車道路] など）については基本的に“上”とのみ共起する傾向がみられる。また、ある一定の大きさを有する「乗り物」（例：“公共汽车”[バス]、“飞机”[飛行機]）については、三次元的特徴を有しているにも関わらず、“上”と共起することが多い。ここで「一定の大きさを有する」という条件が付くのは、三次元的特徴（「内包」の関係）よりも「接触・支持」の関係が際立つ必要があるためである。したがって、比較的小さく、さらに密閉性を有する“电梯”[エレベーター] のような乗り物については、通常“里”との共起が優勢である。しかし、“上”と共起する例も皆無ではなく、その場合、三次元的空間（「内包」の関係）ではなく、エレベーター自体が高い位置にあるというニュアンス（「上方」のイメージ）に焦点が置かれる。つまり、乗り物と“上”との共起には、「接触·支持」の関係だけでなく、「上方」のイメージも大きな役割を果たしているといえる。

以上、方位詞“上”、“里”が具体的な空間を表す名詞と共起する場合の例をいくつか挙げたが、“上”、“里”が「文字情報」や「映像・音声」に関わる名詞などの非空間を表す名詞と共起する場合における状況は、さらに複雑なものとなっている。例えば、“书”[本]、“小说”[小説] などの文字情報に関する名詞については、“上”、“里”のいずれとも共起が可能である場合が多い。但し、常に置き換えが可能というわけではなく、例えば、文脈などから具体的な本の一頁を見て発話していることが明白な場合には、本の中の特定の頁（或いはそこに書かれた文字）とそれを見ている話者の視線との間に生じる一種の接触関係から“上”との共起が優勢となる傾向がみられる。以上のような例から明らかなように、“上”は二次元的特徴の顕著なもの、「接触関係」を表すものについて用いられ、“里”は三次元的特徴の顕著なもの、「内包関係」を表すものについて用いられるという傾向がある。しかしながら、対象となる各名詞の持つ特徴は一つに限定されるものではなく、その名詞の持つ複数の特徴のうち、どの部分に焦点が当たるかによって用いられる方位詞に違いが生じる。したがって、二次元的特徴の顕著な“广场”のような場合についても、話者の認識の違いによって“上”ではなく“里”を用いることが可能となるのである。

『わたしのアントニーア』の二つの女性像　―キャザーのイントロダクションにおける戦略―
Two Woman Figures in *My Antonia*: Failure in Cather’s Plot

名古屋大学　国際言語文化研究科博士後期課程　藤井爽
Graduate School of Language and Cultures, Nagoya Univ. DC. FUJII Soh

●はじめに

ウィラ・キャザー（1873-1947）の『私のアントニーア』（1918）に描かれるジムの視点を通した女性像は、アントニーアをはじめとして肯定的なものが多い。これに対して、イントロダクションでジムの原稿を受け取った語り手の女性が評するジムの妻は、かなり辛らつな言葉で語られている。だが、この女性像の違いにはあまり注意が払われてこなかったといってよい。本編の女性像を分析したものは多いが、イントロダクションの女性像との比較をしたものはあまり見られない。イントロダクションを分析したジュディス・バトラーは、二つの女性像が対立する人物像であり、交換されたと読んでいる。アントニーアの理想化されたとも言えるような人物像については多くの研究者が指摘しているが、その理想化された人物像は、対極にある人物像と比較されて、より鮮明になっているはずである。この対立する二つの女性像はお互いに補い合って存在しているとも読めるのである。小説中では決してお互いにめぐり合うことないこの二つの女性像の違いは何によるものなのかを探る。

●肯定的な側面

アントニーア：家族に尽くす愛らしい少女、たくさんの子どもを育てる立派な母親。
リーナ：人気のファッション･デザイナーとして活躍。母親のために家を建てる計画を持つ。
タイニー：大胆な行動で富を築き、安泰な生活を送る。リーナに事業展開を勧める。

本編に登場する女性像はジムの語りによって批判されることもあるが、結果的に肯定されている。また悲惨な死に方をする女性や欲の深い女性も、そうした点を相殺するような挿話が付いており、一方的な批判にはさらされていない。

●否定的な側面

ジュヌヴィエーヴ: わがままなお嬢様。見栄っ張り。戦闘的で過激なフェミニスト。物事に対する情熱がない。才能のない芸術家に対し、パトロンまがいのことをする。

当時、力をつけ始めたフェミニストを揶揄するような描写。本編の女性像と違い、一切弁明の機会が与えられず、語り手の一方的な批判にさらされる。

●1900 年代のアメリカの状況

都市化、産業化、官僚化が進んでいた。また婦人参政権運動が盛んだった。彼女たちは男性と対等であるために、もしくは男性とは違う価値があることを示すためにジュヌヴィエーヴのように芸術の分野にも乗り出した。作品の映画化を拒んだキャザーが、参政権獲得という実利的な目的のために芸術を利用する態度に批判的だったことは想像できる。
また女性同士の恋愛が病的なものとして危険視され始めていた。特に男役のレズビアンは「男まさり」であるとして、性倒錯を起こした病的な人間だとされ、フェミニストと結び付けられた。理性的な面を強調しなければならなかった婦人参政権運動に参加するような女性たちは、自分たちの運動から、性的堕落と見なされた女性同士の友情を排除しようとした。これも、公然と男装をし、手紙で女性同士の友情を不自然だと見なす世間に不満を示していたキャザーにとっては許せないことだったと思われる。

●キャザーの戦略

キャザーは女性同士の友愛が許された過去を、純粋で理想的なものとするために、現在の自分から引き離す必要があった。そのために自分と違うジェンダーの男性であるジムを本編の語り手にしたのである。そして、芸術が女性の地位向上に利用され、女性同士の友愛が不自然だとされる「現在」を語るために、自分の思いを伝えようという切迫感から、自分と同じジェンダーの女性を語り手にしてイントロダクションを描いたのである。
本編は実際の過去というよりも理想化された「過去」であり、イントロダクションはただの現在ではなく、否定的な意味を付与された「現在」である。このように考えれば、本編に肯定的な女性像が数多く登場し、イントロダクションに否定的な女性像が描かれていることにも納得がいく。しかし理想化された「過去」は、あまりにも多すぎる成功した女性像を提示し、作品からリアリティを奪い、結果的に本編の女性像の虚構を暴露することになっている。
本編に描かれる肯定的な女性像と、イントロダクションで描かれる否定的な女性像の違いは、作者キャザーによる理想化された「過去」が引き起こしたものである。

再魔術化と陶酔：1960年代サイケデリック文化を対象に

Re-enchantment and the Psychedelic Experience

名古屋大学 国際言語文化研究科 博士後期課程
Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya Univ. DC.
渡邊 拓哉
WATANABE Takuya

イントロダクション

現代社会には、既存の“ 宗教 ”の枠組みを越えた「聖なるもの」や「呪術的なもの」への志向や関心が（いかに浅薄なものに見えようとも）一定の文化的な足場を築いている。1960 年代以降の先進各国における対抗文化的な運動や、そこから派生した様々な文化実践にはしばしば、呪術的なものや陶酔体験への志向や関心が見られる。

その意味では、かつてマックス・ヴェーバーによって提示された「脱魔術化（呪術からの解放）」という見取り図は、（当時の時代状況に照らしてもすでに）一面的なものにすぎない。クリストファー・パートリッジは、戦後の西洋のポピュラー・カルチャー、サブカルチャーの諸側面に刻印されてきたスピリチュアリティへの志向を、**再魔術化** re-enchantment という語でおさえている[*1]。本研究もまたこうした認識を一部共有し、**現代文化における陶酔やエクスタシー**の在り方を検討することを目指している。本研究の立場からすれば、いっけん「再魔術化」のように見える“ 揺り戻し ”現象も、それと脱魔術化とをともに包含する資本主義の動態のひとつの現われとして理解される。

現代文化における陶酔という題材にとって、1960 年代のとくにティモシー・リアリーらを軸とする**サイケデリック文化**の実践は決して看過しえない。彼らは、意識の拡大や宗教的な伝統性といった意味づけによって、いわばドラッグによる陶酔を外連味なく肯定的に捉えることのできる“ 方便 ”を、若者たちに与えた。このとき陶酔に与えられた評価や意義（あるいはそこから削がれた何か）をたどることは、現代文化における陶酔への理解を深めることに繋がるだろう。

消費財としての陶酔／消費体験としての陶酔

◇ 現代文化における陶酔の2つの形態

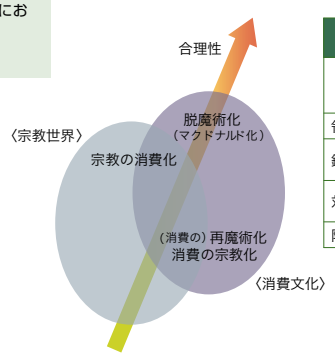


- 消費財としての陶酔
  --- アルコール、ドラッグ、ジェットコースターなど
- 消費体験としての陶酔
  --- ファストフード・レストラン、テーマパークなど

私たちの社会に“ 陶酔 ”はどのように現われるか。たとえばアルコールや薬物摂取による酩酊、あるいはもっと娯楽的な、ジェットコースターやスカイダイビングにおける浮遊や落下の感覚など、それらはいずれも商品世界を経由して私たちのまえに現われる。これは「消費財としての陶酔」と呼べるだろう。

他方で、そうした陶酔体験それ自体を消費するのとは異なり、ショッピングや消費空間において身体的に体験される陶酔の形態もありうる。消費行為そのものに付随し、消費の欲望を惹起する「スペクタクル」やファンタジーのようなものとしての陶酔、これは「消費体験としての陶酔」と呼べるだろう。

これら2つの陶酔の形態に関しては、それぞれ別個の議論の蓄積がある。つまり前者は「宗教の消費化」という議論の文脈に、後者は「消費の宗教化」という議論の文脈に位置づけられる（下表）。



	宗教の消費化 （宗教の消費主義化）	消費の宗教化 （消費行為における呪術性）
	宗教活動が商業化し、宗教的な情報・サービス・体験を商品として捉る考え方	消費をより促進させる、消費行為・体験にともなう快楽や幻想の次元の活用
領域	宗教社会学	消費社会論
鍵語	「聖の商業化」[*5] ニューエイジ産業	「スペクタクル」「快楽消費」 （消費の）**「再魔術化」**
対象	セラピー、ジェットコースター、アルコール、ドラッグ	ファストフード・レストラン、デパートメントストア、テーマパーク
陶酔	**消費財としての陶酔**	**消費体験としての陶酔**

再魔術化をめぐって

近年「再魔術化」という語を使って現代社会を分析しようとする作業がいくつか発表されてきている。そうした再魔術化をめぐる議論は、その対象や再魔術化という語の含意に以下に示すような違いが見受けられる。

再魔術化ということばは、ヴェーバーが資本主義分析のさいにシラーの表現を借りて使った「脱魔術化 Entzauberung (disenchantment)」の語に由来する。脱魔術化とは端的には、合理的視点にたった、迷信や呪術、神秘的直感などの非合理なものの排斥を指す。

◇ 近年の再魔術化をめぐる議論

[1] “宗教の”再魔術化 --- おもにニューエイジ現象を対象とする

クリストファー・パートリッジ[*1]
：ニューエイジ文化、スピリチュアリティ、オカルト文化

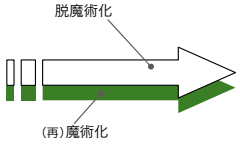
ミシェル・マフェゾリ[*2]
：ディオニュソス的なものの回帰 、身体への関心の高まり

[2] “消費の”再魔術化 --- おもに 消費文化を対象とする

ジョージ・リッツア[*3]
：新しい消費手段 new means of consumption

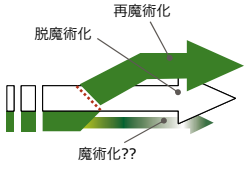
◇ 再魔術化の枠組み

a. 魔術化・再魔術化の**連続性**へ／魔術化・脱魔術化の**互恵性**への視点



・脱魔術化は決して「一方的かつ必然的な歴史過程」ではなく「それ自身が、魅力のある「魔術行為としての創造」によったもの」[*4]である、という視点
・魔術化と脱魔術化の「互恵的な関係」[*3]

b. 魔術化・再魔術化の**不連続性**への視点



・現代の再魔術化は魔術化と同じものだろうか、という疑問
それは、脱魔術化の“ フィルター ”を経由した（合理化された）魔術化のようなものではないのか？
・あるいは、そもそも“ 原初の ”魔術化などありうるだろうか？

1960年代サイケデリック文化





薬物による陶酔や酩酊をなかば“ 肯定的 ”に評価するような思考は、1960 年代に突然はじまったわけではない。先人としてはド・クインシーやボードレールらが有名だが、20 世紀に入ってからはとくにオルダス・ハックスリーの存在が際立っている。1960 年代のサイケデリック文化は、陶酔の意味づけという点において、どのような変化をもたらしたか。それは、できるだけ少ない労力（あるいは危険）によって最大限の効用を得ようとする意識、つまり陶酔の次元すらも消費の対象として、きわめて**インスタントな商品**として捉える意識ではないだろうか。その究極的な理想の姿のひとつは、リアリーが文脈化した宗教的な秘儀にではなく、むしろハックスリーが小説『すばらしい新世界』において描いた、快楽のみを効能とする副作用のないドラッグ「ソーマ」に示されていないだろうか。



LSD
俗称に「インスタント禅」

【20世紀サイケデリック文化の3つの段階】
（パートリッジによる[*6]）

第1段階：1930年代後半～1950年代
・アルバート・ホフマンによるLSD-25 の開発、
オルダス・ハックスリー『知覚の扉』(1954)

第2段階：1960年代
・アシッド・テスト、ヒューマン・ビー・イン、
ティモシー・リアリ ―『サイケデリック体験』(1964)

第3段階：1980年代後半～1990年代
・アシッド・ハウス、レイヴ・カルチャー、
テレンス・マッケナ『神々の糧』(1992)

参照文献

*1. Partridge, Christopher 2003, “Alternative Spiritualities, New Religions, and the Reenchantment of the West”, in J. R. Lewis (ed.), *The Oxford Handbook of New Religious Movements* (pp.39-67), Oxford University Press.
-----, 2004; 2005, *The Re-enchantment of The West: Alternative Spiritualities, Sacralization, Popular Culture, and Occulture*, VOLUME 1; 2, T&T Clark.
*2. Maffesoli, Michel 1997, “The Return of Dionysus”, in P. Sulkunen, J. Holmwood, H. Radner and G. Schulze (eds), *Constructing the New Consumer Society* (pp.21-37), St. Martin' s.
マフェゾリ , ミシェル 2007,「〈特別公開講演会より〉世界の再魔術化 ―ポストモダンと宗教の復権」(満足圭江 訳) ,『東洋学術研究』Vol.46-1 (pp.259-71) .
*3. Ritzer, George 2004, “Enchanting a Disenchanted World: Revolutionizing the Means of Consumption”, *in Explorations in the Sociology of Consumption: Fastfood, Credit Cards and Casinos* (pp.108-44), Sage.
-----, 2005 [1999], Enchanting a Disenchanted World: Revolutionizing the Means of Consumption, Pine Forge Pr (2nd ed).
*4. 荒川敏彦 2002,「脱魔術化と再魔術化【創造と排除のポリティクス】」,『社会思想史研究』No.26 (pp.49-61) .
*5. 島薗 進 1996,「聖の商業化 ―宗教的奉仕と贈与の変容」, 島薗 進, 石井研士 編『消費される〈宗教〉』所収 (pp.88-110) , 春秋社.
*6. Partridge, Christopher 2005, “Cleansing the Doors of Perception: The Contemporary Sacralization of Psychedelics”, in *The Re-enchantment of The West*, VOLUME 2 (pp.82-134), T&T Clark.

2008年度提出修士論文題目一覧

日本言語文化専攻

氏名	題目
石　黒　利江子	現代日本語における接尾辞「－らしい」の一考察－「形容詞」と接尾辞「－らしい」が付加された派生語のペアにおける類義分析を中心に
王　　暁　剛	１９世紀の日中の海防問題に関する比較研究－魏源と佐久間象山を中心に－
王　　瑞　雪	満州国における殖民政策の変容－日、朝農業移民と中国人との関係を中心に
梶　川　克　哉	「～がてら」の意味分析
A.P.B KANDUBODA	複数言語話者間の会話に見られるコミュニケーションストラテジー－日本語と英語を外国語として習得したシンハラ語母語話者の場合
許　　晴　雯	台湾人日本語学習者による依頼に対する断り行為の一考察
魏　　文　佳	「ほど」と「くらい」の意味分析
徐　　毓　勵	日本語自動詞文の意味と用法について－可能表現の誤用から見る状態変化の非実現叙述と属性叙述
張　　智　涵	中国人日本語学習者の上昇イントネーション－質問と勧誘を中心に
陳　　月　星	日本語学習者の不満表明ストラテジーの一考察－中国語母語話者を対象に
陳　　麗　麗	現代日本語の複合動詞「～込む」の意味分析
鄭　　玉　琪	殖民地台湾の文学における女性像の分析と考察－「自由恋愛」の観点から
Saowanee NAWARATJUMROON	ポライトネスの観点から見た言いさしの「し」－「～て」及び「から」との比較
Poranee PINUNSOTTIKUL	不同意表明における理由の表し方－日本語母語話者とタイ語を母語とする日本語学習者との比較
彭　　暁　麗	日本における『紅楼梦』の受容とその背景－ 1793 年から 1945 年までの受容史を中心に
栗　　叡	人間の五感及び心理を表すオノマトペの意味分析－「ぞくぞく」、「がたがた」、「ぷんぷん」を中心に
劉　　楓	江戸時代における「火車」の変容について－妖怪の図像的変遷との対照を中心に

国際多元文化専攻

氏名	講座名等	題目
有　井　　聡	東アジア言語文化	リトアニア語における動詞接頭辞について
川　村　浩　子	多元文化論	現代日本の抑圧される性と自由－児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律の一部を改正する法律案（第 169 回 衆第 32 号）と青少年健全育成条例の観点から
社河内　友　里	南北アメリカ言語文化	Jack Kerouac's Quest for Transcendence and Its Influence on Rock Music
白　川　　茜	ヨーロッパ言語文化	Heinrich Vogelers Werke 1906 bis 1914 : Die Idee der　Ruckkehr zur Natur
田　代　久美香	メディア プロフェッショナルコース	仏教とニューメディア－築地本願寺輪番ブログを事例として
幅　　亮　子	東アジア言語文化	日清戦争における清国兵捕虜について－捕虜に対する日本の対応を中心に
濱　田　智　子	先端文化論	Determinants of the international success of the Japanese visual artists
飯　田　理　恵	高度専門職業人コース	外国語映画における吹き替え翻訳および字幕翻訳について－音声的特徴に関する表現の比較を中心として
木　村　めぐみ	メディア プロフェッショナルコース	British Film Industry as a Model of Japanese Film Industry：Television, Cultural Policies, and Regions
栗　村　清　子	多元文化論	La theorie dé《l'education négative》de Jean-Jacques Rousseau：Étude sur Émile, ou de l'éducation
黒　田　清　葉	先端文化論	紋別市水産企業の外国人研修制度をめぐる諸問題
黒　田　葉　子	ヨーロッパ言語文化	A Study of Musical Elements in the Play *Pygmalion* and the Musical Film *My Fair Lady*
高　　媛	ジェンダー論	セクシュアリティから見る 1920 年代中国知識人女性の主体性－丁玲の『ソフィ女士の日記』を中心に
崔　　靚	メディア プロフェッショナルコース	日系企業のインターネット広報と消費者の接触、受容に関する事例研究 －日系企業のグローバルサイト構築への提言
佐々木　志津江	東アジア言語文化	シンガポール華人社会の言語教育および言語学習－ ‘Singapore Census of Population 2000’ の分析を中心に
周　　倩	ジェンダー論	『上海ベイビー』から見た「身体」
全　　晶　晶	メディア プロフェッショナルコース	日本のテレビ史（1972-2002）における中国表象番組の量的変遷
張　　喬　茵	先端文化論	市民参画交流型美術館の可能性－金沢 21 世紀美術館を事例として
張　　小　青	ジェンダー論	映画・京劇・異性装
Evgeny TRYASTSIN	東アジア言語文化	村上龍作品におけるロシア語翻訳の問題－文体論の視点から
范　　丁　亜	多元文化論	日中における高学歴女子学生の就職意識比較
前　田　哲太郎	多元文化論	19-21 世紀の吸血鬼文学における〈他者〉とその変遷
松　村　裕　代	ヨーロッパ言語文化	カップルの非婚化に見る現代フランス
楊　　琨	メディア プロフェッショナルコース	北京五輪と中国［コンテンツ制作］
李　　海	東アジア言語文化	日本滞在期における梁啓超

2008年度提出博士論文題目一覧及び要旨

高 芃	現代中国語の指示表現に関する研究―“这 / 那”の用法を中心に―
重松 由美	在日ブラジル人若年層による日本語借用―ブラジル人学校児童生徒の場合―
清 ルミ	コミュニケーション能力育成の視座からみた既存日本語教材と教師の意識に関する実証的研究 ―いわゆる禁止表現を例として―
Ronald Geoffrey STEWART	Contextualizing Nankivell （ナンキベルのコンテクスト化）
Agnese HAIJIMA	14-16 世紀日本絵画のイコノロジー－雪舟筆「四季山水図巻」を中心に－
蓮池 いずみ	日本語学習者の空間表現使用における簡略化と言語転移－格助詞「に」と「で」の使用を中心に－
哈斯額尓敦（ハスエリドン）	創られる「民族」: 現代中国にける民族政策とマイノリティ集団の変容 ―四川・雲南両省濾沽湖地域納日（ルグワナズ）人集団を例に―
藤田 淳志	When the Fourth Wall Broke Down: AIDS Plays and Their Messages against Homophobia
Judith PRESTON	PT におけるプロファイリング手順の構築―第二言語としての日本語習得の場合―
船津 明生	「武士道」と「植民地」からみた新渡戸稲造の思想研究
矢次 綾	ディケンズの歴史観―『バーナビー・ラッジ』、『二都物語』、『子供のための英国史』研究―

現代中国語の指示表現に関する研究ー“这 / 那”の用法を中心にー

高 芃　（国際多元文化専攻東アジア言語文化講座 博士後期課程 2007 年修了）

本研究は現代中国語の指示詞である“这 / 那”及び“这 / 那”に関わる指示表現（“这（那）儿、这（那）会儿、这（那）么”など）について考察するものである。

言語は、話し手が聞き手に対してある内容を伝える道具である。とりわけ指示詞は、談話構造や談話過程に関する話し手・聞き手の知識や認識を捉えるのに有効な伝達手段であり、近年においては、認知的な観点からの諸言語の指示詞を対象とした研究が盛んに行われている。現代中国語の指示詞“这 / 那”に関する諸問題（とりわけ指示・代替・照応用法）に関しては、これまでの研究において、単文または複文レベルで“这 / 那”の構文機能について言及するものは多く見られるが、コンテクストのレベルにおいて、“这 / 那”に言及したものは決して多いとは言いがたい。本研究ではコンテクストのレベルにおける指示詞“这 / 那”の使用状況の分析を通して、同一の文脈における“这 / 那”の使い分け及び話し手の指示対象に対する認識が指示詞“这 / 那”の使用に如何に反映されているのかということについて解明を試みた。

本研究は序章に続き本研究の中核となる六つの章及び終章で構成されている。

第 1 章ではまず、指示詞“这 / 那”に関連する用語を定義し、指示とテクストとの関係により下位分類を行った。そして指示詞に関する先行研究の理論と枠組みの展開に注目しながら考察を進め、指示詞に現れている非対称性、虚化現象、談話機能を概観した上で、先行研究における問題点を指摘した。

第 2 章では、指示詞の用法をまとめ、それぞれの統語的特徴を考察し、従来あまり言及されてこなかったモダリティ的な用法を提示した。指示詞におけるモダリティ的な用法は、形容詞の前に置かれた指示詞のほかに、場所性指示詞にも見られる。婉曲的な表現として用いられる場所性指示表現はモダリティ的な役割を果たしていると言えよう。

第 3 章では、“那”を中心に指示詞の虚化現象について考察した。単独で用いられる“这 / 那”における定冠詞的な用法については、これまで多くの先行研究において言及されてきた。ここではまず、“那”系指示詞に現れている定冠詞的な用法が指示詞“那”における本来の性質とどのような関わりを有しているかについて検討した。次に、記憶指示の用法を有する指示詞“那”における「聞き手の連想に依拠した機能」に着目し、比喩的表現に現れる指示詞“那”の必然性を示した。そして、話し手の聞き手への配慮という点において、比喩的用法に現れる“那”系指示詞と言い淀みなどの“那”との間に共通性が見られることが分かった。

第 4 章では、文脈指示を中心に指示詞の用法を考察した。聞き手の指示対象に対する（話し手の予想による）認識度によって、話し手のその指示対象についての表現方法が異なる。ここではまず、主題となる情報の特性が指示対象をめぐって話題が展開されていく指示詞“这”の役割と一致することを述べ、指示詞“这”の指示対象を主題化する機能を明らかにした。次に、指示対象を焦点化する“那”は、聞き手に注目をさせる働きを積極的に果たしていることを指摘した。

第 5 章では、談話分析の手法を用いて、「視点移動」の角度から比較的長い文章を用いつつ指示詞“这 / 那”の役割について分析を行った。ここではまず、指示詞“这 / 那”の使用がいずれも可能となる場合において、近称と遠称のどちらが優先されるのかは、話し手の事柄（指示対象）に対する主観的認識に依存することを指摘し、指示詞“这 / 那”と視点移動の相関関係について談話分析の観点から考察を試みた。また、場所性指示詞により叙述内容に関する語り手の態度・立場などを理解することが可能となることを指摘した。

第 6 章では、「人称代名詞（PP）＋“这 / 那”＋名詞（句）（NP）」形式のような修飾構造に現れている指示詞の用法を中心に、その PP と NP の意味関係及び位置関係について考察した。

指示詞“这 / 那”と三つの人称代名詞の組み合わせは、同格関係ないしは領属関係を表す。「PP ＋“这”＋ NP」形式における指示詞“这”を NP の修飾語の一部として考えれば、PP に含まれている情報量は「“这”＋ NP」より多いと言える。「“这”＋ NP」を用いて PP を同定することにより、PP が同定する人物の特徴が強く描き出され、聞き手の注意を引きつけ、聞き手は PP が表す人物を再認識することができる。この点は、指示対象を主題化する“这”の表現機能とはからずも一致している。また、名詞が総称名詞である場合、「“这”＋総称名詞」によって PP の指示対象が具現化され、この注釈的な役割が、指示対象を主題化する“这”の役割と一致することを指摘した。

最後に終章のまとめでは、指示詞“这 / 那”に関わる虚化現象及び文脈指示における指示詞“这 / 那”の使い分けについて総括した。

在日ブラジル人若年層による日本語借用 －ブラジル人学校児童生徒の場合－

重松 由美　（国際多元文化専攻南北アメリカ言語文化講座　博士後期課程 2006 年修了）

１９９０年の出入国管理法の改正により、従来から日本国内での就労が認められていたブラジル人日系一世に加え二世・三世およびその配偶者の「日系人」としての就労が可能となった。そのため、在日ブラジル人の数は急激に増加し、特に家族同伴者が増えたため、学齢期にある子どもたちの不就学問題、母語放棄、そしてダブルリミテッド現象などことばに関わる問題が表出してきた。

日本各地に在日ブラジル人コミュニティが形成され、ポルトガル語と日本語の言語接触による言語変種が現れ始めた。その一つが日本語からの語彙借用である。移民集団による語彙借用は言語移行期にみられる一般的な現象であるが、この日本語混用はすでにコミュニティでは「デカセギ語」として認知されている。本研究ではこの日本語借用に注目し、日本最大のブラジル人集住地域である愛知県豊田市にあるブラジル人学校「エスコーラ・アレグリア・デ・サベール（Escola Alegria de Saber）」に通うポルトガル語を母語とする児童生徒１０１人の言語状況を調査した。そして、彼らの日本語借用の実態を記録することと、借用語の構造的特徴を社会文化的コンテクストと関連づけて考察することを目的とした。

まず、日本語借用語の言語内的分析では、ブラジル人児童生徒が話す日本語の音声的特徴として、母語干渉（語末音節の通鼻母音化現象、摩擦音から破擦音への交替など）と、母語を異にする日本語学習者に共通して見られる中間言語的現象（特殊音の拍の持続不足や過剰な引き伸ばしなど）を確認した。形態の面では、日本語がポルトガル語へ形態的に統合された借用語の構造的特徴に、ポルトガル語の外来語の語形成パターンとの共通点を見つけた。語用面では、ポルトガル語のなかに日本語の影響をうけた新たな表現機能が誕生した例や、母語干渉による日本語の誤用そして借用シフトを観察した。その他には、日本語借用語の表記にポルトガル語の表記法が採用されていること、借用名詞の文法上の性が無標の性である男性形と判別されていることなどが明らかとなった。

次に、言語外的要因を考察するうえで、言語を創造する行為おける年齢の影響、来日前のブラジルでの言語状況などを取り上げた。また、彼らが日本語を学びそして使用する際の個人的なネットワークである「社会的ネットワーク」から、「ブラジル人児童生徒は学校内でバイリンガルから日本語の変種を習得し、学校内でその変種を用いている」という借用語の生起過程を導き出した。さらに、借用を促す話者の心理面にも着目し、日本語能力別の借用語使用に対する意識の違いや、話者が自らの感情や態度を借用語に込めて使用する「情緒的借用」に注目した。その結果、日本語能力の高い児童生徒は、自己表現や人間関係の円滑化のために日本語を借用していることがわかった。そして、言語能力に関係なく他の児童生徒との連帯感を維持するための借用も明らかとなり、「デカセギ語」の多様性を証明することができた。

最後に、接触言語としての「デカセギ語」の位置づけを明らかにするために、言語接触に関する理論を用いて検証した。調査時の「デカセギ語」は、単語レベルで運用されていること、ポルトガル語をベースとした統語構造が保持されていること、そして有標的言語要素の借用が認められなかったことなどから、一時的な言語変種でしかないと結論付けた。しかし、アンケート結果からもブラジル人児童生徒による日本語を混用する言語行動は、その「利便性」や自己表現の「必要性」から継続的に使用されることが推測される。多くの移民言語がそうであるように、彼らもまた「ブラジル系日本人」のアイデンティティを「デカセギ語」に重ね合わせていく可能性は大いにある。

本研究は、ブラジル人学校の児童生徒という限られた言語コミュニティでの言語状況の調査結果であるが、彼らの日本語借用を日本語習得の妨げになると否定的にのみ捉えるのではなく、自己確立をするための拠りどころになりうる豊かな言語生活の現れであると評価するべきである。

コミュニケーション能力育成の視座からみた既存日本語教材と教師の意識に関する実証的研究 ―いわゆる禁止表現を例として―

清 ルミ （日本言語文化専攻日本語教育方法論講座　博士後期課程 2006 年修了）

研究目的

コミュニケーション能力育成のための教育内容および教材開発、教員養成のあり方を探る前提として、日本語教育の現状を足元から見直すことを目す。「ないでください」という言語形式を例にとり、教育現場での「コミュニケーション」志向の反映の有無を複数の調査結果から実証的に検証。

研究方法

先行研究では、コミュニカティブ・アプローチ（以下 CLT と記す）はすでに浸透したものとしているが、本当に CLT は浸透し、新しい理念を構築しうる段階にあるか、CLT の指導法と教育観を分析の切り口として、複数のリサーチ結果を分析。

各章の概要

Ⅰ序論

第 1 章：本研究の目的と本論の構成。

第 2 章：研究の背景と枠組。

Ⅱ．教科書と現実場面

第 3 章：国内外教育機関で使用されている教材 8 種を分析対象として選択。教科書だけでなく教師用指導書、ワークブックなども含め、同一教材を縦断的に比較考察することを試み、「ないでください」（以下「な」と記す）の文型の言語機能の種類とその整合性について分析調査。その結果、どの教材も機能の整合性がないこと、文例が酷似していること、オーディオリンガル・アプローチの言語形式重視の域を出ないことが判明した。また、「な」を禁止として捉えているにもかかわらず、ワークブックに不用意に配慮表現としての「な」を混入させている教材が多いことも明らかになった。

第 4 章：「な」の代表文例である医師と美術館員の現実場面における現実の言語使用調査を実施。その結果、「な」は禁止の表現としては使用されていないことが判明した。医師も美術館員も現実には相手の面子保持を重視した言語表現をとっていた。このことから、教科書に提出されている代表的な場面と会話は現実的なものではないことが証明された。

第 5 章：「な」の一般の言語使用を探るため、100 名の一般社会人への質問紙調査と 2 種のテレビ・映画のシナリオ分析を実施。その結果、「な」の現実の言語使用の言語機能は、配慮・気遣い表示、不満・不快表示、願望・懇願表示が大半を占めることが明らかになった。また、教科書に提出されている注意・禁止機能の「な」は、夫婦、親類、恋人間などの親密な関係に限られ、文脈上相手を攻撃するか非難する状況下でしか使用がみられないことも明らかになった。このことから、教科書と現実の言語使用との間に言語機能の認識差が著しいことが判明した。

Ⅲ．教師の言語意識と教室活動

第 6 章：3 章から 5 章で明らかになった教科書の非現実性と CLT の視点の不在から、日本語教師の言語意識に疑問を向け、現職日本語教師 100 名を対象に 5 章で社会人に対して行った言語意識調査と同一の調査を実施。

その結果、日本語教師と一般社会人との間で大きな相違点が認められた。日本語教師の作文例には、教科書文例との共通点（機能が禁止表示であること、例文が喫煙、駐車、写真撮影などの場面で作られていること、文脈性の欠如、第一発話者の「な」使用など）がみられた。このことから、教師の言語意識は教科書の刷り込みを受けている可能性が見出せた。

第 7 章：東京、神奈川、静岡の 75 名の現職教師を対象に、「みんなの日本語」第 17 課（「な」の導入課）をみせ、教案を語ってもらうインタビュー調査を実施。教室活動の現状把握を試みた。

その結果、「な」を禁止として捉えていること、教科書中心で非生産的活動が多い教室活動が大半を占める現状、文例導入の際の文脈性や言語機能の認識欠如、オーディオリンガルの言語形式中心の教室活動が主流であること、などが明らかになった。本調査は、日本語教育に CLT が普及する以前の 1988 年の先行研究結果と同じ結果を導いた。

第 8 章：6 章の結果を受けて、教師が一般社会人の「な」に関する調査結果をどのようにとらえるか、インタビュー調査を実施。

その結果、教科書の刷り込みを受け、CLT の観点が反映されていない教案を語った回答者ほど、一般の言語意識に対するメンタルブロックが強いという傾向が明らかになった。その一方で、教案インタビューにおいて比較的文脈性を形成していた回答者は、一般の言語意識に納得し、教科書や教え方に対して建設的な反応を示す傾向があることも明らかになった。

Ⅳ．結論

第 9 章：総括として、教材、教師いずれをとってもコミュニケーション能力育成の教育志向の反映は見出せなかった。コミュニケーション能力育成の教育志向とは裏腹に、教育現場では依然としてオーディオリンガルの言語形式中心の教育が行われていると結論づけられた。その一方で、一般の言語使用に関する資料提示など「気づき」の契機を提供すれば、教師のビリーフ変容を促し得るという可能性も見出せた。

第 10 章：提言と今後の課題；教育現場、研究者それぞれのなすべきことについて提言し、今後の日本語教育の課題を明確にした。

Contextualizing Nankivell（ナンキベルのコンテクスト化）

Ronald Geoffrey STEWART
（国際多元文化専攻先端文化論講座　博士後期課程 2006 年修了）

この論文では、歴史上忘れ去られたオーストラリア出身のアーティストであるフランク・A・ナンキベル（1869-1959）を発掘し、彼と日本の相互作用を考察する。ナンキベルの生涯における日本との出会いは相対的に短かったが、その経験は彼にとって大きな意味を持つようになった。日豪および日米の視覚文化交流における有意義な接点にもなった。

ナンキベルは 1892 年に来日し、２年あまり横浜に滞在し、新聞アーティストと石版技術者として活躍した。その後、渡米して長年、漫画家および画家、版画家として数多くの業績を残した。1896 年から 1911 年までニューヨークの最も有力なユーモア雑誌『パック』の 2000 枚以上の漫画を描くことで名を上げた。1910 年代に芸術の世界に入り、アメリカ現代美術における前衛的画家たちの仲間入りをした。1920-30 年代にはアメリカの版画復興における中心人物の一人になった。米国で 50 年間多方面に活躍したにも関わらず、晩年に書かれた自伝は、わずか２年間滞在した日本についての記述が全体の４分の１を占める。彼にとって日本や日本人との出会いは明らかに大きな意味をもっていた。

ナンキベルがこの自伝に形成した autobiographical self（自伝的自己）はオーストラリア人であると同時に誇りに満ちた大英帝国のメンバー、アメリカ人、アングロサクソン、白人、冒険者、ボヘミアン、漫画家、版画家、商業芸術家、美術家などといったアイデンティティから成った。こうした矛盾のある複雑な自己の形成には彼の日本での経験、また日本人と日本が大きな役割を果たした。

この論文では主に歴史的なコンテクストにおけるナンキベルの（彼の家族から譲り受けた）未出版自伝の原稿の分析、また作品（漫画／絵画／版画）の分析により、こうしたナンキベルの自己形成における日本および日本人の意味を明らかにする。尚、現在までに注目されていなかったナンキベルの版画の技術や漫画と美術の技法の導入媒体として、彼の日本印刷史および漫画史における位置、またはアメリカのジャポニスム史における位置を論じる。

本研究の主な目的は次の 4 点に分けられる。

１）日豪交流の状況の理解をより深める。従来の戦前日豪交流史の研究には政治および軍事、経済的な面を考察するきらいがあった。本研究ではオーストラリア人画家による珍しい明治日本の記録の分析により、個人的な面と文化的な面に注目する。

２）豪州の芸術と大衆文化の分析による豪州のアジア観の文化変遷史概説が 1990 年代から若干発表されてきた。ナンキベルの日本観を中心としたミクロ史はこのようなマクロ史を補足する。

３）ナンキベルの研究は欧米と日本の美術交流史研究にも貢献する。日本美術歴史家ジョン・クラークは、来日した外国人画家の研究は逸話に依存するので、美術交流史の複雑さをより理解するには、一次資料をもとにした伝記および作家論が必要だと主張している。

４）忘れ去られた歴史的な人物を発掘するプロセスを記録し、新しい研究可能性を示唆する。見つけ難く、一部は消える可能性が高いナンキベルに関する資料の記録を残す。

論文の構成は次の通りである。

第１章ではナンキベルを紹介し、研究対象としての意味を論じる。

第２章は明治日本における外国人研究、日豪文化交流史の研究、「帝国時代」におけるオリエンタリズムおよび紀行学といった他者表象の研究、そして明治日本と外国の視覚文化交流史の研究を簡単にまとめる。それを通じ、ナンキベルの歴史的な背景また本論の理論的な立場を明らかにする。

第３章ではエッセーの形でナンキベルという忘れられた歴史的な人物を発掘する長年のプロセスを紹介する。その中に新しい研究「道具」も紹介し、類似した研究の新しい可能性も示唆する。

第４章はナンキベルの豪州での背景および日本滞在、米国のキャリアを中心にした伝記である。

第５章ではナンキベルの自伝を熟読し、その内容と彼が残した作品とあわせ、彼にとってのアジアと日本の意味を分析する。また、彼の自伝の構造および自伝を書く動機を論じる。その後、ナンキベルが描く主に劣っている日本人像を考察し、次のテーマ「大英帝国のメンバーとしての主張」、「黄禍論」、「日本の女」、「冒険」、「矛盾と抵抗（完璧に否定的な日本像を完成できなかった理由）」を中心に分析を行う。

第６章ではナンキベルと日本との美術／視覚文化の交流の意味を探る。まず、ボヘミアン・アイデンティティの印として彼の日本経験を論じる。その後、彼をアメリカにおけるジャポニスム史上、または日本の視覚メディアや漫画史上に位置づけ、彼が日本から得た美術や版画における「真性さと権威」、そして彼のもとで西洋漫画の技法を学んだ日本人である北沢楽天がナンキベルから得た漫画における「真性さと権威」を明らかにする。

第７章は論文の結論であり、論じたことの簡単なまとめである。

文献リストの後に、年表と 79 頁を及ぶ付録資料を付けた。

14-16 世紀日本絵画のイコノロジー －雪舟筆「四季山水図巻」を中心に－

Agnese HAIJIMA（日本言語文化専攻日本言語文化学講座　博士後期課程 2007 年修了）

室町時代に最も高い名声を得た画家雪舟（1420-1506 年）筆「四季山水図巻」（毛利博物館蔵、以下「山水長巻」と呼ぶ）は、画家が中国旅行から帰った文明 18 年（1486 年）に、庇護者である大内氏への献上品として、山口の画室で描かれた作品である。

これまでの日本中世絵画の先行研究は、島田修二郎、宮崎法子などの数少ない論文を除いて、そのほとんどが様式的な面に注目してきた。「山水長巻」の先行研究も様式的な面を論じるものが多い。しかし西洋美術では、様式、つまり絵画の外面（スタイル、筆法、彩色など）以外に、イコノロジー、すなわち絵画の内面（描かれたモチーフの起源と意味）を探る研究が非常に重視されている。

以上のような理由から、本論は「山水長巻」に描かれたモチーフの源泉と意味を探ることを目的とした。日本中世絵画の先行研究の主流から離れて、「山水長巻」を中心とする雪舟の晩年の作品を新たな視点から分析することが、この論の課題である。

研究の方法としては、2002 年から 2008 年にかけて、日本、中国、韓国、台湾、米国とヨーロッパの様々な美術館で雪舟、室町絵画、中国絵画の作品を数多く実見し、かつ関連資料の収集を心がけた。とくに、2006 年に山口県立博物館で行われた雪舟展「雪舟への旅」の際に「山水長巻」の実物を調査しえたことは非常に重要だった。作品以外に、中国の画論、文学的な作品、例えば、室町画賛と漢詩などの調査はイコノロジー的な研究の重要な基礎となった。また日本人の研究の他に、これまで日本には紹介されていない中国人とアメリカ人の英語による研究の成果を積極的に取り入れ、雪舟と室町絵画を再考した。

本論文では「山水長巻」に描かれたテーマについて、１）「瀟湘八景」、２）「西湖」、３）老荘思想、４）「四季」、の四つの観点から章ごと論じる。第一章と第二章で分析した「瀟湘八景」と「西湖」のテーマは室町絵画で非常に流行したものだが、それぞれが作品全体を構成する重要な部分となっており、一つのまとまった空間単位（スペース･ユニット）を成している。第一と第二章のもう一つの共通点は、ここで扱われている絵画のテーマが文学や宗教思想と密接な関係をもっていることである。したがって本論文の前半ではまず、これら特徴的なテーマを持ついくつかの空間単位について、文学やその他の文化伝統との関わりにも注目して考察する。論文後半の第三章では、作品全体にちりばめられている「老荘思想」に関するモチーフを扱い、第四章では「山水長巻」に時間軸と全体的バランスを与えている「四季」のテーマについて分析する。最後に終章では、作品の統一的解釈について述べる。

第一章においては「山水長巻」それぞれの空間単位に描かれた四つの「瀟湘八景」の四つのテーマ「漁村夕照」、「瀟湘夜雨」、「煙寺晩鐘」、「山市晴嵐」について四部に分けて考察した。先行研究に、これらの場面の意味を探る研究は見当たらないので、筆者はこれらのテーマが中国文学と共有する暗示的な意味、中国画論、当時の中国と日本の政治的・経済的背景、画家の伝記などを探った上で新たな解釈を行った。

第二章の「西湖」のモチーフについては、雪舟の描いたこのモチーフに見られる典型からの逸脱の問題に注目した。まず、中国と日本における「西湖」の典型的なイメージとその源泉を探り、その上で「山水長巻」の「西湖」モチーフが、それまでの雪舟と他の日本および中国絵画に描かれた「西湖」モチーフと異なっていることを明らかにした。

第三章では、これまで注目されてこなかった「山水長巻」における「老荘思想」のモチーフを、他の多くの雪舟作品にも触れながら分析した。その際、先行研究に見当たらない雪舟絵画における「気」の表現、植物に与えた暗示的な意味と雪舟による解釈、長寿のモチーフと雪舟作品に見られる規範的な岩のタイプ、その源泉と背景にある思想に焦点を当てた。

第四章に論じた「四季」のテーマは、「山水長巻」の全体的な解釈に非常に重要である。ここではまず中国絵画における四季の意味とその日本への影響について述べ、それから雪舟の他の絵画とも比較しながら「山水長巻」の四季の意味について考察した。中国の文化伝統では、四季の全体は完璧な、理想的な世界を象徴し、また政治的には良く治められた国家の安定性をも暗示する。この思想を表す絵画は日本でも描かれていることから、「山水長巻」に描かれた四季の一廻りは中国の伝統的な宇宙観や世界観を受け継いだものと結論づけた。このことからもまた、「山水長巻」が、大内氏の長寿の祝いと政治的な安定への願いを込めた献上品であったという解釈が可能だろう。

最後に終章でこの作品を全体的に解釈し、「山水長巻」は外面的には中国的風景のなかの旅を描いており、内面的には中国の伝統的な文化、思想、宇宙観、世界観を継承していること、しかしそこには雪舟の庇護者への感謝と祝福、画家としての創造的個性と特徴も十分に表現されており、比類のない完成された作品になっていることを述べた。

以上に論じた「山水長巻」のモチーフは、雪舟絵画だけではなく、室町絵画全体に広く流行していたものである。したがって、本稿における雪舟作品のイコノロジー的解釈は、室町絵画全体の理解と再解釈にも役立つことを期待している。

日本語学習者の空間表現使用における簡略化と言語転移
－格助詞「に」と「で」の使用を中心に－

蓮池 いずみ（日本言語文化専攻日本語教育学講座　博士後期課程 2005 年修了）

本研究は、日本語の空間表現の中でも特に日本語学習者にとって使い分けが難しいとされる格助詞「に」と「で」の使用における母語の影響を明らかにすることを目的とし、異なる母語背景をもつ JSL 学習者を対象に、調査１（格助詞選択ストラテジーに関する調査）及び調査２（空間表現使用における母語の影響に関する調査）の２種類の調査を行った。調査１は中級レベルと上級レベルの韓国語母語話者と中国語母語話者に対し、格助詞の穴埋め式選択テストと２種類の内省調査を実施した。調査２では、初中級レベルと中上級レベルの韓国語、中国語、英語を母語とする学習者を対象にタスク１（絵の描写）、タスク２（助詞の穴埋め式選択テスト）、タスク３（文法性判断テスト）の計３種類のタスクを実施した。

本研究の主な研究課題は以下の３点である。

(1) 先行研究で指摘されている格助詞「に」の多用傾向や「位置を表す名詞＋に」のような名詞と格助詞をひとまとまりで記憶するストラテジーの影響が母語の異なる学習者に共通して現われる現象なのかどうかを検証し、それらの現象が生み出される要因を分析する。

(2) 学習者の空間表現使用における「簡略化」と見られる現象と、「言語転移」と見られる現象を記述し、両者がどのように作用し合っているかを考察する。

(3) 異なる種類のタスクにおける学習者言語を比較し、タスクの種類により簡略化や言語転移の現象の現われ方が変化する可能性について検証する。

これらの研究課題について調査の結果から得られた結論は、以下のとおりである。

(1) 調査１では、中国語母語話者には「位置を示す名詞＋に」のユニット形成の傾向はあるが、「地名・建物を示す名詞＋で」のユニット形成の傾向は見られず、特定の動詞や名詞を「に」と結びつける学習者のストラテジーが「に」の過剰使用を引き起こしている可能性が示された。調査２のタスク２では、中国語話者には名詞の種類に関わらず「に」を過剰使用する傾向が見られる一方で、英語母語話者に「名詞＋助詞」の助詞選択ストラテジーに依存する傾向が見られた。この結果は、ユニット形成ストラテジーの使用は異なる母語をもつ学習者に共通する現象である可能性を示唆する一方で、学習者の母語背景によりその使用傾向が異なる可能性を示すものである。

(2) 母語に日本語と類似した空間表現が存在する韓国語話者は、比較的助詞の使用が正確である一方、母語と日本語の格助詞との間に用法のずれがある場合は正答数が低くなる傾向があり、こうした負の転移の一部は上級レベルになっても残る可能性が示された。一方、中国語話者は他の母語話者に比べ格助詞の習得レベルが低く、その理由として母語に場所を示す前置詞が一種類しかないうえ、語順によって空間を指示することも可能であることが影響している可能性が考えられる。 さらに、英語話者の空間表現使用には、助詞の使い分けという点で中国語母語話者よりも正確であるという特徴があった。その理由として、母語で空間を指示する際に前置詞の省略が不可能であり、また複数の前置詞を使い分けるため、その習慣が日本語の場所を示す格助詞を使い分ける際に影響した可能性が考えられる。

中国語話者による「に」の過剰使用は、学習者が中間言語を目標言語に一歩近づけるために仮説検証をする過程で現われる現象であると捉えられることから、簡略化の中でも Meisel（1980）の提唱する「精緻的簡略化（elaborative simplification）」の例であると考えることができる。また、調査２のタスク１では、韓国語話者と中国語話者が空間を指示する際に、助詞「は」を高い頻度で使用しており、この「は」の多用は学習者がコミュニケーションの促進を目的に文法を変形させる「制限的簡略化（restrictive simplification）」の一つである可能性があるといえる。これらの簡略化は、学習者の母語における空間指示の方法が直接、あるいは間接的に日本語の中間言語に反映されたものであると考えられ、本研究の結果も、言語転移と簡略化が相互に作用し合い、学習者の第二言語における空間指示の選択に影響を及ぼし得るという Jarvis & Odlin（2000）らの主張を指示するものであるといえる。

(3) 本研究では、異なる種類の複数のデータ抽出方法を併用した結果、学習者の中間言語がタスクの種類によって変異する例が観察された。 調査２で行った絵を描写するタスクでは、助詞選択テストや文法性判断テストのように学習者の言語産出が制限されたタスクでは測れない中間言語の側面が明らかになった。学習者の中間言語の様相を理解するためには、異なる種類のデータ抽出法を使用し多角的に調査、分析を行うことが重要であることが改めて確認された。

創られる「民族」：現代中国にける民族政策とマイノリティ集団の変容
―四川・雲南両省濾沽湖地域納日人集団を例に―

哈斯額尓敦（国際多元文化専攻東アジア言語文化講座　博士後期課程 2008 年修了）

本研究は現代中国、すなわち 1949 年に成立した社会主義中国におけるエスニック集団の「民族的」変容やそのメカニズムを分析することを課題とする。具体的には、四川・雲南ルグフ地域のナズ人集団が政治主導時代に初めて「民族」として「誕生」し、激動する階級時代を経て「民族」として「成長」し、さらに現在の経済主導時代に変化してゆく経緯を、それを生み出した時代背景と結び付けながら考察し、最終的にそのような変化の特徴とメカニズムを分析する社会人類学的研究である。

1949 年に成立した中華人民共和国は、自らを「統一された多民族国家である」と位置づけてきた。その「多民族」とは中国の領内に暮らす、政府の承認を得た 56 の民族を指している。しかし、その中の 45 の民族は実は中華人民共和国が成立した後に政府の「民族識別作業」を通じて政府に正式に「民族」として承認された様々なエスニック集団であった。つまり、国家政府が諸エスニック集団を政治的権利を持つ「民族」として編成した結果として生み出されたものである。では、社会主義中国が「国家の統一」と「国民統合」政策を掲げてきたにもかかわらず、なぜまたその主旨と反対に政治的な「民族」集団を作り出さなければならなかったのか。国家の政策によって「識別」の対象となった人間集団が如何に文化的エスニック集団（エンゲルスの言葉を借りれば「歴史なき民族」）から政治的権利を持つ「民族」へと変身したのか。彼らの「民族」としての「帰属意識」とはどのように生まれたのか。また、彼らの新しい「民族意識」と元の「エスニック集団意識」は如何に絡み合い、如何なる変化があったのか。本研究は以上の疑問に答えようとするものである。

今までの中国の民族問題を扱った著作の多くが少数民族の立場、或いは「国民統合」の視点から、中国の少数民族における「融合」政策に対する批判的な研究となっていることと、その対象事例として取り上げられているのはほとんどチベット人、ウイグル人、モンゴル（内蒙古）人、回人に限られていることである。しかし、こうした研究には、中国の様々な少数民族が中央政府によって承認された政治的権利集団である「民族」に対して持つスタンスが多様であるという事実が見落とされている。確かに、それらの分離傾向の強い「歴史ある民族」にとっては、中国の「民族」政策は民族「抑圧」政策でしかなかったであろうが、その他の数多くのエスニック集団にとっては、「民族」政策は「『抑圧』どころか、政治的参加を可能とし、経済発展、教育、言語、宗教、文化保護などを推進する（中略）『すばらしい』もの」（松本ますみ　1999）だったとも言えるのである。本研究は、1950 年代の「民族識別」を通じて「民族」として創出され、「民族」としての政治的諸権利を得て、その後の複雑な時代において「民族」としてのアイデンティティを育て、1990 年代以後の観光開発においては、時代のニーズに応えて新たな変容を見せたナズ人集団を対象とし、彼らのエスニック集団としての「民族的」変容を分析する。

さらに、本研究は今までの中国の民族政策に関する研究における「抑圧されるマイノリティ」という紋切り型の図式を超え、エスニック集団の自らの意思で「民族」の政策に積極的に協力し、それを通じて個人や集団の利益に最大限利用しているという行動に焦点を与えたい。したがって本研究では、ナズ人集団を政治的意味合いを持たない「エスニック・グループ」と設定して出発することよって、政治的主体として使われてきた従来の「民族」概念の相対化を試み、本分析をより厳密なものにしたい。

以上の認識に踏まえて、論文は「序論」と「結論」を除き四章から構成される。

第一章「ルグフ地域に暮らす『ナズ』という集団」では、本研究の考察対象である四川・雲南省のルグフ地域に暮らすナズを自称する人間集団の歴史記載における名称を検討、現在の集団生活、習慣、言語・文字、宗教を紹介する。

第二章から第四章までは本研究の中核となる部分である。第二章「1950 年代における『民族識別』とナズ人集団」では、主に 1950 年代の中国における政治的権利を持つ集団である「民族」概念を分析し、エスニック・グループとしてのナズ人集団がそのような「民族」に編成されるプロセスを、「民族識別」という理論思想の中で検討する。同時に、ナズ人集団が「民族」として誕生する際に見られた彼らの個人的、集団的行動のメカニズムを明らかにする。

第三章「1980 年代における民族意識の高揚とナズ人族称の行方」では、1980 年代の民族政策回復をきっかけに政府とナズ人の間に起きたナズ人の族称問題をめぐる論争を検討し、政策環境の変化を背景に、「民族」として「成長」していくナズ人集団の行動のプロセスを考察する。そのためにまず、ナズ人の族称に関する政府調査報告書の内容や政府がナズ人集団の族称変更を求めて行った「説得作業」に注目し、ナズ人の族称問題に対する政府の姿勢を検討する。次に、中央政府の民族政策回復をきっかけに、四川省ナズ人地域で起きた「ナシ」・「モンゴル」族称をめぐる論争と雲南省ナズ人地域で起きた「ナシ」・「モソ」族称をめぐる論争に焦点をあて、政府によって与えられた「民族」が如何なる形でナズ人集団に受けいれられたのか分析する。またそのような「民族的」動向の一種として表れたある現象、つまり、元々同一であったはずの「祖先移動ルート」が、いま異なる民族出自を主張する二つのグループによってそれぞれの過去遡及的な解釈を加えられ、まさに異なる二つの「祖先移動ルート」に変化しつつある現象を検討する。

第四章「ルグフ地域における観光開発と『モソ人』」では、1990 年代以降の中国の経済統合時代におけるナズ人集団の新たな挑戦や「民族的」行動を検討し、新しい民族政策の下におかれたナズ人集団のもう一つの自己形成プロセスを分析する。本章では、まず中国の新しい国民統合とされる経済統合＝観光開発政策を検討し、その観光開発のメカニズムに従いながら、その統合の目的と逆に新しい「民族」を創りあげるナズ人集団の「民族的」行動を見ていきたい。最後にナズ人集団の観光開発において「民族」として創られるプロセスを分析する。

最後の「結論」では、これまでの分析をまとめ、今後の課題を列挙する。国家政策とエスニック集団の変容との関係に見られる特徴を分析し、新たに現出した「差異化」という現象を提示して全文を締めくくる。

When the Fourth Wall Broke Down: AIDS Plays and Their Messages against Homophobia

藤田 淳志　（国際多元文化専攻先端文化論講座　博士後期課程 2005 年修了）

本論はエイズ演劇の中でどのようにホモフォビアが描かれ、それが問題であるかというメッセージが観客にいかにして伝わるのかを論じている。1980 年代以降の 6 人の作家による作品を取り上げ、構造とテーマの両面からそれぞれを読み解いていく。

1980 年代初めアメリカのゲイ・コミュニティを襲ったエイズは流行当初の患者に男性同性愛者が多かったことが大きな要因で政府の対策が遅れ、同性愛者たち自身が政治に訴えなければならなかった。1960 年代終わり以降活発になったゲイ・リベレーションがようやく結実し、アメリカの都市部に住むゲイたちは「それなりの」自由を謳歌しつつあった。しかしエイズ流行は、彼らが真に自由にはなっておらず、差別や偏見は薄い覆いの下に隠されていただけということを実感させる事件でもあった。

演劇はゲイ・コミュニティと距離が近く、テレビや映画や小説など他のジャンルの芸術に比べても、いち早くエイズの問題を表象しようと試みてきた。取り上げたエイズ演劇にはさまざまな種類のホモフォビアが描かれており、メタシアターの概念を使ってそれを分析する。メタシアターは観客とステージの間にあるとされる第四の壁を取り払い、ステージ上のメッセージがより有機的に観客に伝わるようにする。観客はステージ上の世界から流れ出たメッセージを自分たちの現実世界のこととして考えられるようになる。

第一部ではこのメタシアターと、さらにジュディス･バトラーのジェンダー・パフォーマティヴィティの議論を参照して演劇を構造的に分析するケーススタディを行なう。チャールズ・ブッシュの二作品を扱い、メタシアターを通して明らかになるステージ上のパフォーマティヴィティが現実社会のメタファーとなることで生まれる政治的効果を探る。

第二部では 4 つの作品（テレンス・マクナリーの Lips Together, Teeth Apart、ジョナサン・ラーソン作 Rent、モイセス・カウフマン作 Laramie Project、エドワード・オルビーの The Goat）を扱う。それぞれの作品のなかで人々が持つさまざまなホモフォビアが明らかにされることを読み解き、第一部で論じたようなメタシアターとパフォーマティヴィティの仕組みを通して観客が持つホモフォビアを認識させることで、作品がメッセージを伝えていることを論じる。

第三部ではこれまでの議論を踏まえ、より実践的なゲイの政治を示唆する二つの作品、ラリー・クレイマーの The Normal Heart、トニー・クシュナーによる Angels in America を扱う。これまでの議論枠を利用して作品を読み解きながら、エイズとクィア理論を経た新たなゲイの人々による政治のあり方を提示することを試みている。

「武士道」と「植民地」からみた新渡戸稲造の思想研究

船津 明生（日本言語文化専攻日本言語文化学講座　博士後期課程 2007 年修了）

新渡戸稲造（1862 ～ 1933）は儒学的素養で培った精神を根底に、西欧の思想・宗教によって自己を確立するという日本近代における「和魂洋才」「和洋折衷」を体現した人間の一典型であった。晩年の彼の言動への批判は少なくないが、それは当時の日本の状況や人々の意識を考慮に入れて検討されるべきものであり、彼が帝国主義者であるか自由主義者かという単純なレッテル貼りではなく彼の思想の形成過程を包括的に分析することが必要である。新渡戸は生涯を通じて友愛・人種差別撤廃、共和共存を説いた敬虔なクエーカー教徒であり、同時に国策としての植民政策を推進した。この一見矛盾ともいえる行動に整合性を持たせるスタンダードは彼だけに内在したものなのか､それとも当時の知識人には所与のものであったのだろうか。

本論は、新渡戸稲造の思想を「武士道」と「植民地」という二つの視点から、時期的には明治初期より昭和初期までを中心として明らかにし、彼が体現していた近代日本の知識人の特質と問題点の一側面について当時のアカデミズムを中心に解明しようとする試みである。

具体的には、まず著作『武士道』に記されている明治期の旧士族を規定していた行動原理と彼が世界に紹介したかった日本の精神性の考察である。それには「武士」が何者であるかの定義に加え、新渡戸が考えていた「武士」像の分析が必要となり、かつ「武士道」がどのような精神を内包しているのかをたどらなくてはいけない。新渡戸が「武士道」の名のもとに取り上げた日本人のモラルは同時に新渡戸を規定するものであったともいえる。

本論前半では「武士」に関する先行研究を概観し、新渡戸の「武士観」の分析と英文“Bushido”の内容の精読によって、新渡戸の精神性と行動原理を明らかにしようと試みた。次に、「植民地」という視点の設定だが、これは「武士道」よりも広範な分析視角の設定が可能となる。第一に、新渡戸が実際に総督府行政官として「植民」の現場で実務にあたった植民地「台湾」の状況。第二に、新渡戸が東京帝国大学で行ない、同時期にいくつもの大学で行なわれていた「植民政策学」の講義を通して見えてくるアカデミズムと植民地の関係。そして最後に、満洲国と新渡戸との関わりである。

植民地に対する新渡戸の視線の分析は、現代のわれわれの植民地理解に関しても考察の手がかりを提供する。植民地統治を「悪行・蛮行」、糾弾されるべき「悪」と無条件に措定する態度、そういった前提から議論を始めることから見失われてしまうものがある。いわゆる､戦前の植民地支配は「よくない」ことであり､「よくない」考えをもった人々がそれに加担していた。そして一部の良識ある人たちはそれに反論していたが軍部の圧迫や時代の趨勢に押し流されてしまった、そのような言説が戦後多勢を占めているが、それが戦前のアカデミズムの状況に対する妥当な説明になりうるのか。戦前のアカデミズムは植民地政策を国策として積極的に肯定し、その施策を推進するための助力を惜しまなかったのである。「先進国の知」を「後進国」へ伝播するシステムとしての植民地という形態が当時の植民に対するアカデミズムの考え方であった。

そして、新渡戸を「武士道」という視点を通して考察した結果見えてきたものは、まず著作“Bushido”は「武士道」を著した著作ではなく彼が日本の旧道徳をキリスト教の精神性というフィルターをかけて拾い出し記述したものだということである。言い換えれば日本の道徳とキリスト教､特にクエーカーの教えとを融合した新しい日本の道徳を提示したといえるだろう。また提示の仕方に彼の比較文化論的思考を見ることができる。特筆すべきは、“Bushido”全篇に共通して流れる彼の多様性へのまなざしである。彼は世界の民族の文化にそれぞれ価値を認め、個々の歴史を尊重する態度をとる。すべての民族に「旧約」があり、そして真理はひとつであるとする。

次に「植民地」から見えてきたものは、彼が時代の要請に応じて行動する人だったことだ。今ある現実から目をそらすことなく、その中でベストを尽くし理想を追い求めることを望んだ人であった。植民地という現状を踏まえながら、台湾の現状をよくすることを追い求め、よりよい植民地像を目指して大学で教鞭をとった。植民政策を教えることは現代でいえば国際開発の研究に従事することであるといえよう。そして晩年の満洲問題に関する言説から見えてきたのは「奉仕」の精神である。彼は「善く生きること」を目指した。我が身を犠牲にしても善きことと信じることを為すことである。それが悲劇的結果を招いた部分もあり、展望のなさ、戦略の拙さという側面もあったかもしれないが､「奉仕の教えはキリストの使命の神聖な基調である」という考えを新渡戸は貫いたのである。

PT におけるプロファイリング手順の構築
—第二言語としての日本語習得の場合—

Judith PRESTON（日本言語文化専攻日本語教育学講座　博士後期課程 2005 年修了）

本稿では、日本語の教育場面に利用可能な言語処理理論（PT）における /JSLA プロファイリング手順の構築過程を明らかにする。第 1 章では、PT の理論の要点を紹介する。日本語の PT の研究に興味があり、Pienemann（1998）の記述への理解にやや困難を感じる第二言語習得研究者にとっては、その理解の助けともなるよう、できるだけわかりやすく記述したつもりである。ただし、言語学および形態論・統語論に関わる用語等については、必要に応じて各種の参考文献を参照されたい。また、第 1 章の後半では、PT の標準的な研究方法として、出現基準（emergence criteria）について説明する。また、出現基準に存在する階層（implicational hierarchy）に関しては、第二言語習得に見られる文法発達の順序を確認するために、対象項目の出現に関する分布分析（distributional analysis）の結果を段階階層表に適応する方法で紹介する。

第 2 章では PT/JSLA に関連した先行研究の結果を参考に、学習者の自発的な発話における文法項目の出現の順序を調べ、言語処理の観点からみてその発達パターンに関する考察をまとめる。先行研究の結果を考慮し、第 3 章では学習者の第二言語としての日本語の発達に見られる言語処理段階構造を紹介するため、PT/JSLA のプロファイリング手順に使う対象項目及びその出現に関する分布分析方法の基準を提案する。さらに、プロファイリング手順の妥当性を調べるために、第 4 章では横断的な研究データに基づき学習者の発話に見られる対象項目の出現が第 3 章で述べる言語処理階層構造に従うかどうかを検証する。ここでは、日本語学習者 13 人の発話を細かく分析しながら日本語習得に関連した PT の理論的な特徴を考察し、学習者の発話データの分布分析の結果に基づいて PT/JSLA のプロファイリング手順で利用した言語処理段階階層の妥当性を検証する。

第 5 章では、日本語学習者の発話における対象項目の出現を抽出するためのタスクアクティビティーの作成方法を紹介し、エリシテーション手順の 2 つの予備調査を紹介する。スタディー 1 では、日本語学習者、バイリンガル、母語話者の発話データによって各タスクがどの程度学習者から対象項目に関する情報を引き出すことができるかというタスク効率の調査を行う。スタディー 2 では、予備調査で観察された学習者の態度とコメントを中心に、面接における実験バイアスの問題とその解消方法を述べる。結章では本論文全体の結果を要約し、PT/JSLA におけるプロファイリング手順の教育環境への応用を提案し、今後の課題等を述べる。

ディケンズの歴史観
――『バーナビー・ラッジ』、『二都物語』、『子供のための英国史』研究――

矢次 綾　（国際多元文化専攻ヨーロッパ言語文化講座　博士後期課程 2008 年修了）

本論文は、人々の歴史意識が喚起された 19 世紀イギリスの社会的、文化的、思想的文脈に注意を払いながら、ディケンズが『バーナビー・ラッジ』（1841）、『二都物語』（1859）、『子供のための英国史』（1851-53）を通して、どのような歴史観を提示しているか、それをどのように小説に書き込んでいるかを明らかにするものである。

まず序章では、ディケンズ研究史と文芸批評家による歴史小説研究史において前掲の三作がどのように論じられてきたか、歴史学者による歴史小説論においてディケンズがどのような位置を占めているかについて詳述する。次いで、彼の歴史観についての考察が 2000 年前後に始まったことを確認するが、単一の作品論の中で論じられているために、そこで指摘される歴史観は時期を限定した見方である可能性を指摘している。本論文の独自性は、従来は単発的にしか論じられなかったディケンズの歴史観について、歴史に関する彼の全作品を俎上に載せてイギリス内外の作家たちの歴史小説や歴史書と比較検討することにより、ディケンズが過去を現在に憑依するものとして描く一方で、歴史は未来に向けて直線的に流れていくという歴史観も抱いていたことを解明した点にある。

第 1 部（第 1 ～ 3 章）は『バーナビー・ラッジ』論である。第 1 章「変化と不変」では、ゴードン暴動に遭遇した人々が歴史的な変化を実感する様子について、バフチンのカーニヴァル理論を援用して分析している。第 2 章「他者の歴史」は社会の中心人物の他者性が描かれている点に着目しながら、ディケンズが 18 世紀末における人々の意識の変化を察知していたことを論証している。第 3 章「歴史記述のフィクション性と狂人」では、スコットの『ミドロージァンの心臓』（1818）と比較し、スコットやその影響を受けたマコーリーと意を異にするディケンズは、歴史を語る価値のないものとして否定したと結論づけている。

第 2 部（第 4 ～ 6 章）は『二都物語』論である。第 4 章「日常化したカーニヴァル」では、ディケンズが特異なカーニヴァルの描写を通して革命期特有の集団心理とそれに対する個人の反応を描出しながら、革命や集団に対する彼の両価感情を表出している点を論述している。第 5 章「歴史編纂」では、ディケンズが歴史編纂と精神分析の要素を『二都物語』に両立させている点について吟味し、彼が為政者の歴史編纂方法に唱えた異議を検証している。第 6 章「フランス革命期を描く小説の歴史性」では、トロロプの『ラ・ヴァンデ』（1850）、バルザックの『ふくろう党』（1829）、ユゴーの『九十三年』（1874）と比較し、英仏の作家の間に革命や歴史そのものに対する態度にどのような違いがあるかを論じた上で、両国における革命に関する意識の違いへ考察を進めている。

第 3 部（第 7 ～ 9 章）は『子供のための英国史』論である。第 7 章「『子供のための英国史』とその背景（1）」では、マーカムの歴史書などと『子供のための英国史』の違いを照射し、ディケンズは楽しい読み物としてこの作品を執筆したことを論証している。第 8 章「『子供のための英国史』とその背景（2）」では、進歩の時代に生きている自負心と懐古主義の両方を保持していたマコーリーが当時の時間意識形成に大きな影響を与えたことを明らかにし、ディケンズもマコーリーと同じ自負心を持つ一方で、懐古主義には『子供のための英国史』と『鐘の音』（1846）などで反発したことを検証している。第 9 章「『子供のための英国史』に描かれなかった過去、現在、未来」では、彼の時事的な記事、『荒涼館』（1852-53）、『クリスマス・キャロル』（1843）と比較検討しながら、現在と未来への憂いが一因となって『子供のための英国史』は執筆されたことを証拠だてている。そして、この歴史書に冠した「子供のための」という修飾語は、よりより未来を迎えるべく過去から教訓を引き出し、現在行うべきことを決めて欲しいというディケンズの読者への呼びかけだったと述べている。

終章はディケンズの歴史観の特徴として両面価値的な見方を敷衍するものである。ディケンズは過去が現在に憑依しているという意識を持ち、復古主義者を批判的に小説に書き込むと同時に、主として帝国主義的な観点から、歴史は過去から未来へと着実に流れているという考えを表明している。このような見方は許容されなければならないが、それは彼が過去のあり方を客観的に検討する歴史家ではないからである。ディケンズは論文の表題に挙げた三作を執筆しながら、過去に対する複雑な思いや同時代の風潮に対する独自の反応を表明したのであり、この点はディケンズが歴史観を持っていたという主張の根拠になると結論づけている。